

10

アムステルダム



創立50周年記念特集号
青山学院馬術部

目 次（敬称略）

巻 頭 言（青木 真次）	1
前部長挨拶（土田 三千堆）	3
前体育会会長挨拶（気賀 健生）	3
監 督 挨 拶（佐藤 一貫）	2
「馬術部50年の歩み」	
良い伝統は尊い（城戸 俊三）	4
馬術部創立50周年を迎えて（井上 恒春）	6
50周年を祝して（伊藤 政天）	6
学生馬衝に思う（印南 清）	6
馬術もできるスポーツマン（鬼頭 弘一）	7
私と馬との思い出（相良 敏夫）	8
学院馬術部創設とその頃の思い出（森 政雄）	9
一枚の写真（川上 憲一）	10
野面をなでる風はさわやかだった（梶 洋之助）	11
私の新人時代（細野 日出臣）	12
昔のこと（中越 鴻八）	13
白馬と共に再興の日々（植松 英二）	14
阿部先生と共に学んだ日々（佐藤 一貫）	16
網島馬場へ移って（高倉 彰）	16
馬匹・馬房・馬場を得て（山田 恵道）	17
はるかなる秋田の日々（波木井 陽樹）	17
私の馬術部生活（秋田 喜和子）	17
「思い出の馬」	
歴代馬匹一覧	
青 峯（藤根 威）	22
青 妃（藤根 威）	22
青 兔（藤根 威）	22
青 翠（藤根 威）	22
青 嵐（佐藤一貫）	23
青 影（佐藤一貫）	23
青 葉（佐藤一貫）	23
青 幸（佐藤一貫）	23
青 扇（田坂 誠）	24
雷 神（三谷 稔）	25
青 蓮（上野洋子）	25
青 将（上野洋子）	26
青 虎（上野洋子）	26
柏 青（小林正樹）	27
「網島新厩舎」	
厩 舎 新 築（沈 迺浜）	30
厩舎新築経過（緑鞍会係）	30
厩舎の歴史（石井健一）	31
「念頭の1・2部合併」（秋元国松）	35

元自治会馬術部主将挨拶（小川 簾夫）	35
自治会馬術部から体育会馬術部へ（荒井 良政）	37
馬術部生活を振り返って（鈴木 敬治）	37
馬術都万才（奈良 義弥）	38
「現役報告」	
47年度主将挨拶（斉簾 比佐郎）	40
緑鞍会挨拶（永井 彦之進）	41
緑鞍会報告（ " ）	41
46年度会計報告（荒井 良政）	41
つれづれなるままに（佐倉 有美）	42
合宿記 前期（屋城 孝一）	45
合宿記 後期（栗原 徹）	45
46年度女子合宿記（金 美春）	46
47年度女子合宿記（古野 啓子）	46
関西遠征記（未金 雅定）	46
福島遠征の思い出（石井 健一）	47
和歌山国体遠征記（板倉 啓文）	48
卒業にあたって（渡辺 しをり）	51
卒業にあたって（溝井 周子）	51
試合記録	52
「高等部記」	
我が奇乗日誌より（吉野 啓子）	57
思い出（吉沢 敦子）	57
ああ高枚三年生（塚原 浩明）	57
「或る日或る時」	
張 間 睡 途 さん	58
伊 藤 正 明 さん	58
山 路 裕 子 さん	59
曾 我 正 晴 さん	59
OB近況報告	60
「現役馬匹の紹介」	
青 ? 号	63
青 駿 号	63
青 貴 号	63
青 苗 号	63
青 冠 号	64
青 朋 号	64
青 蓮 号	64
青 リン 号	65
青 闘 号	65
スズハヤブサ号	66
ウィッチウェイ号	66
編集後記	67
卒業生名簿	68
現役名簿	77

巻頭言

馬術部創立五十周年を心から御祝いもうしあげます。

この五十年は国にとつても、母校にとつても個人にとつても波乱、流転、そして躍進の歴史であり、わが馬術都もその中で時に沈み、時にあえぎながらも今日では部員五十名、自馬十二頭を擁し、専用の厩舎と馬場という活況振りを目のあたりにしてまことに今昔の感に耐えないものがあります。

思えば私達が塚本先生の御指導で、はじめて馬に接する機会を与えられた中学二年の頃、すでに高等部には井上恒春さん、内藤長一さん、古屋信治さん達の大先輩がおられ、つづいて森政雄先輩がそのあとを受けて「青学馬術部」の基礎を固められたのです。それから数えてまさに五十年、この歴史を拓いて下さった諸先輩に対し、茲にあらためて満腔の敬意を表し、併せて阿部先生、古坂先生、大木先生などの歴代学院首脳部の今日に至るまでの御援助に対し厚く御礼を申述る次第であります。

このたび五十周年記念事業として学院当局、緑鞍会、現役が一丸となって総予算七〇〇万円を以て永久厩舎、部員更衣室など新築の実現をみることとなりましたのも、これら大勢の人達が次々に築いてきた歴史の成果そのものであることを想い、感銘まことに深いものがあります。

このよき伝統は、あとにひかえる若い人達によって必ずや永く引継がれて行くであります。しょうし、この「いななき」も古き者、新しき者の心をつなぐきずとなつて、毎号が綴られて行くことでありましょう。

昭和四十七年五月

緑鞍会々長

青木真次



部創立五十年を迎えて部員に望む

監督 佐藤 一 貫 (三十三年卒)

ようやく春めいて来た昨今、念頭の厩舎等の新築も着工の運びとなり、恐らくいななき発刊の時には竣工されて居る事と思う。折りしも部創立五十年を迎えると言う時期に当り、喜びも二重と云う事になる。

さて、監督に任せられて早いもので一サイクルを経て、五年目を迎えようとしている。一つ一つ目的を持って此れ迄曲がりなりにもやつて来たが、幸な事に最大目的の一つである厩舎の新築も出来る事となり、御骨折りを戴いた青木会長をはじめ諸先輩にはお礼の言葉も云い得ない程です。有難度御座いました。

振返つてみますと、戦後、始て白馬を持ち、学内に部創立以来初めての厩舎を建築するに当り、当時の豊田院長には一方ならぬお世話を戴いた事も記憶に新しい。また今回、諸事多端な折、半永久的な厩舎新築の許可を下された大木院長をはじめ係の先生方にも御骨折りを戴いた事も決して忘れる事は出来ない。

我学院運動部の中にあつて、五十年の伝統を持つ部はほんの数える程と思う。

此れ迄、取りたててみるべきものない学院運動部中であつて、学院を代表すべき運動部は我馬術部を置いて他にないと自負すべきでないかとも思う。

五十年の伝統と諸先輩の情熱、学院当局の好意に報いるに現役部員は如何にあるべきかを問われる年だとも思う。

今年、年頭に、今年の目的は基礎造りにあると云つ

たと記憶する。今更にと云うかも知れない。

しかし、真の馬術部員と云うか、馬術人として基礎程大事なものはないと云う事を改めて自覚して貰わねばならない。基礎があつて伝統が維持されると云う事は云う迄もない事だ。後半世紀の為に今基礎をしっかりと固めて置かねば伝統を維持する事は不可能だ。

さて、幸に馬達の調整も順調に進み、春はともかく秋には充分期待出来る事を信ずる。すくなくとも此の春は秋に総合優勝を狙う為の符石の時期だと思ふ。部員個々が自重して一つ一つ積み重ねを以つて部の充実を計り、もつて優勝を獲得する事が諸先輩及び学院に対すると同時に、半世紀に及ぶ部の伝統に報いる現役部員の答えではないかと私は思ふ。

敢えて云うなら、私自身も此の夏には綱島に居を移し、改めてじっくりと現役諸君の活動を見守り度いと思つて居る。

唯、優勝する事の一事を考えるなら、そう難しい事ではないと思ふ。しかし、優勝する事より、その後のチャンピオンとしての地位を如何に維持するかが最も難しい事柄だと云う事を自覚して貰い度い。それは今更云う迄もない事だが、その為には基礎は強固に固めねばならない。唄の文句ではないが、態度で覚悟を示して貰い度いと思ふ。

強い事を云うつもりはない。しかし、改めて部の規律ほ厳守して貰うつもりだ。今年からは甘えほ絶対に許さない。部員一人一人に与えられた責任はあくまでも守つて貰う。監督してここで敢て部員に望み、また特に男子部員に命ずる。四月一日を期して向う一年間長髪を禁ずる。丸競主になれとは云わな

いがその位の覚悟で今年は努力して貰い度い。運動部の部員らしく、また選手らしくと云う事は非常に大切な事だと思ふ。

特に馬術部に於ては常に馬のメインテナンスに留意して、規律を厳守する事を改めて望み度い、と云う事は怠惰な態度で馬に接する時必ず危険が伴うと云う事を胆に銘記して置いて貰い度い。

今年は大転記の時だと云う事と、青山学院を代表する部は馬術部において他にないと云う事を自負して誇りをもって努力してほしい。



回顧

前馬術部部长

土田 三千雄

僕が馬術部に関係するようになったのは、大学が発足して二年目ぐらいだと思つので、かれこれ二十年近く、いわばデクの棒をやってきたことになるか。

今その間を回顧すれば色々なことが思い浮んでくる。はじめの頃は、戦後日も浅く、人間の生活きえもきびしい頃だったから、わずかに頭か二頭の馬さえ養いかねて、部員が苦勞して漸く支えていた。時々、馬のやせた姿をみていたまじかつた。それでも馬を仲立ちとした部員のつながりは強く、その頃苦勞した諸君が今は緑鞍会の中堅として活躍していられることがうれしい。

しかし、この馬術部が今日ある最大の支えは青木会長が存在であつたし、今後もそうであろうと僕は思う。いろいろな時に色々な問題で青木会長を煩わした。しかしその都度、自分のこととして、全力を傾けて部を支えてくれたこの会長の誠意は、私には決して忘れられないものだし、会員一同が終生記憶することであろう。

部員の交友は部の一つの目的でもあるわけだが、こうした先輩の人格というものにふれることが出来ることは部員のしあわせであると僕は思う。

この長かつた部長時代、大して役に立つことが出来なかつたが、僕自身こうしたデクの棒的部長としてのありかたで良かったのではないかと思つている。

今度、部長の役を退くことになつたが、これからは緑鞍会の一員として、今まで通り、気楽につき会つていただきたいと思つ。

最後に、部員諸君には、あくまでも学生らしく、誠意のある態度で、部の運営に尽してほしいと思つ。

馬術部創立五十周年に寄せる

前体育会長

氣賀 健 生

馬術部が創立五十周年を迎えたという。まずはその長い歴史に敬意を表し、心からお祝いをおくる。ひとくちに五十年というが、それほ実に半世紀にわたる長い歩みなのである。多くの青春が謳歌され、幾多の汗と労苦の夢んだ半世紀であつた筈である。この歴史を築いて來られた先達の諸氏も、この歴史の現在の頂点に立つ現投の諸君も、いま大きな喜びごと、そして新たな決意とを以て、暁雲を望んでおられるに違いない。

この記念すべき年に、待望の新厩舎が完成したことも満足の一層大なるものであつたであろう。私は長い間野球部長であつたから、綱島クラウンド運営委員会に出ていて、危険に近い厩舎の状況と、近隣住民の臭気や蠅に対する苦情の問題は、昔から知つている。もっと以前、青山キヤンパスから綱島へ、厩舎もろとも馬術部が移つたときのいろいろなきさつも覚えていた。

しかし、あれから幾星霜たつて、今や乞食も住むことを躊躇しかねまじきボロ小舎となり果てた厩舎が、選挙されて紛争の最中に体育会長となつた私の前にあつた。

三年前のことである。以来、任期三年の間、このボロ厩舎と近隣住民の苦情の問題には悩まされ続けた。部の方からは改築を迫られるが、あいにく紛争中のこととして、大学執行部はともクラウンド関係にまで、手も配慮もとどかない。金もない。然し、何事もそうであるが、こゝでも最後は当事者の熱意がことを解決し、立派な果を結んだのである。就中、監督の佐藤君の忍耐強い熱心さには、敬服の他はなかつた。節度正しく、ひかえめに、しかし実に根気よく追つてくる熱意には脱帽したものである。恰度いろいろの条件がうまくいって、宿題を果たされたことは、部関係者の満足もさることながら、私にとつても大きな喜びごとであつた。ことにこの厩舎改築

が私の体育会長としての最後の仕事となつたことは、長く私の記憶の中に、うれしい印象として残ることである。

私はこれまでは馬術部に直接関係したことがないので、体育会長を三期もつとめながら、正直のところ、こんなに長い伝統を誇る部であることすら知らなかつた。しかしたまたま厩舎改築に関連して、佐藤君やOB会長の青木氏その他の方々を知ることとなつた。その青木氏は、私が媒酌をしたポート部の青木君の叔父上であるし、また考えてみると私の最も尊敬する先輩のひとりである土田教授が、実は長年にわたつて部長として、この部を指導されたのであつた。それにどういふ風の吹きまわしか、今年私の娘が高等部の馬術部にいられたとき、お世話になることと相なつた。思いもかけなかつたが、今や因縁浅からぬこととなつたわけである。こうなつてみると、私の任期中に、厩舎改築の仕事をしておいてよかつたといふことと思つ。

私事にわたる感想を交えて恐縮であるが、部を身近に知り始めた者の弁としてお許し願いたい。創立五十周年のお祝いの言葉を、求められるままに前体育会長として通りいつべんの祝辞をつらねるといふだけでは、気がすまなかつたまでである。

歴史はただ長きを以て尊としとしない。伝統は常におのれみずからを超越する創造を伴う。創造なき伝統は因習に過ぎない。歴史は展望に指導精神を与えるが、また展望こそが歴史を書きかえるべき精神の源泉である。來るべき半世紀の馬術部の歩みが、過ぎし半世紀の馬術部の歴史を、真につくものであることを願つてやまない。大いなる展望と躍進と、そのために流される労苦の汗が爽やかな精神の成長の投影であることを祈る。

千里の道も一歩より始まる

馬術部五十周年の歩み

特別寄稿

OB寄稿

城戸俊三	井上恒春	梶洋之助	佐藤一貫	秋田喜和子
印南清	伊藤政夫	細野日出臣	高倉彰	
鬼頭弘一	森政雄	中越鴻八	山田恵道	
	川上憲一	植松英二	波木井陽樹	

良い伝統は尊い

城戸俊三

青山学院大学馬術部が誕生して正に五十年と開いて運営上、いばらの途を通ったに違いないが、よくもこころまて来たものだと思ふも、敬服する所である。

大学の馬術部は年々古参者を送り新入生を迎えるという環境のもとでは、馬術一途の見方からすれば容易な教え方ではない。まして馬を飼うには経費がかかる。乏しい予算でやって行かなければならず、部員には乗馬を上達させたいのに、人数の割に馬が少なく、個人の上達を望む許りか、魅力ある馬術競技会で他校の選手に勝ちたい。それに馬のコンディションを悪くしないように注意しなければならぬ等々、多岐な条件の下にやると今日に到ったのを追想すると、これは一つに先蹤の事跡を汚すまいとする部員の努力、先輩が後輩の為面倒を見ようとする愛情、誰もがあの馬、この馬という風に馬を可愛がる心の結晶で築いて行ったのである。これは伝統となつたと見るべきで、まことに尊いものだと思う次第である。

この伝統をいやが上にも栄えるものにする事が、これからの部員に課せられたことではないだろうか。幸い本学には常任として老練な阿部さんが控え、珠のほか馬好きのよき先輩も多くおられる。(瀬島さん 巻島さん)



等々) それに今では馬も随分と充実された由であるから学生馬術としては、大変恵まれた方だと思ふ。部員にとつて一番大切なことは「求めて指導を仰ぐ心の態度」だと思ふ。この上の後段の指導進言は、日本馬術連盟で考えてもらいたいものである。

部員に対しては、何とかして馬が好きになつてもらうという考えで行くのが常道ではないだろうか。競技会で良い成績を得るのは楽しみである。また奨励の手段ではある。運動部として馬術部は何だと言われたくない。然し、競技会で良い成績を上げるのには、実は非常なる忍耐が必要なのである。兎角、部の人は早く、より早く競技会に出したがる様に見受けるが、これは不利益である。というのは、第一馬の調教で障害物を飛ばす。馬は平気で向つて行く。止まる事を知らない。避ける事も知らない。棒に足がふれて落すことがあるが、これは仕方がないから気にしないという風に仕立て上げるのが上策である。これには忍耐・我慢が最も大事で長く長く低い障害物通過で馴らす、絶対に障害前で止まる事を覚えないうして避けることなどを知らないという風に、今年も競技会に出したいが控えて来年こそ出そうという我慢で調教に従うのが宜しい。兎角、競技会で自分の馬が勝つてくれという観念は極く大事だけれども、そこを我慢をし、その代りこの次に出場させれば無失点という馬に仕立上げ得るものと思ふ。

ペイシャンス、ペイシャンス、モア・ペイシャンスといふのが欧米の大家が障碍飛越調教のモットーとしているのを胸に入れて欲しい。これは馬場馬術の調教でも然りである。

永い伝統の中には期によつて隆替が見られる。世界で有名な古い伝統を有すフランスのソミュール騎兵学校の教官馬術団と四百年続いているオーストリア、ウィーンのスベイン乗馬学校の馬術にも見られるのであるが、その盛んな、または優れた時代には必ず指導者の人様、技量と熱とが原因した様に察している。

私は寡聞忙して広くは知らないが青山学院大学馬術部では、終戦後のあの最も苦しい時代に先輩と学生が打つて一丸となって馬術部再建のために、したあの情熱、また平木、榎本、福原女子等が関東女子馬術連盟を創設する際の熱意と根気には敬嘆したのであった。

当時から数年続いた青学の馬術部の急激に上った成果は目を見はらせた、と信じている。平木女子に接して、その馬好きと、馬を仕込む腕前の卓絶していること、他人の欠点を言わぬ事、極めて謙遜であることなどを知るのであるが、コーチとしては他に比すべくも無い人だと敬服したのである。都の運営上致方がなかつたであろうが、少しでも早く、一馬を競技会に出そう、選手の進歩の爲なるべく早く選手として出そう、とする気配があつたのではないかと思わぬでも無いが要するにコーチに人を得ることは何よりも大事な事で、コーチには真に乗馬は、かくかくの順を追つてやるべきだとの原則的なことを知つた人を得たいものである。

合衆国の国際障碍飛越選手団は十年位、元ハンガリーの騎兵士官のド・ネムスイ氏をコーチに頼んで其の指導下に進歩させた。其の成果は果然世界の一位を争うチームを作り得たのは、まさにコーチに人を得るといふ証左と言えよう。

貴ぶべき伝統の護持

高等馬術用の馬の調教はなまやきしいものではない。北欽スウェーデン人は国民よく馬に関心を持ち、その騎兵学校は高等馬術の国際選手を生んだ。その伝統は今も続いている。ソ連は帝政時代一九〇〇年頃から、その陸軍騎兵学校にイギリス生れだがフランスで育ち馬術の極意を悟つたジェームズ・フィリス氏を馬術科長に迎えて約十年其指導を受けた。革命騒ぎでこたごたしたたであるが、現在国際馬術競技やオリンピックに参加する高等馬術選手の技量は優れたものだが、フィリス氏の脈をひいているとのことである。ドイツは一九一四年の第一次世界大戦の始まる前までは一つは同国ハノーパーの陸軍

騎兵学校、この学校は一八一〇年位に出来たものだが、ここでは高等馬術に教官が専念し、また一方カイゼルの皇厩で其調教師に馬術をやらせた伝統が残っている。即ち一九三六年のベルリン・オリンピックの高等馬術の優勝各が乗つた馬は皇厩調馬師であつたオットー・レルケ氏の仕込んだ馬であり、同氏の仕込んだ馬二頭が一九五六年のストックホルム・オリンピックでは団体優勝をした。ベルリンの時の二位は同国騎兵学校の馬術科長であつたのは貴ぶべき伝統の例と見るべきであろう。

フランスでは一六〇〇年の初めアンリ四世の時、王厩が始められルイ王朝に続いている。一七一六年その馬場の主任だつたド・ラ・ゲリニエルという人が諸流角逐、我流横溢の仏国内の馬術界に一つの光明を投じた。それは一馬術書の発刊である。これは馬術の原則を馬の自然を尊重し人為的に馬を仕立てる一大指針となつた。ルイ十五世の孫シャルル十世が王位を継いだ翌年の一八二五年に今迄ヴェルサイユ宮殿附属王厩の馬術班の一部がリミユールの田舎に陸軍騎兵実施学校の創設と共に移つて軍隊馬術を行うこととなつたが、この学校の士官学生は十ヶ月修業で高等馬術は教育されず軍隊向の実用馬術の基礎を教えらるるに過ぎなかつたが、その教官は教育に携もると共に前記ゲリニエルの馬術方式を仏国流馬術の基本の金科玉条として、高等馬術馬の調教、乗御に専念して今日に到り百五十年の歴史を見るのである。

オーストリアでは一五七二年八月皇帝マクシミリアン二世がウィーンの王宮の一部に馬場を創設しフランスの王朝の様に皇帝自身のほか貴族、近臣に馬術を練磨する



ことにしたのが起源であつて再来変わることもなく今日まで其馬場と王厩は続き、馬術の方式は前記フランスのド・ラ・ゲリニエル氏の原則を厳守し高等馬術の枠を顕現している。

ウィーンのこの馬場は英語では スパニッシュライディングスクールと称している。このスクールを学校と訳するのは至当でないと思ふ。

スクールは馬術という意味また流儀の意もあると信じている。それはさておき、スペインと何故に名付けたか、それは開設の当時、また其後もスペイン南部地方アンダルジャ産の馬を基本馬とし多数用いたので皇帝は斯く名殊を与えたのだということである。

馬場創設と同時代マクシミリアン二世の皇弟カルル大公はやはりスペインから多数の種馬を輸入し其領地のリビツアという寒村を牧場とし、繁殖を図りその出来た馬を前記の馬場に補充することにした。この馬はリビツア種と呼ばれているが、これもそのとき以来現在に引継がれている。誠に稀らしく素晴らしい事ではないか。

現在のウィーンのスเปน乗馬学校否スเปน馬場の建設物は皇帝カール六世により一六五六年から六年を費やして出来た素晴らしい宮殿風のものである。

オーストリアでは別に存在した実用馬術のための陸軍馬術教官学校が第一次大戦とともに消滅したがこのスเปน乗馬学校は戦争、革命、まさに四百年の歴史の風雪を乗り越えて一意専心高等馬術だけに精進して今日に及んでいる異彩な存在である。

本年はこの由緒ある馬場建設以来四百年目に相当するので六日間に亘る大規模な馬術祭典が行われ大統領が開会の賛辞をのべられるとのことであるのを開いても豪華な歴史に残る催しとなることは想像に難くない。よき伝統というものは、ほんとに尊いものだと思う。

緑鞍会会長の青木真次さんは、北欧出張の機に何とかして、この祭典に出席したいものだともらしていた。

馬術部創立五十周年を迎えて

井上恒春

『いななき』四十二週年記念号が発行された時、母校の馬術部が生れた頃の様子を思い出すままに記しました。その頃から早、半世紀に亘る五十年の歳月が流れていると思うと全く篤きであります。

私共が蒔いた、ちっぼけな種をここまで育てあげるには、幾多の部員が絶えまない努力を続けてきたからこそ、今の繁栄をもたらしたのであって、私共が五十年前に何とか形だけでも造りたいと願ったその頃、現在のようになり成長するとは夢にも想像しませんでした。なるほど当時二十才のいかす男も今や七十才の老ぼれになった訳で、自分の年を見直してがっかりする次第です。

さて、四十二週年記念号に載っている部員数は、その当時の現役部員を含めて約二百五十名位だったと記憶しております。現在では恐らく三百名乃至はそれ以上の大世帯に発展したのですが、それらの人々が長い間にいるいるの形で夫々貢献されたことだと思えます。何の野心も抱かず、ひたすら馬を友とし、ちよっぴり恰好の云い己れの乗馬姿に得意になる位で、只それだけに満足しながら、次々にバトンタッチしてきたのであります。

他人に銜うことなく、飼糧を得るために文句ひとつ云わず、しないでいいアルバイトをかってでる若人を想うとほんとに心温まる思いがします。

人間と馬のつながりが、どうしてこんなに魅力があるのか全く不思議でなりません。今や物質文明がもたらした自然の荒廃に人間が漸く気づいて、自然の尊さを何とかとり戻そうと見直されてきた今日、馬らは、愛情を注いでくれる諸君に何とか云って語りかけるだろうか。自然の美と尊さを解ってくれるのは君達だと語るにちがいない。

さて、次の記念日は恐らく十年後だろうか、また年の

話をもち出して申訳ないが、その頃私は八十才に達します。自分では今と同じようにすんなり生きてゆけると思いますが、若しその時健在でしたら、最高年令部員として大いに祝ってもらおうと考えております。最後に緑鞍会が今後ともますます発展されんことを心から希っております。

五十周年を祝して

伊藤政夫

馬術部創立五十周年を皆様と共に祝い申し上げます。少年老易く学成り難しを地で行った私、登校日は目醒めないが練習日の朝は自然と目が開くから実に勝手なものだ。從而卒業まで手が廻らない。

それで卒業が出来た事も不思議と云わざるを得ない。自馬を保有する事は苦勞や問題を伴う事と思う。然し三度の飯より馬、馬、話を聞くだけで胸躍らせた昔時に比し汗、埃、油の入混じった臭いと共に起居出来ることは馬狂にとり楽しくも幸な事ではなからうか。

早馬利用時代と異り自馬による練習量には自ら限度が有ると思う。星明りに家を出て脊の明星を背に家路につく雨の中、雪の日の訓練もあつた。それで少しも苦にならない。次の練習が待ち遠しいのだ。

私は三越入社後、同志と共に希望の部を創設した。当時乗馬は贅沢な遊び位に思われ、嘶りと羨望とが入り混じった妙な雰囲気の中で練習をしたものである。

予備将校入隊者が部員に居た。彼等が入隊後訓練の成果を發揮し優秀な業績を収めて居る事を知り微力ながら幾分でも国家に役立ち且会社の面目を同時に維持出来た事に満足感を覚えたものである。

社会人となつてから練習が続いた。理由は偶然にも女房の父親が曾って騎兵隊の教官であつた。遊佐、城戸、今村、西号、々たる教官が後輩と云う事情もあり比較的

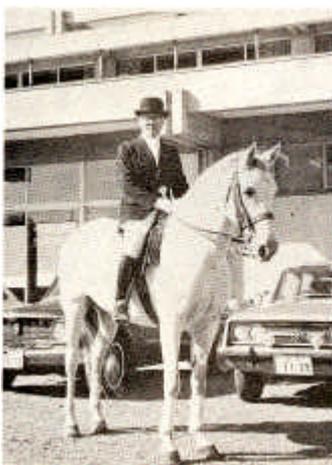
家庭に於ける理解もあつたのだと思う。馬は実に可愛い従順な動物だ。

愛情と忍耐を以つて接すれば私達の意の儘に動いてくれる。馬に限らず対人関係に於ても然りではなからうか。私達は敗戦と共に全てが泡抹の夢と化し、失望と混乱、ともすれば人情、道義までも失なわれ、の時乏しさに耐え抜き、今此処に輝かしい五十周年を迎えるに際し、会長を始め関係者、部員諸士の不断の御努力の賜と感謝申上ぐる次第である。

尚、次の半世紀に対し一層の熱意と研究を傾けられ伝統ある吾部の躍進に努められん事を切望する者である。終りに先輩並びに後援者、部員諸士の愈々御隆昌を御祈り申し上げます。

学生馬術に思う

印南清



一、学生馬術の問題点

学生馬術特に大学馬術部は非常に困難な問題を背負わされていると思う。

第一の困難は部運営資金の調達であろう。どんな裕福な学校でも部の所要経費の全部を学校当局で賄なってくれる所は先づあるまい。中央競馬会が日馬連を通じてくれる補助金も近年稍増額されたとは云い、所要経費の不足を充たすことは到底出来ない。勢い学生は止むを得ず、学業をギセイにしてアルバイトをしたり音楽会を開いたり、或いは先輩の門を叩いて援助を乞うという様な気の毒な所業に出ざるを得ない。

これも若い 業の一つと云えば確かにその通りであつて、この苦勞を乗り越えたればこそ、馬術部出身には有為の人物が多いということも言えるのであるが、もう少しこの金の面での苦勞を軽減出来ないものだろうか。

第二の問題点は既当番の問題であろう。馬術に志ざす者が馬の生態をよく知るといふことは、大変大切なことで、その為には、自ら馬の手入れもし又馬と起居を共にするのが近路であるのは言うまでもないのであるが、唯学生の場合、毎週一回乃至二回厩に起居しその間学業を或る程度ギセイにせねはならないということとは、余りに惜しいと思う。

第三の問題は優秀な指導者が得難いという点であろう。

第四の問題は、馬術部は特に時間と勞力を多く要するという点であろう。

これは残念ながら今の所如何とも致し方があるまいと思われるが、反面これがあるが故に、強健な体躯と強靱な精神と豊かな情緒が養なれるのではあるまいか。

以上の外最近に於ては、公害問題が必要以上に大げさに取扱われる結果、都市内は勿論その近郊にある馬場及び厩の移転問題に悩まされている学校も少くない模様である。

二、対策私案

その一 乗馬倶楽部との共存

最近乗馬ブームの気配と共に各地に大小乗馬倶楽部の新設を見るが、一方既成乗馬倶楽部の中には、環境衛生その他の関係から、他に移転を余儀なくされているものが少なくない。

此の際に於て私は大学馬術部のためにも、又移転を必要とする又は新設を企画する乗馬倶楽部のためにも、両者共存すべきことを提唱するものである。

勿論これには色々な問題点がある。しかし、公立学校は兎も角、私立学校で馬場の収容力がこれを許すならば、学校側としては前述第一、第二、第三等の現在馬術部として直面している難問題の全部とは申さぬまでもその大部分を解決し得るの良策として一考に値する問題であり、乗馬倶楽部側としては当然相手の施設使用料を支払い、厩の監視、学生指導の一部を引受けることにやぶさかではあるまい。

その二 各学校馬術部の大同集結

狭い国土、発展する社会機構の下では、同種の企業、同じ目的を有する団体等が、全国では幾つかのプロックに分けられるにせよ、一ヶ所に大同集結されることほ自然の帰結である。

馬術施設の如く比較的広大な地域を要し、その上一般に環境衛生上有害なものと考えられているものは、今のうちに今のうちならば何とかなる。

例えば、競馬場とか総合クラウンドとか公園の一角とかに交通の便その他を勘案して各学校のものをブロック毎に大同集結すべきであると考え。かくすることによつて、前述の如き諸困難の解決も比較的容易になるのではあるまいか。

三、むすび

之を要するに、世の中は激動しつつある、此の辺で思い切った施策を断行しないと、学生馬術の困難さは愈々深刻になるであらうことを憂える者である。

馬術も出来るスポーツマン



鬼頭 弘 一

明晰な頭脳と強健な身体のとちらかを、と言われたら、僕はためらわず強健な身体を選ぶだろう。それは、強健な身体には、少くとも人並の頭脳が付いているもの、と思つてゐるから。

では、馬術が強健な身体を作ると言つと、いささか疑問を感じます。それは、上半身と下半身のバランスの点で、僕がこれに気付いたのは、スキー連盟のスキー指導員サーキット・トレーニングでの体力測定の結果からで、上半身に比べ、下半身がかなり持久力と弾撥力が劣る事です。

何人かの馬術選手を測定してみたが、やはり同じで、直シヨックだった事は、馬術こそ一番秀れていると思つていた平衡感覚が必ずしもそうでなく、静的バランスは確かに良いが、動的バランスの点では、他種目の選手の平均程度しかありません。

これは、平行棒運動のような比較的動きの少ない状態では秀れていますが、浮動板や回転ベルト等の動きのある変化に、すばやく対応させる事は不得手だと言つ事です。

この動的バランスの良いのがスキー選手で、次にテニスの選手、そして水泳の選手と上位を占めております。

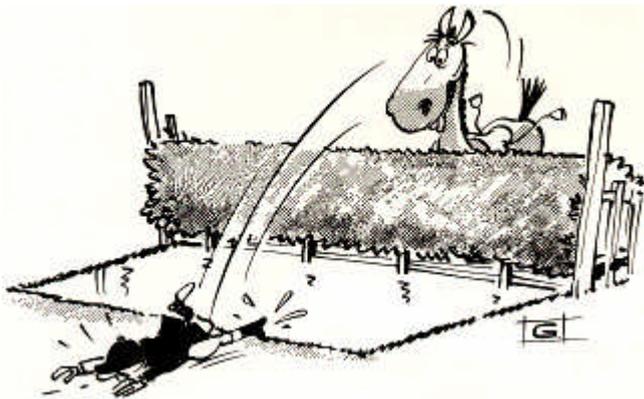
そして動的・ハランスに必要な事は、秀れた平衡感覚（スキー）、身体を対応させる為の強い筋力（テニス）、柔軟な身体（水泳）です。以上の事から、特に女子選手に多いのですが、馬場馬術では結構サマになっているのに、障害となるとポロリポロリというのもしんな所にも理由があるように思えます。

では、どんなトレーニングが良いかというと、条件を満足させるサーキット・トレーニングが考えられますが、続けなければ効果がありませんので、やはり趣味として楽しめるスポーツとして行う方が良いでしょう。その方が、メンタルな面での行きづまりの多い馬術にとつて、良い気分転換にもなるでしょう。従って、スキーと水泳を、色々な面で馬術と平行して行うスポーツとして勧めたいと思います。スキーは、馬術のシーズンオフ（大会が開かれない）の冬のスポーツですから、行い易く人間関係をも楽しむスポーツとして最適でしょう。水泳は、都営の体育館で一年中、百二十円で二時間、夜間九時迄泳がせてくれ、スチーム室、バス等完備しています。真冬、雪がチラチラ降っているのを眺めながらの水泳は格別で、馬術の大敵の、太股・パン・パン、下腹ブツクリともオサラバなのも嬉しい限りです。

馬術家は、競技の時のみ顔を合わせる関係が多く、精神的な要素が多いスポーツだけに、常々馬術家同士の話し合いの場が必要と思っております。毎年、私は井上喜久子夫人、川口安一氏等他、他クラブの若い馬乗り達と、スキー・パーティーを定期的に持っておりますが、真の馬術情報の交換は、スキー宿でなされる事が多く、その得る所も大です。

そんな事から考えて、馬術競技の後には必ずパーティーを持つとか、定期的に馬乗りだけのパーティーを開けたら良いのにと考えさせられます。又、スキーの楽しみに、ヒュッテン・アーベント（アフター・スキー）のパーティ

ーがあります。余興のゴーゴーなどで、上手下手を別にして、上手にリズムに乗るのは一流選手の順で、リズム感を養う事が馬乗りには必要な事だと思えます。以上、スキーの利点を挙げましたが、前記、井上・川口の大ベテランの御両名が行っている事からも御一考下さい。馬術こそ老若男女を問わない点で、ライフ・スポーツとして最適ですが、現実には、学校を卒業したらオサラバの状態です。その意味からも、馬しか乗れないスポーツマンでなく、馬にも乗れるスポーツマンとして、幅広く歩んで行ってもらいたいと思えます。



私と馬との思い出

相良 敏 夫（大十五年卒）

それはもう五十有余年も前のこと、私が小学生の頃にさかのぼる。当時父の友人である檜原と云う陸軍少佐が拙宅の近くに住んで居て毎朝別当を従えて乗馬で三宅板の陸軍技術本部へ出勤して居た。文官の父は電車で三宅坂まで通ったので当時の少年の目にはその乗馬姿に一種畏敬の念をもったのも自然である。時折は檜原少佐の庭先で別当に抱えられておそるおそる馬の背に乗り引馬をしてもらった感激、大正四年か五年頃のことと記憶している。

馬へのあこがれと周囲の状況（伯父と従兄が陸軍将校）もあり中学二年の折幼年学校へと志したが見事近視がたたり落第。

大正十三年青山学院の「ガリ勉コース」である英語師範科在学中、商科の久保氏（現姓古谷）に誘われて一も二もなく馬術部に入った次第。

当時は学校に自馬は無く（学習院と農大は例外）、毎日曜日、市ヶ谷の陸軍士官学校で練習。馬術大会も士官学校で行われた。

又十二月の冬期休暇、八月の夏期休暇には習志野の騎兵第十四連隊で合宿練習を行った。騎兵隊の馬匹は士官学校のものとは違い相当手荒いので夏、稲毛海岸での水馬演習で波間にほりり出されたり、雪の降る習志野の野外騎乗でひっかけられるやら誠にエピソードの多い合宿生活であった。

大正十五年学院を卒業、社会人となって久しく馬と遠ざかって居たが、昭和十七年頃（太平洋戦争時代）から私が仏領印度支部（現在のベトナム、ラオス、カンボヂヤ）で日本タイプライターの西貢支店長の時、又馬との縁が出来た。

当時の南方総軍（軍司令官寺内元師）の依頼で総軍囑

託となり「ラオス」の「バクソン」に滞在、総軍の徳安司政官が政治、大林少佐が警備、私が経済と通訳官を兼務していた。

仏領印度支部全般にわたって云える事であるが幹線道路は誠に見事なコンクリート造りで、日本では当時見当らない様なものであった。しかし一步支線道路に入ると徒歩に頼るしかない。そこで登場するの通称安南馬、馬高の小さな馬、騾馬ではなくポニー一種に属するものと思われるが誠に動作敏捷、反動細かく乗りにくい馬であった。

しかし慣れてくると小型の為か可愛く、人なつっこい馬でコーヒー、紅茶の栽培園を巡視したり部落巡りには又となり格好な乗物であった。

これが私と馬と親んだ最後であった。

昭和二十一年六月帰国以来は多忙と共に馬と遠ざかったことは、誠に淋しい事である。

甚だ断片的な私の思い出話、講読多謝。

学院馬術部創設とその頃の思出

森 政 雄 (昭二年卒)

「いななき」の発刊に当り馬術部について何か思い出をとの要望に応え既に当時から五十年近い歳月を経ているので記憶に誤りがあればお許し願って当時を回顧して断片的に綴ってみました。

確か大正十三年頃と思うが学院先輩の森卓爾、井上恒春両氏及び古谷信治、古賀丈夫君等と図り馬術部の前身である乗馬クラブを創り代々木の井上乘馬クラブで練習に励んだものであった。

当時都下の各大学、専門学校でも等しく乗馬に興味を持つ者が集り各校共馬術部を発足させていた。吾が学院に於いても、その後古谷君を部長に推し、ここにクラブ活動の一つとしての馬術部が創設されたのであるが、何分井上乘馬クラブでの練習では部員一同物足りなく、又金もかかることとて古谷君と図り習志野騎兵十四連隊に

至り当時の連隊長山内保次閣下(当時中佐)に懇願し遂に各日曜日毎に同連隊に放いて練習することが許され、部員一同勇躍これに駆せ参じた訳である。

当時部員は高等学部生徒に限られていたが学院中等部がその希望者も多く、これ等をも参加させるに至ったのである。

夏期、冬期の合宿の他に水馬訓練、更には聯隊演習の年賀城攻略にまで参加を許され、同聯隊の当時の中隊長田村理七中尉(その後閣下となる)のご懇切な指導の下に部員の意気も頗る昂ったのである。

古谷君卒業と共に不肖私が部長になり、新入部員も益々増加し、同時に大学、専門学校二十余校で組織されている関東学生乗馬協会に加盟し、同協会の幹事となり、従って各校参加の騎兵学校の撤 競馬或は陸軍士官学校の競技にも出馬する機会も多く、部員等しく常に優秀な成績を挙げ得たのである。これ一重に習志野騎兵聯隊の指導訓練による賜ものである。

特に感銘深かったのは関東学生乗馬協会と京都学生馬術連盟の対抗競技に際し、私が関東学生乗馬協会の代表として団長に任じられ、正選手十名、補欠三名を引卒し岡本大尉同行の上京都へ向う折、東京駅頭に前記山内保次閣下の他に関東学生乗馬協会の各校馬術部員三百名を越す人々の盛大な見送りをうけ、勇躍京都へ出発したが、この選手団の内容が学院馬術部々員の青木真次、内田信正の他に確か杉立の三君が含まれていたということは如何に卓越した技量をもつ部員を多く擁していたかを物語るものである。

忘れもしない。それは大正十五年九月京都練兵場の空は一点の雲もなく、漸く駒、正に絶好の大会日和であった。この時久邁宮多義王殿並びに妃殿下の御臨場に京都師団長南次郎閣下及び幕僚の御出向の裡に正面の御座所に御着席になり、午後一時開会式が行なわれた。南師団長閣下のご斡旋により関東学生乗馬協会を代参して小生と京都学生馬術連盟代表松岡新平の両名が鳥谷閣下の先導にて久邁宮兩殿下に拝謁したことは学生馬術界にとつて非常な光栄であった。

乗馬用長靴・高級保存型・軽便保存型一拍車及巻バック

創業 60 余年

有限会社 東京稲毛屋

東京都渋谷区神宮前 6-11-7 ☎ (400)5929

代表取締役 広山 二郎

襲て万全の観客の前で関東、京都との対抗競技が開始された。両軍とも一粒選りの猛者揃いのごとて白熱化した。善戦奮闘の結果我が関東学生乗馬協会が三十余点の差をもって月桂冠を授けられ、再び優勝旗を持って歓呼に迎られ、東京に凱旋したのである。

このことは私として共に当時の選手諸君にとっても大きな感謝の思い出のことと思う。

私も学院を卒えて関西に、又地方にと居住していたので、その後の学院馬術部の消息を知るよしもなかったが、再び東京へ帰り青木真次君が馬術部会長として非常な努力を傾けて居られることを聞き、大いに意を強くすると共に満腔の謝意を表するものである。

最後に学院馬術部の歴史の上に裏に述べた元騎兵十四聯隊長の山内保次閣下並びに直接訓練に当られた田村理七閣下の御協力御支援がなければ、今日の学院馬術部の隆昌はあり得なかつたのではなからうかと附記して筆を擱く。

尚両閣下共に御健在で今以つてご交誼を賜っています。

一枚の写真

川上 憲 一 (昭四年卒)

この古い写真は昭和三年頃、今から四十四年前のものである。撮影場所は暫く前までオリンピック選手村のあった所で、当時の代々木練兵場である。右端馬上の女性はその当時学院で英会話を教えて学生の人気者であったウイスコンシソ大学出のミス・コウ。それと馬術部の人達には特に興味あると思われる現OB会長青木真次君の学生姿である。

ミス・コウとは現在に至るまで年数度文通して居り、今フロリダにブライス夫人として健在である。青木君とは月に一、二回ホテルなどで会合して昔話などする習慣が今でも続いている。私の馬術は全く中途半端なもので、時々馬術部の連中の後にくっついて日曜日に士官学校へ

市ヶ谷へ、習志野騎兵聯隊、赤坂見付の憲兵隊などの馬に乗せてもらった程度であった。当時学院には青木、内田、緒方といった名選手が居り、三人は必ず関東、関西対抗馬術競技の代表に選ばれて居た。従つて馬術部は学校の中でも仲々羽振りがよかつた様に記憶する。

当時は学院運動部の創設時代で、我々より少し上級の京極、船木氏等がラグビー部を始め、関西学院と定期戦が出来た様になつていたし、ここでも青木君は田川、中村(五)両君と共にトライゲッターだった。また我々は青木、遠藤、中司君達とバスケット部を創り、スポールディングの本など参考にしたり、今の短大枚舎前に室外コートを作り此処で練習する我々にお隣りの女学院の二階から女子学生が声援を送つてくれたりした。だが我々は卒業する迄対外試合に勝つた記憶がほとんどない。

当時の青山学院は勿論学生数も少く、万事家族的であった。そこには文科とか商科の境もなかつた。特に外国宣教師の家族が多数住んでいたのが非常に特色のあるものだった。E・T・アイグルハート、ヘッケルマン、マートン、ゲリー、ペリイミス・ムーンといった人達。



子供達も我々によくついていた。アイグルハートの家では毎日曜日夜が訪問日となつて居り、我々は青木君と一緒にここでも又定連だった。学院以外からも参加者が居り、日経の論説委員の土屋清君の顔も見えた。彼は当時の帝大の学生だった。ミス・ムーンの日曜パイブルークラスには二、三百名の若い人達が集り壯観だった。

日本人教授陣も仲々充実したもので随筆で有名な別所教授、英語では多数の外人教師の外に和田、松原、船橋岡田、牧といった一流英文学者が居り、前記アイグルハートは和文英訳をもち夏目漱石の「硝子戸の中」を教材にして教えていた。ピンと背を張つたフランス語の丸山順太郎教授の姿も構内で見掛けた。

我々と同年級の学生では商科で現院長の大木先生、師範科には向防教授、現在三菱商事重役の江森君達、私のクラスにはシエクスピア研究家の三神教授やカレッジソングの作詞(松本君)作曲(小林君)が居た。又一年下の文科には春木教授も居た。我々は適当に勉強し、スポーツを楽しみ、キリスト教的雰囲気浸つて我々の夢多き四年間を過したのだが、我々が青山に学ぶ事の出来たのを素晴らしい幸運と今でも感謝している。

野面をなでる風はさわやかだった

梶 洋之助

こんな事は初めての経験だった。腹這いになって海面に顔をつけて両足をバタバタさせるのなら子供の頃から海水浴でよくやったことだが、顔を海面に上げて前方を見ながら置去りにされないように付いて行かなければならないのだから大変だ。左手は左手綱を右手は右手綱とテガミを握って、自分は馬から降りて左側に添って泳いで行かなければならない。馬はアゴを出した恰好で海面に顔を上げて前方を見ながら泳いで行くのだから、手綱を余り締めてしまつわけにはいかない。といって緩めすぎたのでは馬は自分勝手の方向へ行つてしまつから、馬を逃がさないように適当に締めていなければならぬ。それに馬は耳に水の入るのが嫌いなので、それも注意しなければならぬから、ただ一人で漠然と泳いでいる様なわけにはいかない。とにかく、この時に初めて水馬というものを経験したのだった。

それは大正十一年（一九二二年）の晩春に初めて馬に乗った頃の事ではない。それから三年位経たある暑い夏の日の事であった。

小さい頃活動写真（大正の頃には映画のことを活動写真と言っていた）の西部劇でウィリアム・S・ハートやダグラス・フェア・バンクス等が颯爽と西部の高原を駆走しているのを見て、あの様に馬に乗って駆けることが出来たら、さぞ愉快であるかと子供心に思っていた。それが青山学院の中学部に入ってから思いがけなくも実現されることになったのだ。中学一年の時だった。

しかし、初めての乗馬の催もトラブルが起つて学校当局からは以後中止の命令が出された。現在中学部で馬術部が出来ないのは、この五十年前のハブリンクが原因になつていないのだろうか。

そんなわけで学校当局からは中止命令が出たが、一度

馬の味を覚えてしまった私達は今更止めることは出来なかった。学校には内証で馬きちがい数人は内密に打合せで、殆んど毎日曜には早起して両国駅に集合して（当時は両国駅が総武線の起点だった）習志野の騎兵第十四回連隊の軍馬へ乗せて貰いに行ったものだった。

私達を指導して下さったのは田村中尉（当時の官位、現在も健康で働いておられる）外三位の若手将校や下士官の方々に、日曜の休みを返上して私達を訓練して下さいました。

最初は管内（連隊内）の馬場で、蹬上げで三十分位しぼられ、並歩に戻つてやれやれと一息ついていると十分位して又蹬上げで三十分位しぼられるという様な軍隊式の強引な訓練で、それが終了すると馬の手入れをして昼めし代りに酒保（軍隊内で飲食物や日用品を販売している休憩室）でそばや冷ヤツコを会へ、一服と言いたいたいところだが、その頃はまだ煙草は誰も吸っていなかったの一休みすると又午前中の同様な訓練をするので、翌日になると股が痛くて腰を屈めることも出来ず、日曜や火曜に体操の時間になると、気を付けの号令がかかっても両膝は密着しないし腰は延びないので弱つたものだった。

しかしそうして一年経ち二年経つて来ると初めて乗馬に行つた当時は初年兵だった兵隊さんも二年兵、三年兵兵となり、最初は学生なんぞに何が出来るかと思つていた兵隊さんも長い付合で顔見知りとなり、私達の馬術も段々と本物になって来たので信用も付いて来た。その代りここまで上達する間には幾度落馬したか数えきれない程落馬をした。訓練が激しいから無理なかつたかも知れないが、落馬が上手になれば乗馬も身に付いて来ると言われているように、落馬も落ち方に技術が必要だと言つては大き過ぎるが本当のことである。

そうして二年目頃には指導官なしの私達だけで裏門を出して貰つて、習志野の原へ騎乗したこともしばしばあった。そんな時にほ原の端の林の中の樹木の間を縫つて八字乗りや手前変換を応用して駆歩で廻り廻つたり、時

祝 第10号いなきき 発刊

日本の伝統を受継ぐ!!

呉服(池袋)

ゑり卵

TEL (971)8683

には全員横体になって習志野の原の端から端まで競馬をやったこともあった。

習志野の騎兵連隊は大久保の宿にあった。津田沼の駅から四キロの場所である。駅から大久保迄は乗合馬車があったが一日四回位しか往復しないので殆んど乗ったことはなかった。往路はまだ良かったが、激しい訓練を終ったの帰り路は疲れて全員が重い長靴の足をひきずりひきずり歩いたものだった。

そんな夏のある日(多分大正十三年の頃と思うが、その年も私達馬きち中学生数人は、連隊の近くの旅館で合宿していたのだが)西少尉へ当時の官位、この方はロスアンゼルスオリンピックで日本の馬術の優秀さを世界に広めた方だった、惜しくも沖繩戦で戦死されてしまった)が『今日ほ俺と一緒に往くから、みんな繫索を借りて付けて来なさい』と言われた。そして習志野の原ではなく東京湾の方へ向って行進して行った。海岸までの並歩や早歩の畑道ほ日本晴の暑い日差であったが海から吹いて来て野面をなでる風はさわやかだった。

丁度鼻張と福毛の中間あたりの海岸に着いた時に『この中に泳げない者は居るか』と西少尉が言われた。幸い私達ほみんな少し位は泳げるので、暑いから今日は海水浴でもさせてくれるのかと思つて喜んで『今から水馬を教えるから馬具を全部取去つて手綱は繫留索に取替なさい。それからお前達も全部脱いで禪一枚になれ』と命令された。

想像もしていなかった水馬が出来るので、みんな大喜びで仕度をして馬に飛乗った。

海に入つて行くと馬も喜んでしゃぎ出すので、しずめるのに骨が折れた。馬は人間と違って脚の立つ間は泳がないので、馬の背の立たない場所まで行かなければならなかった。

沖へ沖へと進んで海岸から五、六百メートル位行ったところに、浅瀬の間で二五〇メートルくらいの距離で水深三メートル程度の場所があったので、そこで西少尉を先頭にして五メートル位の間隔をとつて一人ずつ水馬をやつたのである。

水馬がこんなに愉快なものであることは、人の話には

開いていたが、実行して身をもつて初めて知らされたのであった。

しかし現在はチョット水馬もやれないだろう。時代も変つて騎兵もなくなつてしまつたので水馬の経験を持つた馬も居ないだろうし人間も昭和生れの人達には、水馬の経験をした人は殆んど居ないだろう。

これは五十年近く前の話であるが、私は今でも毎年暑くなると、無性に水馬がやりたいなあと思うことがしばしばあると言つては嘘になるでしょうか。

私の新人時代

細野 日出臣 (昭十三年卒)

合宿練習と言つものはいつの時代でも辛くてそして楽しいものです。先年母校馬術部の合宿風景がドキメンタリー風に放映されたのを視て私の合宿時代を懐しべ思ひ出しました。

昭和九年に中学部から高等学部に入學して憧れの馬術部に入りました。当時は未だ自由主義的で若干デカダンの気が強く、よく遊び、よく乗つた青春の日々であつたのです。

郊外の面影深い田舎びた駒沢の村上馬場と代々木と近い井上馬場で初歩の訓練を受けました。東条部長、鶴井キャプテン、伊藤副部長等最上級生の優雅な指導で軽速足も出来るようになると夏休みの合宿に入るようになるのです。

100委員会である竹田恒徳氏が当時宮様中隊長でおられた駒場の騎兵第一連隊に約一ヶ月隊外合宿を行いました。近くの民家を一軒借りて食事は隣りのそば屋ですませ、朝早くから一日中、あぶみ上げや低障害の練習に夏の直射光を受けて馬と共に汗にまみれたものです。

三年生の川嶋、中沢両先輩にはきびしく鍛えられ「あぶみをはけ」の号令をどんなに待つたことか。然しおかげで上達は早く、後の大学高専新人戦では同級の故竹内勇君は半ばひつかけられ気味でしたが無失点の五十何秒かで優勝した程でした。

それはさておき、夜の合宿は又一段と楽しいものです。名簿には出ていませんが昭和八年卒の石村英一先輩も職場から参加されており、近隣の小さな可愛いお嬢さん方と仲よしになつて差し入れなど頂いたものです。

軍隊のことですから馬の手入れはきびしく、鞍の重さは身に泌みています。日曜日の代々木練兵場への野外騎乗は街中を馬の高みから「カツ」「カツ」と眺められて爽快でした。

此の年の冬休みには国府台の野戦重砲兵第一連隊に初年兵代りに合宿、冬の霜柱を蹴つて早朝から馬運動に鞍数を競つたものでした。

いろいろの思い出が湧いて来ますが紙数も尽きましたので、いずれ又の折に。



昔のじや

中 越 鴻 八 (昭十七年卒)

会誌を厚くすることになったので、四、五日中に何でもよいから原稿を書けとの急な電話を頂き、時間的余裕もないままに二十数年前のことを思い浮かべながら筆を取糸系つてるので、挿りもなく誤りも多いのではないかと危ぶまれるが御勘弁願いたい。

あの時はああだった、この時はこうだったと思い返している内に、過ぎ去った我が青春の日々の幾助かが、薄いペールの彼方から浮び出して来て、唯唯なつかしく回想の淵に沈みこんで行って筆もはかどらない有様です。

私が入学して馬術部員となった昭和十四年は支那事変の真最中で、やがて来る太平洋戦争(当時大東亜戦争と言った)の無気味な足音が何となく感ぜられると言う頃であり巷では千人針や応召者など戦時色も濃くなり学生生活も窮屈になりつつあり、比較的自由な空気の学院でも軍事教練も強化され、頭も坊主刈りにされるなど時代の流れは如何ともしがたい時勢であつた。

その頃は馬術部全員でも十二、三名のものでなかつたかと思うが、勿論自馬は持つて居らず、玉電大橋(今は路線も無くなつた様だが)の砲兵隊と軸重隊の練兵場の片隅で村上と言う貸馬屋の五、六頭の貸馬で週二回放課後農場運動や障害を訓練したもので、終ると練兵場を駆け回つたり楽しいものだったが、号令その他一切軍隊式で、勿論上級生は絶対であり大鞭を振つて叱咤され、なかなかきびしいものであつた。貸馬料はいくらであつたか忘れてしまつたが、学生の身としては相当なものだつた様に思う。

自馬でないので運動後馬の手入もないし水飼もない様なもので、本当の意味で馬との愛情の交流といえるところまではいかなかつた様に思う。

練習が終ると玉電で渋谷駅に帰つて来るので勢い喫茶店に行つたり当時新しかつた東構パーティの食堂に行き

氣勢をあげたもので、ハイカラーの詰襟服にカーキ色の乗馬ズボン乗馬靴のいでたちは当時としては人目を引いたと思うし、女の子にももてた様に記憶する。そんなことで気を良くして大いに飲んだものだが大体上級生が奢つてくれたもので、まだまだ良き時代であつたのでしよう。

しかし乗馬靴も、もう軍人以外ほ新調は出来ないの为先輩のをもらつたり、中古を買つたりしたので縫いだり切つたりのものだつた。又伝統的に学業成績の方も上の部の人が多く教科書ノートなども相伝され注記も良く入られてあり試験の山も教えられたりで上級生下級生の継がりは相当深いものであつた。

夏の合宿は、一年の時小田急の松田で、二年の折は鎌倉で行なわれた。松田の合宿所は土地の女子裁縫学校を借りて行なわれたが、いつか青木昇先輩も書いておられた様に記憶するが、夏の猛暑の中での訓練で、たまたま私が乗つて居た馬が県下随一という繋駕競争の馬で素晴らしい馬であつたが、今思えば日射病であつたと思うが、大汗をかき弱つて来たので練習を中止し獣医を呼ぶやら皆で氷で冷したり一夜看護にあつたが、とうとう息を引取り私は勿論のこと上級生も青くなつて心配した。大変高価な馬と言うことであり、とても弁償は出来そうもないし、どう言うことになるか苦しんだが、脇坂さんを始め上級生が懸命に奔走して下さつて幸い組合の馬であつたせいもあり無償で許されたが馬術部としては大事件であつた。

翌年は鎌倉の乗馬クラブで合宿。この時は新入部員が九名の多数にのぼり、巻島、阿部、福島君等なかなか豪の者ぞろい、にぎやかな合宿であつた。そして又良く飲んだものである。夜は禁を犯して飲みに出るのだが、おとなしい伊藤芳富君、橋本文治君あたりも酔つて武勇伝があつた筈である。

今の馬術部とくらべてどうか知らないが、とも角そんなことで技術的には大したものではなかつた訳で対明治学院、東北学院戦もあまり勝つた記憶はない。

WHD

TEL 400-2662
渋谷区神宮前5-30-3

関東学生選手権に新人で出場のチャンスが与えられ篠原先輩と二騎並列の障害競技に参加した。場所所市ヶ谷の陸軍士官学校、馬術の神様と言われた遊佐幸平將軍が審判長であった。何しろ自馬でなく士官学校の馬であり、殆んど馬運で勝負が決る感がありタイムアウトで失格してしまった。

軍國調の盛りあがっている時であり愛馬行進曲などが流し行して折で馬術国体で騎馬大行進が行なわれ各学校も参加したが、私も青山の旗手となって銀座八手を騎馬行進し誇らかに思ったものです。この日解散後数寄屋橋の二ユーキーで皆でジョッキーを傾けたが私は何と十八杯飲んだ記憶がある。丁度その夜大手町の大蔵省の大火があり、大いに興奮して又渋谷に戻り又飲んで歩いたものである。

まるで、酒ばかり飲んでた様だが、学生生活も抑圧され、いずれ卒業したら戦地に行く運命も予感して居り短い青春の日々に酔ったと言うことである。その意味では現代の若い人が羨ましい様だが、逆にそれだけに短い輝いた貴重な一時であった。

学生狩といって警察が取締りを強化し、あまりおおつびらに飲んでも居れず、おでん屋の窓から逃げ出すと言うこともあった様だ。軍隊は柏の防空部隊に入ったが、ここに高射機関砲中隊があり大体馬から自動車に変わりつつある時であったが、軍馬が三十頭程居た。馬術部に居た。馬術部に居た為にそうならしかつたが、部隊長以下騎兵出身者が多く、一応正式な馬術をやつた者として可愛がられ苦しい訓練や内勢班の仕事をやらずに乗馬訓練に参加させられたり手賀沼のほとりに野外騎乗に出掛けることが多く随分助かった。

経理部幹部候補生の試験が行なわれ、面接試問の時軍経理部の担当将校が、青山学院は軟派学校でないかと言われ、断然憤慨して吾を忘れ初年兵の身で神様の様な將校にむかつて、母校の名譽を傷つけるにも程がある何処の学校にもその様な人は居るだろうし青山にも居ないと

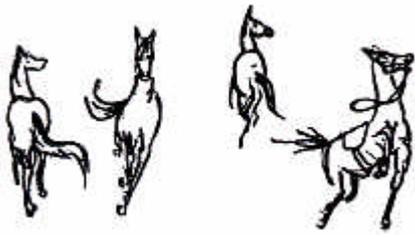
は言わぬが勝手に断定されては承知出来ぬと噛みついたら、「いやどうも失敬した。お前は馬術部に居た様だが俺も慶応の馬術部出身だ。愛校精神を忘れず頑張つてくれ。」とのことで馬につながる不思議な縁を感じたことがある。

軍馬には毛付兵と言って古参兵が各々一頭宛馬匹の責任者とされ、その下に何人かの兵がついて兵隊より大切にされたものだが、そんなことで初年兵で毛付兵とされ面目をほどこしたのが、この間馬房の掃除、運動、飼料調合、蹄鉄外馬匹の入手に寝食を忘れて熱中して、本当に愛情をおぼえ、馬も又なつき苦しい初年兵生活の中で馬房に行っている間が唯一の救いの時であった。

現在学院では自馬を持ち学生諸君も手入れその他御苦労なことであるが、やはり馬はそこから始めねばならないもので幸せな事だ。

その後主計少校となって戦地に赴き歩兵、砲兵、搜索連隊付と転々と変つたが馬とは不思議に縁があり春秋の筆法を以つてすれば、今日生きて居られるのも馬術部に居たせいとも言えないことはない様に思う。その割に母校馬術部に顔も出さず申訳けないと思つているが、部生活が人生にどんなに深遠な貴重なものであるか今にわかつて思つので充分にエンジョイしてもらいたいと考えます。

以上



自馬と共に再興の日々

植松 英二 (昭二十八年卒)

我馬術部が敗戦の傷手から立ち直り復興がなされたのは昭和二十二年と開く。柿原、賀川の先輩が復学され部の再建に力を尽されたが、部員の卒業と同時に自然消滅と言う形になつたらしい。この後を受けたのが私と言うことになるのか。昭和二十五年、同僚の清水幸雄君(現清水書院取締役)と相談して「馬術部再建する同好の士よ来れ」の広告を出し、集まつた者四、五名で同好会を結成出来たのは、同年の六月であった。

顧問に鳥居哲教授をいただき、予算は二万五千円でスタートした。集まつた連中は皆、生まれて初めて馬の背にまたがる者はかりで、馬も知らなければ術もさらさら覚えなしという状態で、大拳して東京代々木乗馬倶楽部に押しかけた。それでも遂には御殿場に遠乗りし、富士山麓を自由に疾走するまで上達した。これが長田さんと出会つた初めである。

当時の部員は数多くいたが、出たり入つたりで、沈君を除いては残っている者は誰もいない。この年の十一月かつて馬術部で活躍されたという一人のOBに紹介された。細野さんである。細野さんからよき時代の、良き部生活の御話を伺い、又数多くのOBがおられるのを知り、目を丸くしたり細くしたりで、早速御紹介を受けて、その一人一人を訪ね歩き、部復活の援助を乞うて廻つた。

OB巡礼の初まりである。越えて昭和二十六年高等部から中島、宮城、森等を迎え入れ、部員数十名となり、ようやく運動部として認められ予算三万七千円を得、顧問に鳥居教授、部長に植松と陣容を少しはかり整えた。しかし依然として借用馬で代々木倶楽部に練習に行くたびに、他大学の自馬訓練を見て、羨ましくてたまらず、皆骨肉の嘆をかこつていた。

同年六月、我等も一丁自馬をもとうではないかとの声

が起り、遂に長田さんの手を経て新馬を購入するに至った。彼の有名な「青峰号」である。値段は四万一千円、酷暑の中を森・宮坂が御殿場から歩いて運搬、八月十八日代々木倶楽部の馬房の一隅に無事おさまった時の感激、今でも思うと胸が熱くなる。馬匹購入のためOBに奉賀帳を回し寄付頂いたものが二万五千円、部員が出し合ったお金も僅かで、購入金の未払い多く、その上飼育費が予想以上にかかるというわけで、(当時は月七千円依かと思つ。)部員の親の財布の金が続々と盗まれたのはこの時代特に多い。特にピンチはこの年の暮れであった。

借金返済の期日もとうに過ぎ、折角頂いた援助金も馬料に食われ、予定した金も入らず、長田さんからは、矢のような催促の手耗はくるので、遂には差押えというところまで来てしまった。

すんでのところ自馬を手離すところまでいったが、十二月に借金を借金を精算して助かった。その時沈・米谷・小池の各君から個人的融資を受けたのだが、これを返済しているかどうか(未だ返していないのなら三君よアキラメてくれ)。

しかし一方楽しみもあった。自馬所有の故に東都大学連盟に加入を許され、自馬にまたがって出場した時の気分は格別であった。沈、植松、中島、堀内、森、宮坂、藤根、東、米谷が初出場、晴れて八校中七位の成績であった。第一回のOB、現役の懇親会が同年十月明治製菓の二階で開催され、大いに激励されて無暗に感激したこともあったし、代々木倶楽部でOBとの競技会を行い、十数年も馬に乗っていない先輩に敗けて「お前達はなんだ」とハッパをかけられ「なる程ウメーものだ」と感嘆の声を放ったこともあった。

又馬車二台を幌馬車に見立て、馬を七騎に分乗して西部劇よろしく山中湖まで遠乗し、湖畔にキャンブ・フアイヤーを囲み、馬車の上にもぐり込んで一泊したことも愉快な思い出の一つである。

この外に馬事公苑に於けるトーナメントで緒戦に敗れ、

体育館での一週間にわたる合宿訓練の功なかつたことを嘆き悲しんだこともあった。あれやこれやの泣き笑いの一年も自馬と共に過ぎたが、資金の絶対額不足は年を越しても変らなかつた。馬房借用代一千円が支払えず、止むなく代々木倶楽部をおん出で、強印に学校構内にバラツクを建て、学校当局の反対にも係らず居座つたことも記憶に新しい。

昭和二十七年四月、年度が変わり、顧問に土田教授をいいただき、部長に沈、主将に堀内、会計に小池の陣容でスタート。部予算は三万七千円であった。

この頃から女子学生が入部し始めるようになり男共を喜ぼせた。平木、按之、伊藤、三枝、海津、河野、飯塚の諸嬢である。よほど嬉しかったとみえて今でも全員の名前を憶えている。

この年は多士済々で活動も多彩であった。新部長も積極的に働き「青姫」「青兎」の新馬を十万円で購入している。この際特筆すべきことは、沈君が親から七万円を借りて馬代に当てていることである。そしてその七万円は未だ彼に借金しているが、沈君はその返済を請求してはいないということである。

その後の部の歴史については詳しく知らない。これまでの部復興のいきさつを記したが、始めから順調に発展して来たことは嬉ばしい。しかしこの背後に多くの先輩の好意と援助があつたことを忘れてはなるまい。OB会が組織され、緑鞍会と名を変え、蔭に陽に現役の部活動に大いなる援助が与えられて来たことを。

馬具と乗馬服装の御用命は

(941) 3744番 イワサキへ
ココロ ミナヨシ

RIDING GOODS SHOP

IWASAKI

2-5-1 OTOWA BUNKYO-KU, TOKYO
TEL 03 (941) 3744



阿部先生と共に学んだ日々

佐藤 一貫 (昭二十三年卒)

どう云う訳か馬との縁が深く、未だに離れられないで居る。一度馬のとりこになると馬狂になると云われる。まさにその通り、私も人も嫌がる馬術部監督を引受けてますます深みにはまり込もうとしている。部を充実させる事もさる事ながら、スポーツとしての学生馬術界の発展拡大を意図し、一大学の監督としてあまんに居れぬ時代にもなった。

省みると三十三年に卒業した仲間の大半は一応馬術界から遠去かり、緑鞍会の中にあつて未だに關係して居る者も教名しか居なくなつてしまつた。しかし、不思議と各大学監督に同年代の者が目立ちはじめ、当時を省みては語り合う機会も多い、なかなかボールケを相手に行うスポーツと異なり簡単に楽しむ事の出来なかつた種類のスポーツで、これ迄続けて来られた事は私自身幸に思うと同時に、もっと同じ志しを持つ仲間が気軽に楽しむ事が出来るように、またもっと広く馬術思想の普及と底辺の拡大を図るべく努力せねはならぬ時と、馬術界も大きく脱皮しようとして居る。

部の充実と相反する事があるかも知れない。しかし、大きく馬術を考える時に一青山学院馬術部でなく、馬術人のサロンとして部があつても良いと私は考える。おおらかな気持で事、馬術に興味を持つものの為の交流の場として役立って欲しいとも、私は部に対して考えて居る。一青山学院馬術部のみにとどまつて貰い度くない。馬術とはもっともつと奥行が深く広いものだと思得る。四年前、阿部先生に我部において願つたのも、何も我部の充実を図る為ばかりでないと思つても、私の馬術観としてここに改めて述べて置く。普通ならもう引退しても良い年令かと思つ。しかし、阿部先生には鞍の上で倒れる迄馬術を楽しみ、また掘り下げて行つて欲しいと思つて居る。

いろいろと御不自由をお掛けして居る事を詫びながら出来るだけ自由な気持で馬にまたがって戴き度いと思つて居る。

馬術とは如何なるものかを訓えられた三十三年卒業生の一人として、また現監督として部員の為にもつと自由な気持で馬術の奥行を示して欲しいと思つ。馬術にはこれで良いと思つものがない一つの芸術だと思つ事を教えて貰い度いと思つ。

そう云つた意味で我が青山学院馬術部は、各大学中で最も恵まれた部だと思つて居る。

部員の一層の奮起と、三十三年卒業生の仲間の支援を切望する。

綱島馬場へ移つて

一馬場づくりの日々

高倉 彰 (昭二十七年卒)

先日久し振りに飯田と飲み、彼から題を与えられ、私が書く事になつたのがこの題で、部生活で一番つらくいやだつた作業である。我々が入部した時馬場はなく、学院内のグラウンドが練習場であつた。それが綱島にグラウンドが移転する際に、諸先輩の努力もあつて、馬場が造られたのである。然し乍ら、その馬場たるやひどいもので、赤土を二十センチ程盛つた上に砂をバラバラと播つただけのもので、雨が降れば泥田のようになり、蹄鉄が取れてしまう仕末であつた。そこで馬場の一大改革にかかつたのである。改造というより全くのやり直しであつた。盛つてあつた赤土を全て取り除き、地固めをした上に先輩が都合してくれた石炭ガラを播くのである。

ところがこの石炭ガラをツプス作業が又大変であつた。下が柔らかい為にローラーではつぶれないから、丸太で

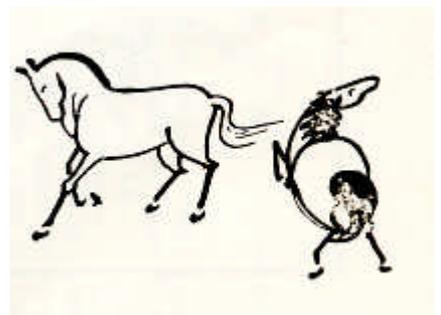
叩きつぶすのである。来る日も来る日もこの作業で、練習も土手でするだけで満足に出来ず、ただただ馬場造りに専念した。朝やる気を持って綱島まで来ながら、橋の上から土木作業をしている皆さんの姿を見て引返した奴も居たが、とても非難する気にはなれないほど、つらい作業であつた。馬房に電気もつかず、水道もなく、四年間の部生活で一番つらい時代であつた。然し馬場らしきものが出来、部内対抗戦をした時の喜びは、格別のものであつた。

この時のやれば出来るという自信は、社会に出て十年以上経過した今でも、何か難しい事に當つた時、大きな支えとなつて居る。

当時、馬術部土木建築科という言葉で言い表わしていたが、今考えてもよくやれたと思つ。四年生から一年生まで男女を問わず平等にやつたからこそ出来たのだと思つ。

思い出すままに雑然と書いてみたが、我々が卒業したのは、青山学院大学馬術部土木建築科であつたような気がする。

四年間いろいろな事があつたが、久し振りに飯田と飲んでやはり友達はいいなあと思つた。馬術部で得た最高の物、それは友人であり、やれば出来るの自信であつた。



馬匹、馬房、馬場を得て

練習、練馬の日々

山田 恵 遣

(昭和四十一年卒)

馬に乗りだして早いもので、十三年の月日がたつてしまいました。ロクロク勉強もしないでガムシヤラに馬に乗っていた学生時代を過ぎて社会人となり、日曜乗馬になつてしまいました。つくづく馬術は良いスポーツだと感じております。まずスポーツとしての要素である遊戯、競争、肉体鍛錬の全てを含む運動であり、もちろん健康にとても良い。

週に一度でも馬上で充分に汗をかき、手綱をゆるめ深呼吸をしてホツとする時、顔をなでる風が一週間のストレスをぬぐいさつてくれるようだ。このような事は、どんなスポーツでも一汗かいた後は同じ感じがするものだろう。

しかし乗馬は相手(人)も必要とせず、年を重ねても肉体的な若さが減退したとしても自らの意志のある限り続けられる。そして最も重要な特徴であり礼賛する故には、相手が馬だということである。馬というやつは、実にかわいいデリケートな動物である。

接する人、乗る人の心を実に素直にその動きに表わしてくれる。そして馬術というものが、完成には到底、到達することのできない奥深い物であるだけに、うまく乗れたなあと感じる時、その日一日が楽しくなる。馬という大きな力を騎手という小さな力で制するのは、まさに術であり、力でも年令でも判別できない若さを馬が証明してくれたようなものである。

乗馬というスポーツが、単に身体を動かし肉体的新陳代謝を促す爽快さだけでなく加うるに精神的な満足感も与えてくれる実にすばらしいスポーツであると思います。私も、これからできる限り馬に接する機会を持ちたいと思っております。馬術万才。

はるかなる秋田の日々

波木井 陽 樹

(昭和四十三年卒)

秋田県仙北郡角館町、其処が当時の夏季合宿地であった。上野から汽車を乗り継いで行く其の地は、今、改めて想うと青春の故郷であり、又上野出発は青春の出発でさえあつた様に思われる。

豊かな太陽と緑、冷めたい川の流れ、そして素朴な人情とに育ぐまれた、短かかったが充実した秋田の日々を、私は夏が来ると淡い憧憬とともに想い出す。キラキラと眼を射る太陽の木漏れ陽にも似た私と私の仲間との青春の一幕、それは不思議と上級生の騎乗号令の声でもなく、騎座摩れの痛みでもなくむしる練習の合い間の一本のキャンデーの冷たさとして私の胸の内に残っている様に思える。それは、やはり暑い日であつた。朝の練習から帰る道は、頭上に枝を揚げた樹が生繁り、片側は小さな沢になっている小路で、そこを馬に乗つた私と、自転車に乗つた木村とがゆつくりと馬房に戻る途中であつた。

私と彼はふざけ合っていたのだらう。私は馬をヒョイと道の片側に寄せた。彼は当然押されて、訳の分らぬ大声を上げて、自転車もろとも片側の小さな沢の中へ消えていった。一瞬の後「ドッポーン」と音がして、私が鞍の上に立ち上がって下を覗き込むと、下の川の中で彼は腹の上に自転車を乗せ、胸まで水につかっていたが、右手だけは懸命に頭上に突き上げていた。

あつぱれ、何とその右手の先には半分食いかけたキャンデーが水に汚れる事なくピンクに溶けかかっていたのである。

木村が自力で這い上がったか、私が助け上げたか、又そのキャンデーの続きを木村が食つたかは記憶は定かではない。

又当時の私達は最も純粹に女の尻を追掛け廻していた

のだらう。町の薬屋に評判の美人の姉妹が居た。そこで練習が終わると競争でその薬屋へ飛んでいった。

私の馬術部生活

秋田 喜和子

(昭和四十四年卒)

文才のない私が原稿を頼まれた時「どうしましょう。困つたわ」といった気持ちでした。何を書こうかと途方にくれた結果、今、学生生活を振り返って思う事を頭に浮かぶまま、つらつらと書きつづつてみることにしました。いつか徒然なるままに、昔のアルバムをめぐつておりましたところ、網島で乞食のような姿をした自分の写真を見つて、実になつかしく思つた事を覚えております。私も先輩方と同様、大学生活イコール馬術部生活、あるいはそれに近いものでした。

ですから、この一枚の写真は私にとっては学生生活の象徴であるとも言える様な気が致しました。更にアルバムのページを一枚一枚めぐつていきますと入部当時は二十人ほどいた同級生も次から次へと、それぞれの理由があり、アルバムから姿を消していました。

ある人が退部したいと言つたとします。そんな時、残る全員は、決まって考えなおすように、と一生懸命に説得したものでした。この種の事件は今も昔も必ず起こるものようです。それはともかくと致しまして、あの頃は何をすることも、脇目もふらず目的に向かつて突進していったものでした。

他のことなど考える余裕などありませんでしたし、又なくてもゆるるされる時でした。それが学生の特権なのでしようか。しかし社会に出るとそういった調子では、とてもやってゆけない事を知つたのです。

もっと融通性のある広い視野から見た考え方を必要がある事を感じました。とは言うものの私などは社会に出た時、まだ足がしっかりと地についていなかった為、

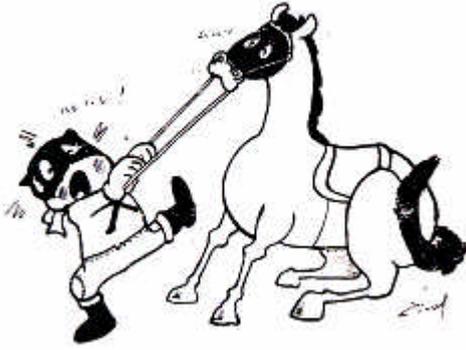
単に優柔不断な人間が出来あがる結果となってしまう。

後輩の方々は、こんな事にならないようくれぐれも気を付けて下さいネ。

とにかく、当時・フツフツ文句を言った事も泣きたかつ

た事も、寒くてつらかった事も、今では、楽しかった、楽しかったといった感じですよ。又、今でも強く印象に残っている先輩の言葉は、馬に対し仲間に対し常に思いやりを持って相手の身になって考えなさい“というものです。

こういった生活の中から得た最大の収穫は友達でしょう。卒業後は、それぞれ別の道を歩んでおり、あまり逢う機会もありませんがそれでもやはり、かけがいのない大切な友達に変わりありません。



各種玄関マットの調整・販売・各種建物清掃管理 資材販売

minatoya

有限会社 港屋佐藤国平商店

東京都千代田区神田神保町1丁目44番地
TEL 294-3856(代)~8番
取引銀行 東京都民銀行新宿支店
第一勧業銀行神田支店
佐藤 一 貫 (昭和33年卒)



スナック

TRIPLE

TEL : (583)0512
港区赤坂3-10-3
黛ビル2階

先輩・同輩・後輩の皆さん
酒なら生産高日本一の
灘の生一本

ハク
白 ツル
鶴

と御指名下さい

37年卒業 高倉 彰

はっぴいえんど

風街
ろまん

.....水無月の風
ぼくらの瞳吹き抜けると
鬼瓦の屋根のあたりで美しい渦描く.....

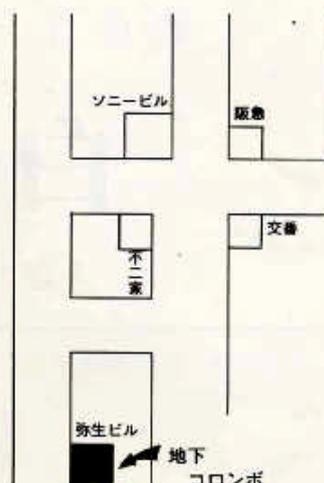
▲ URC レコード URG-4009 STERO ¥ 1700

若者の店 あなたもどーぞ

コロソ

コーヒー
ピザ
イタリアン

TEL (561) 2200
中央区銀座 4-2-2



祝いなき発行五十周年

新しい住いづくり
ナショナルの照明器具

東京都台東区台東2丁目8番1号
株式会社 **セキネ電気商会**

本社 TEL 03(832)7141(大代表)
営業所 越谷・熊谷・柏

電灯電力変電所
冷暖房設備工事

東京都中央区日本橋芳町1の2
協進電気株式会社

代表取締役 平井俊三
TEL (667) 4801

青峯

藤根 威

(昭和三十一年卒)

私が入部する前年に買い付けた初めての自馬でした。入部前馬事公苑の軽い馬に乗りなれた私には、この馬には驚きました。何しろ歳なのか、体が硬く、反動が関東一と言われる位高い馬でした。蹬上げ練習で五分間で十何回落馬した人が居たと言う伝説もあります。

何しろ軍拍をヤスリで研ぎそれで力一杯蹴飛ばしても鼻からブスンブスンと力を抜かしている様で、それこそ馬耳東風でした。

他校生が乗ると第一障碍迄はドタンドタンと馳け足、飛越後はもう速歩そして・・・失格、とゴール迄来る事はありませんでした。それでも練習中は気が向くと一米三〇四十を飛んでいました。

青妃

昭和二十七年三十三

藤根 威

妃を姫の方が良いと言っていた人もいました。後述の青兎と一諸に御殿場から三日がかりでもってきました。網島街道は未だその頃はジャリ道でめったに車も通りませんでした。前述の青峯と共に一番部の苦しい時にあって、その酷使に耐えてくれました。唯、一番馬らしくない馬でした。顔が大きく脚が短かく、冬になると長い毛が生えて来ました。前脚は脚でヒズメは扁平、腰もパネがなく、雨の日などよく横転するので蹬上げで乗りました。おとなしい馬でしたが、この馬程乗り手を見分けるのが上手な奴は他に見当りません。上級者の言う事は良く聞きましたが、新入部員、他校生が乗るとどんなに叩かれ蹴飛ばされても膠着したり動きがにぶかったり難馬だ

と思われていました。でもこの馬の目は何とも言えず可愛らしいものでした。

青兎

昭和二十七年二十九

藤根 威

咬蹴のひどい馬で撫でてやろうとしても大変な騒ぎでした。手入れの時、東君が必死になって脚を押えていたのです。買入輸送中左後脚を痛めたのが最後迄たたり一年足らずで芝浦行きとなりました。

青翠

昭和二十九年三十

藤根 威

確か専修大と一諸に水沢から貨車輸送して来ました。大島君が市原君がその時の事情を良く知っているはず。アラ系でパネはありましたが、何しろ小柄、その頃の学生馬術に向く馬ではありませんでした。(丈夫で長持ちが第一ですので)唯この馬青妃が大好きで、放しておいても青妃が障碍を飛ばは自分もと言う様に大変可愛らしい馬で、又おとなしい馬でした。確かこの後の「青波」購入の際、下取りになったと思います。

FUSE

T O K Y O

乗馬靴 布施靴店

東京都品川区大井2丁目27ノ4
国電大井町下車
TEL (771) 6118

青嵐

昭和三十一年—三十三年

佐藤 一貫（三十三卒）

三十一年に横浜乗馬クラブより購入された・内藤君の口開きだったように憶えて居る。当時松居君、小野塚君等横浜乗馬クラブ会員として乗りに行く者が多かった。

アラブの血が多かったように思う。馬場も良く踏み、パッサージュも多少出来た。しかし年もとつて居て体がかなりかたくなって居た。高度な技術も我々部員も持たず、また高度な馬術の出来る馬ではなかった。障害は良く飛んだ。

厩舎は現在の学院内の記念体育館の正面入口附近にあつて、馬房は片側四頭の向い合いで新八頭方、そのうち正面左入口から二馬房を部屋兼馬具置場とし、右入口側に宿直室、後阿部先生の仮住居の場となつた。

そして奥にトタン張りで馬糧庫をくつつけた厩舎、後に厩舎の前右手、屋外プールの外壁に寄せかけてトタン張りの小屋を建てて、二馬房を作つた。

夏、宿直の夜等、良く此の石壁をのぼってプールへ踏みこんだものである。

馬場は現在の五号館か六号館かが出来た時につぶれる迄、現在のウエスレー館の辺りにあつた。

私は青嵐に良く乗つた。どうも飼料が満足に与えられず、太つてはいなかったが丈夫な馬だった。馬場を踏去より障害を良くやつた。

今、北海道で活躍して居る渡辺充君が騎乗して、準備運動中に足を捻つたかどうかして

恐らくもののはずみだと思つが、肩だったか腰だかを骨折した。関東トーナメントの最中で馬事公苑の角馬場審査席の脇辺りで動かなくなつてしまい、そのまま廃馬とする為送られた。

恐らく障害を良く飛んだ為、無理をさせたのではなかったかと思う。私自身此の馬で支柱のテッペンに積木を

のせて、恐らく一米六〇、七〇位あつたと思つが、一度は急ブレーキがかかつて横木の下をくぐつてしまつたが、次々叩いて飛越させた時は我ながら障碍とは高いものだと思つた。こんな無茶をさせたのも青嵐を殺した原因の一つだと末に後悔して居る。

青影

昭和三十一年—三十三年

佐藤 一貫

戦後の学生馬術界は選手もさる事ながら、馬匹に於ても四ツ肢であれば良いと伝う具合に、健康な馬ならしかもやすければ何とか購入して自馬とする。もつとも飼育費が捻出出来ればだがと伝つたような状態であつた。

さて青影は三十二年の初夏、八王子の農家から購入されて入厩した。当時部所有の馬匹は、かの有名な青姫、青波の二馬で、青嵐を関東トーナメント時に葉殺した後の補充として購入した。その辺のところは定かに記憶して居ないが誤つていたら御訂正を願います。

中半血の太目の馬で立姿が厚く山あらしのようであつた。多分六才か七才位だつたと思う。

阿部先生と北海道は北見に引込んで居る渡辺充と他の者と下見に行つて購入して来た。その時、今一厩別の栗毛馬を同時に見たが、阿部先生はこちらの方が気に入つたようだったが、渡辺と私とで青影の方がおとなしく、練習馬としては良いのではなからうかとか何とかえつて青影の方に決めた。未だ未熟で馬を見る眼もなかつたかと思つた。

A馬場程度は踏める迄に調教が進んだが、後、肢を傷めて跛行がちになり、私等が卒業後に出厩した。

障害は良く首をつかつて、ダイナミックな飛越を行い、随伴するには非常に楽な馬で、きれいな飛越姿勢がとれた。私自身は此の馬にはあまり乗らず、印象はあまりない。岩崎君が此の馬には良く騎乗してスペイン常歩の真似事をやつて悦に入つて居た。

練習馬としては乗れた馬だと記憶している。

青葉

昭和三十一年—三十五年

佐藤 一貫

府中競馬場の厩舎から頂戴して来た馬で、故水田嬢の世話だつたと思う。腹が大きく頭の高い馬で、額が硬く阿部先生もかなり苦勞なされた。此の青葉には私も良く乗つた。三十二年に厩舎して、青影よりは後に入つて来た馬だつたが、私等が卒業した翌年だか、或いはその年だけに阿部先生と共に横浜乗馬クラブへ移つた。

速歩のなめらかな口向の良い馬だつたように記憶して居るが、或いは違つたかも知れない。障害も良く飛んだが、無理を重ねて口が硬くなりむずかしい馬になり、丸太棒で追われたりして障害を飛越する迄になつた。

阿部先生の騎乗された後乗せられて、最初はグラウンドから厩舎へ戻るプール隣の片一方は一時バスケット・コートで金網のフェンスが張られたせまい通路の処で、一端とめて、馬上の私に手綱をとらせ、大動の口元を片手で保持して、片手に鞭を持つて青葉の尻を叩きピュアツエ等を踏ました。

パッサージュも良く踏ましたが、未だ完全に両肢が同程度に高揚する程ではなかつた。

やはり部員の多くが練習する為にならうの進歩はむずかしかつたとみるべきだろう。

横浜乗馬へ売られたと聞いた時は、怒つたものだったが、やはり部としての方針もあつての事だつたのだらうが惜しい事をしたと思つた。

横歩も完全に左右を交叉させ、此の馬から私は多くのものを学んだ。唯、しばらく練習を怠ると腹が出て来て、確か私が責任を持つて此の馬をみる事になつて居たので、手入れにも苦勞した。蹄があまり良くなく装蹄には氣を使い、中野相生町にかまえて居た飛田さんに来て貰つたり、こちらから出掛けて行つては装蹄して貰つた。

駈歩の踏歩変換等も良く調教され、阿部先生も若く、一日に何頭も騎乗し、私等も一日に数頭肢がったものだった。

青 幸

昭三十二―三十三年
佐藤 一 貫

秩父の大島氏の世話で、倉林君と共に人厭した馬だった。此の馬は在厩期間が短かく、確か私の記憶でもアンクロアラブではなく、サラブレッドではなかったかと思つて居たが、

先に一頭寄贈された馬がいで此の馬と交換して貰ったので、或いはそれと混同して居るかも知れない。血統の良い馬だつたと思つて居たが、或いは交換した馬の方だつたかど忘れしてしまつた。歩様は良かったが何となくきやしゃで腰がふらつき、殆、阿部先生が調教して居て私等もめつたに乗らなかつた。

障害は私が渡辺が飛ばして居たが、惜しい事に対中大戦を現在の学院の構内、乗山のある辺りで障害を並べて対戦した。

中大では白秋と白栄を繁衍して来て、青山は青姫、青波、青幸、青影等を使って行つた。

中大の選手が騎乗して人転し、鼻面に傷を負い、ヨイチンか何かで治療したが、破傷風菌が感染して、五日位後だつたか二昼夜よだれをたらし、涙を流しながら硬直したまま馬房の外に引き出されわらの上で死んだ。

涙声を上げて慰むぐ女子部員を冷く引きはなして、処理すべく走らせたりして、上級生は随分と冷いと後で非難されたものだった。



青 扇

田 坂 信

(昭和四十四年卒)

昭三十七―三十九年

現役からの電話で「青扇について何か書いて下さい。」との御依頼を受けた時、正直いつて弱りました。というのも青扇が綱島にいたのは私が高等部在学中のことであつて、あまり記憶が確かでないうえに、青扇との馴染みも比較的浅かつたからなのです。

チビがデカ(雷神)と一諸に綱島に來たのは、昭和三十七年私が高等部一学年の秋だつたと思います。その名も相応しいて、馬格の雷神、貧弱でまるで鬼婆のようなチビ、まことに対席的でした。そんなチビが一年後のアバロン大会サンジヨルジュ賞典で優勝するなんて、誰も予想しなかつたに違いありません。

チビのことで誰もが忘れられないことがあります。それはサンジヨルでの優勝より、もっと鮮明に覚えています。蹄又腐爛は彼女の夏場の持病でした。そして我々はその治療の度に、連日生命の危機にさらされました。そんなチビでも慕つてくれる人(馬)がいました。

アングロ・アラブのクケ(青武)が彼女に引かれたのは我々にはわからなかつた彼女の気品と女らしさだつたのではないでしようか。

でもそれは悲恋に終つたようです。現役の諸君は多分「青扇」という名前さえ知らないことと思います。

でもかつて君たちのクラブに、綱島の馬場に、こんな馬がいたという事を心の片隅に覚えておいてあげて下さい。

やきとり・若鳥料理

鶏 小 屋

東京都中野区中野 5 丁目 57-2
ウケシマ・ソシアルビル 1 階
TEL (386)0093

村 野 吉 政 (32年経卒)



雷神

三谷

稔 (昭和四十四年卒)

三十七ー四十四年

第十七回関東自馬對抗競技会

九月 日 馬事公苑

暑さが残る日さしだったが、風は秋の風でさわやかだった。

「さあやるぞ」朝、目がさめるとそう思った。待ちに待った試合だ。高校の頃同級だった田坂と「馬術部に入ったからにはこの試合に出なければ馬術部に入った甲斐がないな。」と話し合っていた試合だ。以外と早くチャンスが来た。合宿に入る前 雷神^①に乗る様にいわれた。自信はなかったが一生懸命やればある程度いい線いけると思ったがまさか勝てるとは思わなかった。

第一日目、馬事公苑に行くと見るとデカはボサ・と寝ころがっていた。たたき起こしてすこしでも良く見える様にピカピカに手入れをした。一時間位曳き馬をして馬装を始め、準備運動を一時間位やって角馬場に行くと見ると、試合の開始が大幅に遅れて、デカも私も気合が入って乗った所を二時間も待たされたので、デカもあきれってしまったのか、いよいよ自分の番になってものつて来ないのでやけくそで拍車をぶち込んでやぶれかぶれで入場した。あとは目をつぶって経路を踏んだ。

試合前、那波先輩や上級生にアドバイスされた事は守ったつもりだった。それは、総合馬場とは前進気勢と、運動の従順さと、正確さに重点を置くと言われていたので、練習の時も斜めに手前を変えようとすぐ伸長歩をする様にした。デカはもの覚が良いので斜線に入るとなにもしなくても伸長歩をした。試合の時も忘れなかった。横歩は得意ではないので捨てるつもりで一切練習しなかった。ただ馬のペースを守り、歩調を整える事を練習した。経路の後半で審査員席にオ・ちゃんを経路読みをやっ

ているのが目に入った。ニコニコしながら「^②」のサインを出しているので元気づけられた。馬場の成績は二位と一点差でかるうじて一位だった。

二日目 (ステイブル)

前日経路を下見したが、自然木あり、水濠あり、乾濠あり、生垣ありでしかも幅がとつても大きく見えた。こんな大きな障碍は飛んだことがなかったので経路を覚えるどころではなく恐ろしくなって、綱島の合宿所でアメリカンフットボールのヘルメットをチョイと拝借して、それをかぶって出た。ヘルメットとリボビタン^③スーパ^④ーを飲んだおかげで勇氣百倍、いまだにどこをどう飛んだかわからないが、今は禁止されているが、当時はコー^⑤ス内に入つて声援や経路指示もありだった。馬や碇手にさわらなければ何をしても良く、ホーキや棒切れで馬を追いかけ廻す双もいた。そんなわけで行く先々部員がちらばっていて、自分で経路を覚えなくても、皆が教えてくれた。みんなの顔が見えた。高橋勇 宇津木 里中 川嶋 高等部の生徒の顔も見えた。一つ一つうなずきながらゴールへ向う。ゴール少し手前でも田坂が時計を持つて、早く早くとさげんでいた。

結果は満点だったがフル増点に^⑥秒足りず明大のミスロンク (明花) の二着だった。



三日目 (余力・審査)

前日まで一位のミスロンクはダブルで失格すると踏んだ。三位の白分が満点でも二十点差があるのでデカが^⑦着で押えられれば勝てると思った。二米の水泳があるのでそこはあきらめるとして他は一つも落下する事が出来ない。一発勝負だと思つて下見をした。

準備運動で出番の直前、一米ぐらいのオクサーを飛んだら問歩が合わず前足をつつこんで人馬転倒してしまつた。一瞬もうだめだと思つたが破行もせず無事だった。かえつて、カンがついて予定通り水濠をじやぶじやぶ渡り一落でゴール出来た。ほぼ勝てる見込みはあつたが、ミス・ロンクがダブルで失格するまで、安心は出来なかつた。胴上げをされたとたんにさきほど人馬転をした時に打つた腰が痛みだした。

久しぶりの勝利の味をあげいながら綱島にひきあげた。

最後に雷神といういい馬に乗るチャンスを下さつた加藤主将その他先輩、同級生、後輩の協力にいつまでも感謝しています。

青蓮

昭四十一ー四十二年

青蓮。愛林ア・パッチ。これはNo.1ではない。ける、かむ、おそうという激しさからアパッチの名がついたが、今の青蓮なんてものではなかった。

来て当分親分の加藤さん以外手入れも、さわりさえもできなかった。しかし月日がたつと我々にもさわらせてもらえるようになり、おつかなびつくり手入れをした。練習に使いはじめると乗るまでしつかりとおさえてもらったものである。乗れば乗つたで反動がすさまじかつた。

そのすこさを語るエピソードは次の様である。高等部の合宿中、安田氏にしこかれて一鞍中あぶみ上

げで不運なことに竹田さん（竹子）がアパッチだった。あまりの反動に彼女は貧血をおこして（彼女いわく目の前が黄色くなって）落馬した。よろよろと苦しがる彼女に芦川さんがかけよって抱きあげて更衣室に運んだ。それを私達ほ馬上から指をくわえてみていた。（というのは芦川さんは当時高等部内の人气的だった）そんなアパッチも白井の合宿中、放馬して一頭で埒をとびこえ、腰骨を折って廃馬となった。

その時つきそっていた里中さんその他が男泣きにならないということだった。二度と廃馬なんてやだ！

青将

上野 洋子（二年）

いつもどこかに傷をつけてたお前は「傷だらけの人生だった」なんぞとキザなセリフを残して、夏のある日、遠い遠い所へ行ってしまった。立派な試合馬にも練習馬にも成りきれぬまま、ヘルニアなんかになってしまつて……

あれから四年たった今。

お前と一諸にいたあの頃を思い返す私。

高等部二年の夏休み

「草食わせに土手を歩かせておいで……」

という三谷さんの言葉を楽しみに毎日馬場へ通つたっけ。

覚える？今はサイクリングコースになってそんなこともできなくなつてしまつたあの土手を。

ズーツとズーツと行つたら、鉄橋の下に来ちゃつて……

ほらあの時、電車が真上を通過したあの時、

あまりの響音に驚いて、狂つたようにあばれ出したお前、

おかげでこっちは鎧革が両方とも切れちゃつて、帰り道はとつてもこわかつたんだカラ

それから日曜日。

近所の父さん連中が「写真をとらして下さいナ」なんてやつて来て……

お前と得意満面胸張つてカメラに向かつたっけ。

馬場に放馬してやつた時のこと。

障碍用のドラムカンの上に腰かけて、お前とよく世間話をしたっけ。

でもおしゃべりはいつも私。

お前はウンともスンとも言わないで、鼻づらをキュロツトのポケットに押しつけては、ニンジンばかりさがしてた。

食いしんぼうはいつもお前。

ボクちゃん・ボク・ボクと呼ばれては、鼻の下ペロ

とのばしてみんなに甘えてたお前。

皮ふ病だといっては、和光堂のベビーパウダーなんかつけてもらつたりしてたお前。

アーア あの日、あの時、そしてあの事。

みんなみんな大切な思い出。

“有終の美”なんてどこにあつたのかい？

ダメな奴。

遠い遠い所にいつてしまつたお前。

住み心地はどうだい？

たまにはこの浮世の草でも食べにおいで。



広告写真・商業写真・建築・装飾・集合各出張撮影

写真の御用命はぜひ当社へ！

有限会社 東都商会

東京都渋谷区鶯谷町18番地5号
電話（461）1746番

青虎

上野 洋子 (四年)

青虎の思い出
話に終始するといつていい位、その上下運動はすさまじいものでした。

先輩の斉藤実子さんは試合前の強化練習の折、まずはその反動に慣らされることから始め、それはそれはきつかったようでした。

彼女が速歩で何回も何十回も馬場の蹄跡を走らせられていた時の、形相といったら・・・。時々目をつぶってはただひたすらにその苦しみに耐えていたようでした。

練習の時など、乗馬が彼に当たった者は皆、その不運をなげいたものです。でも彼のあの反動について行くことができるようでしたら、他の大方の馬でも大丈夫というところで、それなりに勉強になるところもあつたようです。それに彼、手入れの時には結構人気がありました。彼は乗り易い反動を身につけてはいませんでしたが、人をひきつける可愛さ・魅力を備えていたんです。私にとって忘れられない馬さんです。

拍青

小林 正樹 (四年)

ハクセイ
それは一番小さな馬
両親もわからない馬
そして死んだ馬

僕が最初に任され
一番勉強になった馬
それがハクセイ
君は練習馬



でも体は弱かった
セン痛で苦しんだ時もあつた
調子の波がはげしくて

いつも乗り手をこまらせた馬
それは練習馬ハクセイ
でも、なぜかファンが多かつた馬
それがハクセイ

去年の春
僕を泣かした馬
僕の目を涙でいっぱいさせた馬
それもハクセイ

試合の最中に死ぬなんて
調子が良かつたのに
背中が痛かつたんだね
立っているのがやつとだつたね

あの時の君の目
あの時の君の体
もう精いっぱいハクセイだつたよ
早く楽にしてあげたい
それだけしか僕は考えていなかったんだ

君の苦しさを知ってたから・・・
今、僕は青笛に乗っているんだ
青笛って知っているだろ

ほら、あのヤンチャポーズ
君に教えてもらったこと
あいつに教えてやるんだ
でもなかなかうまくいかないね
でも、僕やるよ
すべてを尽して
君の夢を乗せて

ハクセイ
それは幻の名馬さ・・・



青山学院馬術部

陰の功勞馬

柏青号

昭和46年4月関東学生馬術リーグ

戦出場中事故死

Young Men's Shop

E I K O

Gパン
専門の店



IISNO 飯野産業株式会社

代表取締役 飯野嘉治

賞品・記念品等
の御用命は是非
SAGARA のユニークな作品を
——どうぞ



—取扱商品—

カップ・トロフィー
楯・メダル・
パッチ・時計・
装身具・貴金属製品

株式会社 **相 良**

代表取締役 相良 敏夫
(大正十五年・英師卒)

東京都渋谷区神宮前63
(電)400-6478

K. K SAGARA 製作



大隈講堂隣り
“理想と勝利の塔” 輝やく

伝統と実績・熱と力と愛の指導を誇る
大学受験の名門校

- 大学受験科 午前部・午後部・夜間部
私立大学法文系・理工系 国立大学法文系・理工系
医歯薬大系進学コース 弱力補強特別指導クラス
- 英数国単科 ■高三選択各科 ■高三土曜講習
- 高二生・高一生・中三生補習科(講習時)
- 栄冠への年間計画 ()内は受付開始日

第一学期	4月20日～7月19日(2月21日)	春期講習	3月27日～4月6日(2月1日)
第二学期	9月13日～12月12日(7月1日)	夏期講習	7月26日～8月19日(6月1日)
第三学期	1月11日～2月14日(12月1日)	冬期講習	12月20日～1月6日(10月2日)
公開模試	7月～1月・9月除き毎月第二日曜	前期模試講習	1月30日～2月9日(12月1日)

◎寮(男子・女子)有・宿舎幹旋 ◎暖冷房・自習室有

早大正門 **早稲田ゼミナール**

ハガキ・デジワで
案内書送呈

東京都新宿区早稲田鶴巻町437(〒16162)

TEL(202)8186

国電・高田馬場より早大正門行バス終点

地下鉄・東西線(中野ー西船橋)早稲田

舎 既 新 島 綱

既 舎 新 築

沈 廻 浜

(昭和二十八年卒)

聞くところによれば、本年は馬術部創立五十周年にあたる記念すべき年とか、その時に本格的な鉄筋造りの既舎が出来上ることはこれ何かの因縁であろう。今の世代は勿論、次の世紀にまで残る立派な馬術部の基が作られたのは偶然のことではない。私は募金委員の一人として任命されてからずっと青木会長のもとでこの使命を全うすべく動いて来たが、その間つぶさに青木会長の働きぶりに接し、あの忙がしい中を学校当局との交渉、我々委員への指示と本場に寸暇なき活躍ぶりに頭が下がる思いがし、この事を多くの会員諸兄弟にお知らせしたく筆をとつた次第です。

そもその始まりは昨年の幹部会の席上、現役諸君より既舎の老朽化の話が出、建築申請をしたが学校側では補修費がせいぜいとの事、これではまた来年もという様に同じ事の繰り返しとなされるもので、どうしても新築したいという意向が出された。これを聞いた会長は縁較会々員の募金により或る程度の金を集め、それを基に学校への交渉で新築費用を出して貰つてはという計画をたてられ会員中建築方面にたづさわつている神藤君に設計及び建設業者への交渉等を命じられたわけである。そして御自分も進んで学校当局に働きかけ、嘗繕、厚生、体育会等を廻られて既舎新築の必要性を説いてまわられ、この熱意に動かされた学校側も心良く多額の予算を支出する事に決定し、晴れて綱島既舎新築の運びとなつたわけである。

こう書いてみると簡単に事が運んだかにみられるのであるが、その間青木昇副会長やら羽板、佐藤、稲態諸委員の努力、又縁較会々員一人一人の、馬術部の発展の為という大目標に向つて進んだ一致協力の賜がこの快挙に違がつたという事が云えよう。

これから巣立つ現役諸君及びこれからこの馬術部に入つて来る未来の縁較会々員諸兄弟はこの事をよく理解し、皆の小さな力の集まりであるこの既舎を大事に扱い、青山学院馬術部に在籍した事を誇りに思つていただきたいと思つている。

昭和四十七年三月

既 舎 新 築 経 過

緑 韓 会 係

現在の既舎は、昭和三十五年綱島総合グラウンドの開設と同時に建設されたもので、当時のこととて、木造の簡易造り、老朽甚しくあちらこちらを修理して現在に至りましたが、このままでは危険防止の上からも防つておけなくなりました。又、付属建物も今日では余りにもお粗末で、例えば便所にしても、男女共通の原始的なもので、これも解決せねばと昨年末、学院当局との交渉が始まりました。これに対して学院予算として、当初二五〇万円が出され、これで何かと修理をすればとの指示がありました。

そこで色々と検討しましたが、如何に大修理をしても基礎工事に手をつけないことには、焼石に水で、かえつて無駄を重ねることになるので、新築より他に方法がないのではないかと思ひ、OB幹事会の席をお借りしてお願いしましたところ、本年は馬術部創立五十周年に当ることでもありますので、その記念事業として、既舎、女子更衣室、男女別水洗便所の新築を予算総額七〇〇万円の案をたて縁較会が中心となつて、キャンペーンをやるう

ということになりました。そこで、縁較会幹事会が中心となり、学院当局と折渉を重ねられたところ、予算を四五〇万円に増加することが認められ同時に不足分二五〇万円は縁較会の拠金を以つて、これに当てることで最終決定を見ました。これによつて平屋鉄骨既舎一四二、二平方米と付属設備二階建三九、三平方米が、五月中旬目出度く完成致しました。

ここに至りましたのは、まず学院当局の格別の御取計らいによるものでありまして大木院長、石田学長、気賀体育会々長、土田教授(馬術部前部長)、高窪厚生部長、成島課長、遠藤係長、竹内総務課長各位の御高配に対し、ここに厚く謝意を表わすものであります。又OBの皆様には、青木会長をはじめとしまして、幹事諸先輩、記念事業の特別委員として、沈(募金)、佐藤(連絡)、神藤(建設)の諸先輩、さらにOB各位の寄付に対し、深く感謝する次第であります。

この事業において、青木会長には多額の寄付を御願いしたはかりでなく、多忙の中を学院首脳部との折渉及び全般的指導など、精力的に動いて下さつたことも忘れることは出来ません、更に今回の工事に当つては、建築に關係ある縁較会メンバーが動員され、神藤氏を先頭に那波・里中・芦川氏等が利益を度外視して立派なものに仕上げ下さつたことも重ねてお礼申し上げます。

これで第一期工事は見事完成致しました。なお必要安全上第二期工事として管理棟(男子更衣室、馬具庫、馬槽庫、宿泊室、計概算三〇〇万円)を要望しております。これにつきましては将来御事情の許す限り学院当局の格別の御配慮を再び御願ひ致したい次第であります。

以上のようにこの施設は関係多数の皆様のご校愛の結晶でありますから、その使用に当つては、その厚意にも報いる意味で現役は万全なる維持管理をお約束致します。

なお今回の拠金も満額にはまだまだ達していないと聞き及んでおります。OB各位の一層の御協力をお願い致します。御報告を了ります。

緑 較 会 係

厩舎の歴史

石井健 一（二年）

大正十一年馬術部結成以来、自馬を持つに至るまでには多くの歳月を必要としました。

そして、ついに昭和二十六年自馬第一号「青峯号」を購入することができました。しかし自馬を持ったものの厩舎はなく、結局代々木倶楽部（現在の東京乗馬クラブ）に一馬房を借り練習していました。しかし何と言っても貧乏クラブのこと、馬房借用代一千円を支払えず、やむなく一年後には代々木倶楽部を追われるように出て、青山に移ることになります。そして学枚構内に、自分



昭和36年 厩舎



昭和40年 厩舎

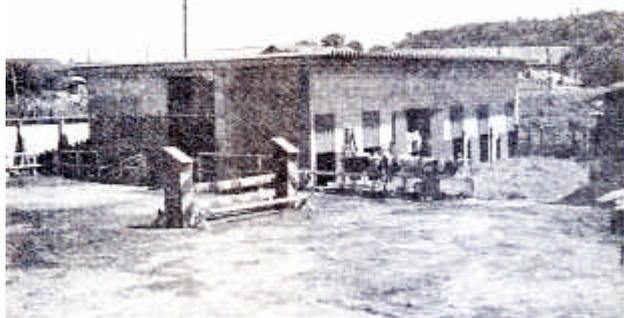


昭和46年 厩舎

達の厩舎掘立小屋のようなものでありましたが、馬術部にとっては、記念すべき厩舎を建てることになりました。当時の部員の方々は、建築現場から余材を貰って来て、掘立小屋を建て、学校当局の反対にもかかわらず、既成事を作ってしまい強引に居すわってしまったのです。そして馬匹の数も増えて行き、八馬房の厩舎が完成するに至りました。八馬房中五馬房は馬房と当てられました。この時代は、大学構内に馬場と馬房があり、休み時間など部員が馬房に集まり、常に身近に馬がいる楽しい時代でもありました。そして三十五年綱島に移った訳ですが、その夏一大事がもち上りました。東都大学リーグ戦の為、馬が馬車公苑に居る間に、学枚側の都合で馬房への出入を突然閉鎖されてしまったのです。やむなく、二ヶ月程

馬車公苑の外來馬房に仮居することになったのです。その年の八月遂に綱島に移転することができたのです。厩舎は青山から移したもので、移転当時は電気も水道もない大変不便なものでした。更に更衣室が部員及び諸先輩方の手で作られるなど、しだいに諸施設も整備されて行きました。しかし、そのような厩舎も木造のため馬ががじったり蹴ったりして年々いたんで行きました。特にここ数年いたみもひどくなり、昨年には補修しても補修しても間に合わず、台風が来たら倒壊してしまうのではないかと思われるほど老朽化が進み、どうしても新厩舎が必要になりました。そして創立五十周年に当たる今年、新厩舎及び女子更衣室が、諸先輩方の御援助によって完成いたしました。現役部員一同心から感謝しております。

我々は、この厩舎を大切に管理し、りっぱな厩舎にまけぬよう、努力します。



昭和47年5月完成 網島新厩舎

初心者大歓迎

さくら乗場会

中央線武蔵小金井駅より徒歩約10分
TEL 0423-81-8557



Creations
HOMAREYA®

創作洋品 ホマレヤ®

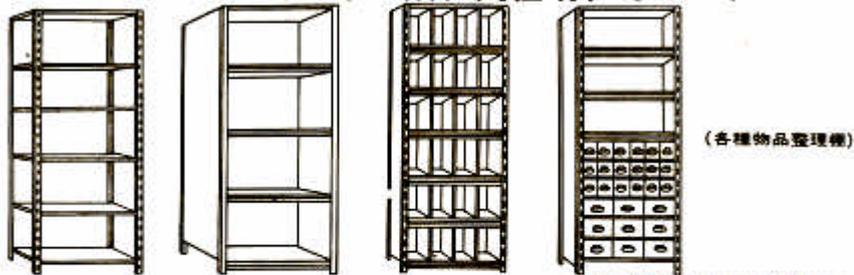
クリエーションズ ホマレヤ®
 東京 ■ 渋谷 ■ ホマレヤビル
 ■ (461)0260 代表 ■
 ショッピングインショップ ホマレヤ®
 日本橋 ■ 室町 ■ 千疋屋総本店ビル
 ■ (270)1684 直通 ■

ネクタイ、ネクタイ止、カフス紐、キーホルダー、スカーフ、巻下、
 ネックレス、靴べら、など全て馬の模様人が揃っています。

スチール棚・スチール家具

資材・製品の合理的な管理に

物品棚、作業台、中二階、間仕切、ガレージ



販売—設計—施工まで
棚の専門店

工場・倉庫の資材・製品管理は
当社へご相談下さい。



株式
会社

光工業社

本社 東京都台東区台東4-26-7

TEL(03)833-0911

昭和31年度青山学院馬術部卒業 福原美里

競馬具・乗馬具・各種鞭・製造販売

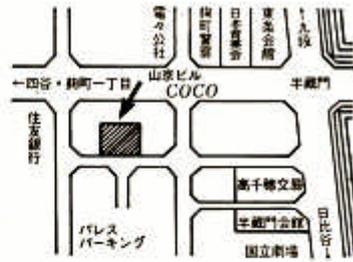
青木馬具製作所

横浜市神奈川区神大寺町 679

TEL 045 (481) 1839

スナック

Co Co



A.M 9:00~A.M 2:00

若者のつどういこいの場

スナック 千代田区麹町1-3 山京ビル
TEL=(261) 6889
アトリエ 渋谷区東三丁目6-7
TEL=(409) 6138

——近代建築の急先峰!!——

ガラス(九段) 芦川硝子店

TEL 261-6294

念願の一、二部合併

念願の一部・二部合併

秋元 国松
(昭和三十二年卒)

学院馬術部に、二部馬術部が誕生したのは昭和三十二年四月の事でした。それ以来学生OBの血の滲むような努力によりまして、運動部としての活動と、それを支える伝統精神を引き継いで来ましたが、昨年十月に馬術部として一本化したしました。

学院内に馬房及び馬場がありました頃は、一部二部の別なく練習をしたものでした。それでも日曜日に試合がある時などは、クラブにて練習をしました。特に使用したクラブは今ではもうなくなりましたが清風会と参宮橋にあります東京乗馬クラブでした。学院のグラウンドが網島に移るに至り、クラブでの練習が主となり、乗馬と馬の手入れは、網島での夏期合宿のみでした。安井君がキャプテン時代に部の発展をみ、部員数も三十名を越え、それまで個人的につながっていた品を結ぶ緑蹄会が出来ました。精神的経済的に援助をする事とし、初代にしてさいごの会長を私が長々といたしました。その間は平穏なものでありませんでした。クラブを使うとゆう不安定さと、それから来る部の運営の難しさと部員の心の一致を計る努力は並みだたいのものではなく代々のキャプテンの苦労は筆舌につくせません。

私も彼等の努力には頭が下るものがあり、出来るだけの協力をいたしてきました。東京乗馬クラブが使用出来なくなり当時阿部先生のおられた横浜乗馬クラブに移りました。それから神奈川乗馬クラブに移りました。クラブに馬が少かったので、大塚君より自馬を一

頭借り、どつやら練習を続けました。愛称ボーズで、この馬は合併の時まで、部員の為はその任をはたしました。ここも廃止になり一時は部の解散も考えましたがどうやら武蔵野にありますさくら乗馬クラブに居を移すことが出来ました。

馬が少ないので馬場を私の勤めております第一ホテルに土地を売って廃止しました清風会より馬を一頭購入し、どうやら部のていさいをととのえました。

学校の予算を増額してもらいさくら乗馬クラブ所有者鈴木氏のご理解により部員も又増加し、三十名程となりました。しかしそれが頂点で、部員数は下向線をたどるようになり将来に対する不安と、自馬三頭を維持する事の難しさが学生の心を暗くしました。

OBもいろいろと努力しましたが思うようにゆきませんでした。網島にても一部馬術部が同様に、男子部員が少い事に心を悩ませておりました。両部ともに思う事は一つで、両キャプテンの努力と部員の協力によりまして春頃よりその準備をし、夏期合宿によりまして合併しても大丈夫との自信のもとに、二部は一頭の白馬を残し、他を処分して四十六年十月に網島に移りました。

又その援助をして参りました緑蹄会も十二月に臨時総会を開きまして緑蹄会に合併することを定めました。OBよりは合併に対して、精心面でのアドバイスが森川君、鈴木君その他諸兄姉より与えられ、今後の発展の為に皆で努力する事を約して四十七年五月緑蹄会総会をもって解散することにいたしました。

馬術部は他の部と異なり、生きている動物を扱うので、その世話も大変ですし、その費用も馬鹿になりません。自然とのふれ合いの少くなりつつある今日、馬を通して人生の大切なものを体得出来るこの部をますます発展させてゆきたいと思えます。

元自治会馬術部主将挨拶

小川 藤夫
(昭和四十七年卒)

その一 出合い

人と人、人と物は常に新鮮だ。

新鮮と出合いという言葉は同義かもしれない。ポクと馬との出合いは、とても新鮮で驚異だった。

馬は思ったより大きく美しく、そして可愛らしかったそれは四月の何もかもつつみ込んでしまうような、明るい陽ざしのせいだけではないだろう。春の陽はいつか大きい夏の陽となり、やがて秋から冬へと細くなっていくハツとして気づいたら、馬は手の中のビールジョッキのようにポクから離せない身近かなものとなった。そして四年間が過ぎていた。

その二 辛抱

年々歳々花は咲き散っていくけれども、人は年々歳々あまりにも変わらすぎる。

こう思うのはポクの感傷なのだろうか。コッペパンが唯一のごちそうと思っていたポクにとつて、今はあまりにも会へ物も衣服も豊富になってしまった。トリスからレッド、そして角、ダルマとポク自身も変ってきているのだから、それでよいのかも知れない。

けれどももうすべらな広告用紙をノート代りに使用することや、麦ばかり目立つ夕飼などを知らないポクたちいや正確には、ポクより二、三年後の人々にはこれでよいのだ、あるいはこれで辛抱し努力するのだという気が少なくなっている。これは長いものには巻かれるという意味ではないが、根性という言葉は古い閉鎖的なものとしてしか受けとれない人たちの多いことにびつくりしている。

早朝起床の練習、ボロの臭い、そしてネワラの入入れなどに悲鳴を上げ逃げだした同輩、後輩たちよ、君たち

は逃げられないものに対処したら、一体どうするつもりだ。

その三 春夏秋冬

人間は自然を克服しない方が幸せだろう。夏は蚊の襲撃、冬は寒さのため馬場での泊りはいつも睡眠不足だ。ポロの臭い、いななき、前かき、脱房、そして疝痛など、いろいろ気になって眠れない時も多かった。

宿直当番も部屋にカーテンをつけたり、灯を明るくしたり、泊りのローティションを変えたりして改善したけれど、人の欲望はどんどん拡大してしまう。

その四 決断

際を断つて踏み出すことはあるいは青春かもしれない。新入部員の定着率は年々悪くなってしまった。やめたいと希望する部員との話し合いは、彼らを甘えさせるばかりだし、練習方法の改築も、もっと楽になるのではないかという怠けにつながっていくばかりだった。部員が一人退部すると他の部員の仕事量がふえ、労働がきついついからといってまた退部していく。

悪循環はどこまでも続く。本当にやりたい者だけが残った。そして三頭の自馬のうち一頭を手離さざるをえなかった。残した二頭共使用できることは少い。

どちらかが故障することが多いからだ。各個乗りの練習しかできないことは、ポクたちを欲求不満にした。もっと上手になりたい。

そんな時、学友会馬術部から、自分たちと一諸になって綱島へ来ないかと話があった。綱島へ行けば沢山の馬に乗れる、もっと上手になれる可能性がある。いや待てよ、勤労者は練習できなくなるかもしれない。異和が起るかもしれない。ポクたちは一年生から四年生まで一諸になって何度も話合った。結局、口実をつけて練習から逃げることは間違いだ、体質が異なるものの合体は必ずしも異和をよぶものではない。実をとるべきだ。このままでは欲求不満はますます拡大し、クラブは解散せざるを得ない。



一部の望むもの二部の望むものが別々であっても、一諸になることで互いに得られるなら、思いきって踏み出そう。自治会馬術部をなくすことは淋しい。ポクたちはあえてこの感傷と効用を断つて合併した。

緑蹄会の皆さん、合併につきまして不手際の多かつたことを深くおわびします。

ポクたち最小公約数を生かして元気にやっています。

サクラ乗馬会の鈴木さん、そして会員の皆さん、長い間本当にありがとうございました。

紳士服・乗馬服・乗馬ズボンの御用命は

サービスと技術を誇る!!

新井洋服店

東京都港区芝3丁目29番地3

TEL03(451)1234

自治会馬術部から

体育会馬術部へ

荒井良政（四年）

四十六年五月、二年生の女子部員二人が退部を申し出た。理由は開かなくてもわかっていて、人数が少ないうゑに仕事の量がふえた今、ここで二人の退部はしたい、しかし泣いてまで退部を申し出る人間をひきとめても無意味だろう。

上級生がこんな状態では新しく入った一年生がついてくるわけがない。一人やめ、二人やめ、ついには一年生は小林一人になってしまった。いいクラブでだからと偽りの笑いを浮かべて新入生を引張るのもいやになった。残っているのは十人。時間的に余裕があつて、桜乗馬のアルバイトを出来る人間は六人ぐらいしかない。又他人の負担する仕事の量がふえていく。

自馬三頭と桜乗馬十二頭分の朝飼、昼飼、夕飼、馬房掃除を一人でするときもでてる。自分自身にも、又残った部員もそれぞれ何らかの欲求不満の火がくすぶりつづけていたに違いない。つい愚知もでてる。気分転換の意味で、朝八時の練習時間を六時半からにしてみた。それでもクラブの雰囲気はたいしてかわつたとは思えない。

自馬三頭をやしなひ、桜乗馬の馬も管理するクラブの運営方法はもう限界に近づいていた。いったい何の為にこうまで苦しんでクラブを続ける意味があるのだろうか。自分達が今流している汗はいつたい何の為の汗だろう。

目的に向つての苦しみは、その目的が達成できたとき、何倍かの喜びにかえることができるだろう。しかし目的のない苦しみはただの苦しみでしかない。

「苦しみには好んでとびこめ。」そんな言葉もこのときは全くナンセンスなひびきとしてしか、伝わってこなかった。

スポーツに何らかの意味づけをするのはいけないことかもしれない。だけれど僕達は何かを求めたかった。



何の為にクラブを続けるのか、しいていえば馬がかわいかったからだろう。けれどそれだけの理由では、自分の胸のモヤモヤを晴らすことにはならなかつた。欲求不満を解消するはずのスポーツが、反対に欲求不満を蓄積させていく。毎日毎日、クラブの将来のことを考えない日はなかつた。

そんなとき主将である小川さんから、体育会馬術部と合併問題をきかされた。

合併をするのなら今がチャンスだろう。

とにかく今のままのクラブでの状態では、解散か、縮少か、あるいは合併かの三つの道しか残されていない。

しかし合併にさいしいくつかの不安もあつた。体育会馬術部との人間関係、技術上の格差、そして一番つらか

つたのが、馬を一つしかつれていけないことだつた。

クラブに対する不満はあつたが、馬に対する愛情はそれとは別のものだ。ここで二頭手放すのは胸がいたむ。

自分自身の気持の中には、どうせ合併して馬を手放すなら、自馬を一頭にして同好的なクラブにして、このまま自治会馬術部を存続させていこう。という気持と、このままきつぱりと合併した方がいいのではないだろうか、という気持がிரりまじつて、なかなか判断をくだせない状態がつづいた。

何回も部員会を開いて話しあつた結果、十月に青鬮とともに体育会馬術部と合併することを、全員の統一意見として決定した。

青駿は桜乗馬のお世話になり、青鷹は村山乗馬のお世話になることになった。

青鷹を村山乗馬につれていくとき、馬運車の中で涙が出てしよがなかつた。自分達にどんな理由があるにしても、手放される馬にとっては、納得のいかないことだろう。心の中で何度も、すまない、すまないといつづやいた。

体育会馬術部と合併して一年が過ぎようとしている。屋城、斉藤さん、未金、小林、それに自分と合わせて五人が残つた。未金はクラブの上級生として、小林はクラブの中堅としてはりきつてやってくれている。

卒業が近づいた今、いろいろな事があつたが、やはり合併してよかつたと思つていく。

そしてあの苦労の多かつた桜乗馬時代も妙になつかしい直合併にさいしOBの方々には、いろいろと不手際がありましたことを、ここでお詫びいたします。

馬術部 万歳

鈴木敬治

（昭和三十九年卒）

一体大学で何をやつたか？本業は英米文学ではあつたが、自分の不勉強さを棚に上げれば英文学を味う程の事もなく、バーで隣り合つた外人の女の子を英語で口説くにほ程遠く、ただ、急に出会つた英文と、よびとめら

れた外人にびつくりしなくなつた事位の功德しかなかつた様だ。第一次安保と第二次安保の間の比較的平穩に過した学生時代の中で、馬術部生活を除いたら、いかに中味の淡泊な四年間になつた事だろう。これはクラブ活動の体験を持った者のみの知る。大きな掛替のない、次なる社会生活への精神と肉体の修練の場であつたと言つても過言ではない。

思い起せば、我々が入部した当時は、学生会館など無論なく、その前身のボ口部屋 否、体育部合同物置がどんぐり食堂などと共に軒を並べ、練習は踏み固められた土の校庭であつた。二部学生は日曜がその練習日に当てられ、何せ人数が多かつたのと、日曜が七日に一度しか廻つて来ないという、キリスト以来の取り決めのため、一年坊主は、あたかも遊園地の乗馬よろしく、数周すると次の番に渡さねはならず、一、二度欠席をすると、練習段階がえらく止つてしまひ、号令の意味さえ分らず、どきまぎすることもしばしばであつた。ただこの項は、二部の交流も多く、特に上級生には一体感が強かつたと覚えてゐる。とかくするうちに、代々木の東京乗馬倶楽部を併用していたのが、馬場の綱島移転に共ない、東京乗馬一本で練習をする様になつて行つた。当時のくわしい顛末は二等兵には知る由もなかつた。

ところで最近でこそ部員の馬装姿は立派に整ひ、馬上になければ、いづれがあやめ、かきつばた。障害だろうが、パツサージユまでこなしていそに見える姿だが、その頃はみじめそのものだつた。自前の長靴を持つてゐる者などほとんどなく、皆クラブ備付の古長靴を、乗り終る度に履きかえ、ある者はパクバク、ある者はきつくて脱げず、中には甲と底が口を開き、素足で鎧を踏み、底革は鎧の下で踊つてゐるものまであり、交替はそれこそ大変なものだつた。今となれば信じられない事だが、百円の部費を値上げする、しないで、もめた財政下にあつては無理からぬ事であつたのだらう。

さて、この辺で二部の品会であつたところの緑蹄会の発足についてふれておこう。

私が二年の頃、内部的にも独立した二部として品会も、ハツキリと二部馬術部卒業生が、二部学生を応援してほしいと言つ声が出始め、品会を作つてほしい旨、請願し、ここに緑蹄会なる品会が発足した訳けである。

メンバーの中には緑鞍会と樹け持ちの人も多々あり、外部的にはスツキリしたものではなかつたかも知れないが、昼間、職を持ち、夜勉強し、休日に部活動をしようという二部学生にとつては、当時どうしても、こんな形のバツク・アップがほしかったのである。今般十余年振りに、一、二部合体の姿になつた時、独立二部馬術部の品会の一人として、いつまでも、これら時間的、肉体的に苦しい部員が又部員にならうとする者が、馬術を通じ、健全な精神と肉体を培うチャンスを見殺す事のない様、お願いしたい。そして共に学生馬術の発展を希求するものである。 青山学院馬術部万歳

馬術部生活を振り返つて

奈良義 弥

(昭和四十三年卒)

私が入学したのは昭和三十九年四月、勉学の為ではなくて社交性を身につけようと思つて大学の門をくぐつたのである。(今では考えられないが当時は無口で口手下であつた。)それには何かクラブをと思つて新入生歓迎会の会場であるP・Sホールへ足を運んだ。そこでクラブ紹介の時の馬術部員の男意気と女子部員の鮮やかな赤と紺のフレザー姿に感され(?)後日部室のドアをノックし、入部届に名前を書く事になつたのである。

そして四月×日朝六時迄に東京乗馬倶楽部にズボンとシャツを持って来る様に言われ、眠い目をこすりながら駆けつけ、生れて初めて馬の背にまたがる事になつた。

(その時の気持ちは好奇心と恐怖が半々位であつた。) 当時は部員数も多く、十五分前後しか乗れなかつたので雨や雪の時は喜び勇んで馬場に向かつた。(何故ならば天候の悪い時は出席者が少ない為)又ふところの豊かな時は、自腹をきつて馬を借り練習した。その頃の練習馬は北斗、富士宮、宮光、駒猛、白玉、勝緑、伊隆等でそ

れぞれなかなかのクセ馬であつた。二十名近くいた新入部員も春の遠乗りが終わつた頃から一人減り二人減り、夏の綱島合宿の時には半数以下になつていたと思う。又この頃は毎晩の様に横浜乗馬倶楽部に泊り込んでアルバイトをしたので馬にもだいぶ馴れ、ある程度自信もつてきた。(酒もよく飲んだ。)

二年の秋頃に種々の事情で東京乗馬で練習する事ができなくなり、東横線妙蓮寺の神奈川乗馬倶楽部(現在はない)に移る事に初め、大塚先輩の御厚意と神谷先輩の意地と努力で二部で初めての自馬を持つ事ができた。その時から那波先輩にコーチとして面倒をみていただく事になり、翌年の東日本大会(米軍淵野辺キャンプ)で、バルクール・ド・シヤス(那波先輩騎乗)と六段飛越(大塚先輩騎乗)で優秀な成績を納め、青山二部にライディング・ライト・ジュニア号(青勇号)ありと名をあげた。我々部員も大喜びで一層練習に力が入る様になり、大津乗馬倶楽部で一週間の合宿も行った。参加者は那波神谷、谷口、奈良、高橋、生形、青木。この人数で二十頭余りの手入れ、馬房掃除と今思うとよくやつたものだと我ながら感心する次第である。(寝ワラの多いに閉口)

そのうちに神奈川乗馬の峯岸さんから廃業するからとの話が持ち出された為に我々部員は新馬場を見つけるのに奔走し、やつと武蔵小金井の桜乗馬倶楽部に腰を落ち着ける事になつた。その間にも何とか馬場を持てる様に学校側と交渉し、大木院長、学生部長に再三、再四お会いして、部の内情を詳しく説明して話を進め、色よい返事を聞いたのであつたが最終的にはまともならず、月々一万円の特別予算を出すという事で打ち切りになつてしまつた。(この時には高村先生、秋元先輩に大変お世話になつた。)一時は馬場の件、部の財政状態及び部員数を考へて部の解散を考えた事もあつたが主将として部の運営を引き受けた以上は何とか存続させねばならないと思つて力一杯やつてきたのであり、馬が始まり、馬で終わる毎日であつた。

今振り返つてみると楽しい思い出としては、一年の遠乗り、青山祭の馬寿司(週間朝日に大スクープ?)、辛かつたのは一年、三年の綱島合宿(よくしぼられた。)



それから部の解散を考えた頂であるが四年間よく頑張り通したものであると思う。(自己満足)これも秋元先輩、諸先輩の御指導と御協力及び田口や後輩の努力の結集が私を支えてくれたものであったと思います。
最後にこの度の合併にあたって現役諸君に望む事は、一部と二部では授業時間も違うし、アルバイト及び正職についている者もいるであろうし、なかなか難かしい点もあると思いますが、学生らしく、健康に充分注意して青山学院大学馬術部の為に努力を惜しまないでもらいたいと思います。
(昭和四十三年卒)

D A C

DAD CREATE Ltd.

東京都港区南青山6-15-12・アパルトマン青山3F1
TEL (代)407-2072



祝 青山学院大学馬術部50周年

馬具の井川

乗馬帽、鞭、拍車、巻バック

有限会社 井川商会

東京都文京区向丘2-16-7

我ら現役 現況報告

「現役紹介」

主 将	副 将	係 長	主 務	副 務	会 計	女子責任者	緑鞍会係	緑鞍会係	記 象	高等部係	協会幹事	ポロウラ主任	馬 匹 係	馬 具 係	馬 具 係	用 具 係																			
齊藤 比佐郎	永井 彦之進	小林 正樹	屋城 孝一	荒井 良政	佐倉 由美	上野 かな子	上野 洋子	齊藤 由理子	板倉 啓文	未金 雅宏	金 美春	紫田 貢	石井 建一	小林 知	鈴木 敏文	栗原 徹	内山 えり子	杉浦 玲子	宮内 優子	根本 紀子	高橋 治代	松永 京子	宮本 里美	豊田 隆司	塚原 成浩	大東 義明	伊藤 好	中島 維子	正木 さきの	金 優子	南 洋子	松嶋 秀子			
経営四	理工四	法 四	経済四	経済四	法文四	日文四	英文四	教育四	経営三	経営三	法 三	経済二	経営二	経営二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二	法 二

昭和四十七年度主将挨拶

経営四 齊藤 比佐郎

思えばこの馬術部に入り、もはや六年の歳月が流れていった。そしてこの馬術部生活も残すところあと一年になつてしまつた。過去をふり返つてみると、楽しかつたこと苦しかつたことが次々と脳裏をかすめる。そしていろいろと御指導にあつた下さつた諸先輩方の象が頭に浮ぶ

六年間は長かつたようにも又短かつたようにも感じられる。とにかく僕は我青山学院大学馬術五十年の長い歴史の中のわずかな一片を過ごしているのである。そして僕は現在、馬術部始まつて以来何十何代目かの主将をつとめているのである。この古い伝統の下で、自分の責任の重さを感じざるを得ない。

馬匹数0だつた時代から現在に至るまで馬匹数、部員数はますます増え、発展の一途をたどつてきた。何んとかその発展の速度を弱めないよう、止めないようにしなくてはならない。全く責任重大である。しかし馬匹数、部員教の上で組織が拡大されたといつても、それは眞の発展とはいえない。

クラブの活動状況を評価するには、戦績と部員の団結力との二つの面から見る事ができる。この二つは体育会の中の部である以上、どちらも捨てることの出来ないものである。そして戦績と部員の団結力は因果関係にあるものだと思う。あるいはそうあるべきであると思う。戦績を上げるための各部員の努力が、部員をまとめる原動力になるのである。

各部員がお互いの技術を向上させ、優勝をめざし、その目標のために多くの困難をのり越え、苦しみをわかち合い、慰め合つてこそ、仲間であり同志であると云えるのではないだろうか。そうなれば戦績は自然向上できるものと信ずる。

クラブの最終的は「人格の高揚」であるかもしれないが、その目的は我々が意識してめざすものではない。やはり我々が目ざすものは馬術の追求なのだ。我々はその馬術を造り上げるための努力、苦しみの中に生れる、わずかな進歩に大きな喜びを見出し出しているのだ。

現在馬術部は、阿部先生をはじめ、すばらしい指導者にめぐまれ、又二部との合併も終え、近々、立派な厩舎も完成しようとしている。外面的条件は、すべて整つた状態にある。そこで我々は、そのすばらしい環境にフィットするような内容をつくつていかなければならない。厩舎新築のために、品の方々が、払われた努力に報いるのは、我々現役が馬術の向上に精進し、優秀な馬匹を造り、戦績を上げること以外ないものと思う。

しかし技術の向上、調教と一口にいつても、それは本当にむずかしい。技術の向上には優秀な馬匹が必要であるし、又優秀な馬匹をつくるには、すぐれた技術が必要だからだ。技術もない、優秀な馬匹もないというドロ沼に一度ハマつたら、容易にはぬけ出せない。我校はまだそのドロ沼にはまつていないが、団体優勝のレベルにはまだ至っていない。

馬術を一つの山とたとえるならば、それをめざすには必ず、険しい山道を通らなければならない。そしてその山には頂上というものがないのだ。学生の間でも、優勝の標高は年々高さを増している。我々が登れば他校でも登つているのだ。しかしどのような障害、壁が待ちかまえてよすが、我々は一歩づつ登つていかなければならないのだ。我々はそれに負けない健脚をつくり、全員足並みをそろえて登つていかなければならないのだ。

緑鞍会係挨拶

理工四 永井 彦之進

今年度の緑鞍会係は、理工学部四年永井彦之進と文学部四年上野かな子がつとめる事になりました。至らぬ事ばかりですが、よろしく御指導鞭撻の程お願い申し上げます。

さて緑鞍会の年間行事も毎回お忙しい品・品の方々の御協力を得て行なっておりますが、今年度の行事を御紹介致します。

六月 緑鞍会定期総会 十一月 遠乗り会 放秩父
一月十五日 初乗り会 於網島馬場

今年度はOB・OGの方々の御協力により、九月十五日に一部と二部が合併致しまして、現役一同一丸となつて努力致しております。馬房新築等これからもいろいろと御迷惑をおかけ致しますが、先輩方々の暖かい御支援を心よりお願い申し上げます。

先輩の皆様、お暇な折にはどうか馬房にお立ち寄り下さい。現役一同心よりお待ちしております。

緑鞍会報告

四十六年度緑鞍会会費、及び「いななき」第九号に対する御寄付につきましては、御協力下さいまして誠に有難うございました。又馬房新築につきましても、多大の御配慮を賜わり厚く御礼申し上げます。網島厩舎は戦後二十数年を経ており、ここ数年来新しい馬房を夢みてまいりましたが、OB、OGの方々の御協力により、いよいよ新馬房建設に踏み切れます事に現役一同心より感謝致しております。

昭和四十七年一月十五日現在会計の小計は十万八千五百円。寄付二万四千円、特別会費（総会、遠乗り会等）八万六千円となりました。会費、御寄付頂戴の際は、現役が大変御迷惑をおかけ致しまして申し訳ございませんでしたが、四十七年度分につきましても何卒よろしくお願い致します。

昭和四十六年度会計報告

経済四 荒井 良政

馬術部という非常に予算の収支の激しいクラブの中の会計という重要な仕事にたずさわり、強く責任を感じます。

馬も九頭から十一頭とふえ、予算額も年々増加していく様です。その為に部の会計の中の競馬場のアルバイトの占める割合は大きく、今回の「型インフルエンザ」による一回東京二回東京の競馬中止は会計にとつてかなりの打撃で後期の予算はかなり苦しいものになりそうです。

収入の部		支出の部	
前期繰越金	一、三九	連盟費	二四、四〇〇
負担金	二九、五	用具費	四二、一〇〇
寄附金	九、	事務用品費	三、六九九
雑収入	八九三、一	通信費	二、三九五
入部金	四二、	交通費	三八七、三〇五
馬連補助	三八三、〇	厚生費	一七、一五〇
体育会費	五、二〇〇	修繕費	一〇八、九五〇
		交際接待費	一八、三六〇
		役員報酬	一一〇、〇
		雑費	一一、一三〇
		試合費	六〇、〇
		維持費	二、八八〇
合計一、七四四、一〇〇		合計一、六二四、五六九	

建築設計監理

神藤重光

(株)新東企画設計事務所

渋谷区千駄谷2-28-4東熱ビル4F

PHONE 03-404-7038~9

つれづれなるままに

血文四年 佐倉由美

馬に乗りはじめてとうとう六年という月日がたつてしまいました。出ていった馬、入ってきた馬、あるいは、いろいろいることが頭に浮んでは消えていきます。

自他共に馬キチを認め、一種のかたわではないか等と時々心配しています。

へたのよこずきとはよく言ったもので羽化登仙の境地を味わうまでは馬を続けるんだなんて宣言したものの果たして続けさせてくれる人が見つかるかどうか・・・この一年を共にやっっていく人達が馬だったら？ 皆きんも想像をめぐらして下さい。

齊藤比佐郎君
年は普通ですが網島に来て六年。ここでは古馬である。整った馬格をしており一番良い成績をおさめている。ただ物を見たり、へたな乗り手だと逃避したりする。純血種で一本気なので馬場での運動のきりかえはへたであるが、よい乗り手とのコンビでこれからの活躍が期待される。

永井彦之進君
年は馬場で一番年長。網島に来てから三年だが血統は良い。少し気むずかしい所があつて馬房ではタイプボなどをやって思いにふけつてゐる。やせてゐる為か反動が高いのが難である。若い馬には親切で時々夜など自分の馬生経験を聞かせてゐる。

小林正樹君
少し小太りの温順な馬である。人間にはすこぶる友好的でじゃれつくので皆から好かれてゐる。特技はアワビ

(上唇と下唇をめぐるんです) 少し怠慢ですがムチをもてば平気。器用なので馬場も障害も適当にこなしてゐる。

屋城孝一君

ちよつと見には不愛想で熊髯などをしてゐるが温厚な馬である。環境に順応しやすく、網島に来て日も浅いがもういろいろなることをみつけ、かいおけをひっきりかえ

したりしているお茶目な馬だ、ニンジンや砂糖をもつていけばかんんだりしません。

荒井良政君

これも新馬、前の馬にくらべおちつきのあるハンターわりと馬見知りするが、慣れればなつく。失敗はあまりないが試合ではあと一つというところである。馬格が大きいので障害の有望馬として調教されている。

高見誠悟君

網島に来て三年。まだ若い馬で放馬癖があつて泊まりの目を盗んではぬけ出す。しかしおなががすくと勝手に戻る。馬格が大きくないので飛びのりには人気の的。

かわいい顔をしてかん高い声でいなくので子供に好かれる。普段はおとなしく勤勉である。

上野洋子嬢

感情の起伏が激しく、だだっ子のようなかわいい馬。障害も気分が飛ぶ。網島にきて六年目の古馬。

やはり雌馬らしく丸味を帯びてゐる。ただひとつの悩みは長い髪をとびのりの時ひっぱられることだと馬房で話してゐた。

上野かな子嬢

洋子馬以上に気分屋、だが三年目なのに気が強く障害が好きでよく飛ぶ。他の雌馬にも共通してゐるが気に入らないとけつとばすこともある。だが普通の時はおとなしい純日本産のきれいな馬である。

斉藤由理子嬢

馬場に来てから四ヶ月日。だが他の三頭の雌馬よりも大人で新馬の面倒見がよく相談係のようである。

考え深く馬としてどう生きるべきか等と考えてしまつたので障害でも同じようにとびそうだとまうてしまつたりする。が、温厚な品のいい馬である。

そして最後に私、ユミ嬢

黒馬物語「ブラックビューティー」の雌馬版とでもいいますか？ 馬場馬としてグランプリめざしてゐる？ だが多分にジソジャー的で、気が強そうではないがやはり雌馬、気が弱くて高い障害は目をつぶって飛

ぶ。他の雌馬にも共通ですがニンジン・果物・角砂糖が大好きでそして人間も大好きなのです。

サッポロラーメン

ぜんべい

笹々塚駅前

長谷川 渉 (高等部卒)

TEL 467-0281
自宅 460-0854

五月 新装オープン

楽しいふんいき 明るい環境
スポーツのメッカ柏へ……

柏乗馬クラブ

馬場面積 縦 100 m 横 60 m
馬房数 30頭分 学生合宿所有



AKABANE, TOKYO

北区赤羽1の17の1

TEL 901-1668

祝 いなき、発刊50周年

アルミサッシもいいけれど
木製建具も捨てたもんじゃない
造った者の熱い熱い血が流れてる。
そう……………そうなんだ
あいつは生きてるんだ！

すばらしい住居造りの助演者

里中建具店

〒170 豊島区駒込 6-34-2
TEL (918) 0336

RIDING WEAR

TAILOR **川モリシタ**



東京都品川区上大崎 2-6-25 TEL (441) 2922
国電目黒駅下車徒歩5分

合宿記（前期）

経済四 屋 城 孝 一

昭和四十六年夏 我々二部馬術部は間近に控えた一部の合併を前にした合同の合宿に大いなる期待とがすかな不安を胸に自馬三頭を乗せた馬運車で綱島へ向つていった。

上級生として初めての合宿、ましてまだ気心の知れない連中と一諸にこの一週間を過ごすとなるとある程度の摩擦があるかもしれないと考えたり、いろいろ障害のあった合併問題も大詰めにきて総仕上げの意味のこの合宿はどうしても意義あるものにせねばと自分なりに決心した。

合宿の一日 それはどこの馬術部でも変りないスケジュールである。早朝の起床・体操・馬房掃除・下級生の訓練・手入れ・食事・午後作業・夕食・ミーティング・消燈、単純な一日ではあるが、下級生に馬術部員としての自覚を植えつけるには、平常の練習では得られない貴重なものとなる。

住み慣れた綱島馬場での合併となると緊張感の不足が心配であったが、寝むような顔が出そう朝四時半朝もやの中の馬場までの道のりを走るといやおうなしに体が温まってくる。全員でする馬房掃除のすさまじさ、お馬さんもびっくりして飛びおきる。お陽さまがやっとなをみせはじめ五時半馬装整列、気合いの入った「氣をつけ、礼」の号令で練習開始、前日のミーティングで乗り馬を決められた一年生がさつと散る。青駿に乗る者ほどことなく余裕のある顔つき、二部の馬に乗る者よつと不安そうな顔。号令者の「乗馬」の声でいよいよ馬にまたがる。

蹬上げに苦しそうな顔。額から汗が流れアゴが上る。そのつど気合いの入った注意がとぶ。慣れない障碍に向い目をつぶり飛んでくれと祈るような者。でもみんな必

死で充実した練習内容であった。

その後上級生の調教、阿部先生の御注意がある。調教つてむずかしいな。約二時間の練習が終了手入れに入る。やがてパンと牛乳の配給があり、なごやかにバクつく。十一時ラクビー場が我々専用の野球場になる。わざわざ新品のバットとボールを買い求める熱の入れよう。午後作業は全員がそれぞれ、大工さんやお百姓、土方といろんな職業につく。休憩の時間がいつのまにか発声練習に変わり、綱島中に聞こえそうな声を張り上げる。通りすがりの人がびっくりして見上げ思わず爆笑する。

容赦なく照りつけていた太陽がようやく沈みはじめ午後五時作業を終え、宿舎に帰り入浴。下校生が頭を悩ませ作った夕食。男世帯の悲しさだが結構いける。

ミーティングは大切な時間馬、馬、【みんなうまくなるう。消燈までの自由時間はあの話？に終始する。あの子今頃何してるだろうな。そして十時に消燈して合宿の一日が終る。

長いようで短かった合宿、打上げも楽しかった。女の子がいらないのもたまにはいい。すっかり品がなかった。今回の合宿は一部、二部のへだたりもなく、みんな打ち融けて楽しく行えた事が、合併した今、大きなプラスになっていると思う。

合宿記（後期）

法二 栗 原 徹

僕にとって、入部して二回目の合宿だったので合宿の

様子はだいたい心得ていましたが、後期の合宿は、前期の合宿とは異なり、関東学生総合馬術大会の選手のためのものでありましたが、又一部の学生だけの合宿でもありました。この合宿は八月十九日から二十九日にわたる長い合宿でありましたが、一年生である僕達は、あまり馬には乗れませんでしたが。朝まだ暗い四時十五分に起床し、寝わらを出し五時ごろ一鞍目の練習が始まり、一年生の乗れなかつたものが、草刈り部隊に自動的にくみこまれ、すぐ出勤するという毎日でした。そして草刈りから帰ってくると、だいたい朝食の時間でした。僕は、この朝食の時間のおとたばこのうまさ、わすれられませんが。朝食がすむとすぐに、手入ののこりをすませて、障害作りや、馬房直しの作業を開始し、食事当番のものは昼食をつくり、合宿所へもどった。この当番が大変なもので前日の泊りの者二人がそれに当たるのですが、昼夜と、二十人以上の食事をつくるので、前の日に二人で献立を寝ないで考えたこともありました。

そして午後は二時半から作業を開始し、風呂に入り六時に夕食を食べ、九時からミーティング、十時に消燈という、ぎっしりつまったスケジュールでしたが、作業時間の終りにやる野球や、合宿所に帰ってからの、トランプなど、だいぶ僕達を、なぐさめてくれるものがありました。その中でも中旬のM劇場での芸衝観賞は最も僕達を喜ばせてくれました。

僕の廃乗日誌の合宿のページを積みなおしてみると「後半の合宿は、上級生のための合宿だったので、あまり乗れなかつた、作業は主に秋の大会のための訓練にかう障害作りだった、まだ僕の見たこともない障害ヘクモの巣や、六角をいくつもつくった、出来上ってその障害を先輩が楽々と飛ぶのを見て同級生と、おれたちも早くとびたいと話合った。前半の合宿と同じで後半も、一年生は仕事が多く、息をつくひまもなかつたが、青駿にのって障害を始めて飛越したときはうれしかった。」と書いてあった。たしかにいそがしく、つらい長い合宿であったが、それだけに心に深くのこっている。

昭和四十六年女子合宿記

経営三 金 美 春

さて、我々馬術部のそうそうたる（？）面々がやって来たのは、ここ静岡県は浜松の大浜乗馬。うず高く積み上がった荷物の下から這い出すようにタクシーを降り立った我々の前に広がるのは大草原ならぬ大蹄跡でした。ええと、馬はどこかな、あ、いたいた「綱島であまりにも健康的な馬を見慣れているせいかな、この馬のかわいそうな程細っそりとした風情に以後約六日間の労働に耐えられるだろうかと不安を覚えしました。

練習は朝と夕方、昼はトレーニングが行われました。これは近くの砂丘ですが、ここには観光用のラクダがいてそのつぶらな瞳を近くで繁々と見ることができ、わたしなどは初めて見たラクダちゃんにあんなにただただ感心させられました。

いよいよ合宿も半ばを過ぎ、吹き着けられた砂と疲労でそれこそ身も心も重くなった時それを慰めてくれたのは松林を焦がすように真赤に燃える月と美しく弧を描く虹とどこか近所で打ち揚がっている花火それに海でした。ある自然児は東京のあの狭い殺風景な所で乗るよりこの自然の中で乗る方が何倍も良いじゃないと大層気に入った御様子で宣いましたがこの蠅のすごさは大変なもので、目を吊り上げキンチョール片手に飛び回っていたわたしには悪夢のような日々でした。

合宿の目的とあまり関係のないことばかり書いてしまいましたが、この合宿で我々二年生にとって無関心でいられない問題は二部との合併でした。人数の少ない我学生にとって仲間がふえるという大変喜ばしい事態でしたがその後色々の事状からそれぞれ休部、退部となり非常に残念でなりません。わたしにとって二年目の合宿は、この様に仲間がふえるというつかの間の夢と、初めて障害の経路を踏むという貴重な経験をお土産に終わって

たのです。

昭和四十七年女子合宿記

教育一 古 野 啓 子

八月二日八時十五分、私達女子部員十五名は、愛馬「青駿」「青貴」と共に、車に乗りこみ元氣よく綱島を出発しました。

約二時間後、私達の目的地、柏乗馬クラブに到着。「さア」一週間ガンバラナクツチャ。」と、はりきって合宿所に入ったとたん ものすごいシヨックを受けたのです！なぜかって・・・ガス・水道・電気・バス・トイレ未整備。おまけにたたみも入ってなかったのです。なんせ馬場も出来たてのほやほやで工事が少々おくれたらしいのです。驚いたのなんのつて。しかし「夜までは、つけますからね。」の一言をかたく信じ、まずは第一回目の練習開始。自馬二頭と柏の馬六頭で豪華八頭だての部班練習。柏の馬は反動が高いのがあって、かなりみんな苦戦しました。おまけに合礼をかけて下さった柏の先生は、一言も軽速足と言って下さらないのです。シヨック！どうにか夜までには、はたか電球とたたみが入り、無事第一日自終了

翌日からは、四時起床で五時から練習。七時まで二鞍練習し、朝食後三鞍目の練習をするという日程で合宿はつづけられました。練習内容は、ほとんどが馬場で、騎手の姿勢など基本的な事に重点が置かれた様です。

作業の点では、ナントイッテモ「寝むら」が大変でした。二十頭以上の「寝むら」の量はとっても多いのです。なんせ一輪車で出し入れをするのです。フォークを使って、いちいち出し入れをしていたら、日が暮れてしまふんです。それを女性だけで一週間よくやっただけです。ハイ！あらためて男子の存在価値を認識（？）したのです。

最後の晩は、男性軍が陣中見舞に来てくれて、打ち上げ会を行ない楽しいひとときを過しました。

長かった様な短かった一週間が過ぎ、最終日になってしまいました。すばらしい、おみやげ（トラックにイッパイの牧草）を積みこみ私達十五名と二頭は無事帰路の途に着いたのです。なんともいえない牧草の香につつまれ、一週間病んだ鞍づれをかばいながら思った事は、「この一週間の経験を無駄にするまい。」という事

牧草のペットでゆられながら優雅な御昼寝をしながら無事綱島到着！

お世話になりました。柏の先生そして、かわいい馬達。いつまでもお元気で・・・

関西遠征記

三年 末 金 雅 宏

関西遠征（全日本学生馬術大会）

それは、我が馬術部にとって今までに、なかった事なのです。これも、私達の先輩の毎日の苦勞の賜物なのです。遠征馬、青磨（ゴンベ）、青冠（ラックスストーン）、青朋（ゴールドブルネン）、在厩舎は彼の有名な阪神競馬場なのです。この馬房は下が土で、競馬場特有の鉄の扉がついていました。私の好きだった、あの二冠馬、タニノムーティエも、この同じ馬房に入ったこともあるかもしれないと思うと、心がときめくのです。（私は競馬狂なのです）。寝むらの乾きも、綱島では考えられない程良く、寝むら作業も楽なものでした。（三頭を四人でという事もあるでしょう）。

練習は、ダートコースと道路を隔てた角馬場を各大学によって時間を分けて使っています。

試合は、残念ながら我が先輩、原野さん、高橋さん、斉藤さんの健闘もむなしく、満足な成績を修める事はできませんでした。

青号（原野さん）第二走行、満点、第三走行、三落下、青册号（斉藤さん）失権、青冠号（高橋さん）、棄権という結果でした。しかし、結果はともあれ、私たちは、この関西遠征で何かを得たと思います。全国から集まった優勝を見、そして、いろんな選手の乗り方見て、これからの馬術部生活において有意義なものになるでしょう。諸先輩方に、負けない様、私達一、二年は努力し続けたいものです。

P・S競馬場の一口あまりの所に、おふる屋さんがあるのですが、このおフロ屋さんが格安でなんと、二十円なのです。（都内四十円）ここの番台のおはさんが、人間のよくてきた人でした？

福島遠征の思い出

経営一石井健一

これは十一月三日～五日の三日間正確には二泊三日の福島遠征の記録である。題して「福島遠征恐怖の三日間」我々福島遠征団一行総勢十七名のうち女子十五名男性は原野さんと私（ここにひとつ疑問があったのです。それは何故私がこの遠征の付添役に選ばれたかであります。付添の使命は我青学馬術部のか弱き乙女たちを守る事、つまりナイトの役目ですね。しかし私は御存知の通り金と力は全く持ちあわせておりません。ナイトなど勤まるわけありません。ところが実際は金も力もぜんぜん必要なかったのです。つまり私が適任だったのです。話が横道にそれたので軌道修正、我々は十一月三日十三時三十二分の列車に乗りこみ一路福島へ向かったのです。

窓の景色は刻々とローカル色が濃くなり、田舎じりるこ風に変って行ったのです。午後五時五十分我々一行はついに福島の人となったのです。そして宿舎の阿武隅寮に着き各人各部屋に散らばり、やっと到着したのは六時

半を少し回ったころでした。一号室は私と原野さんと宇都宮大の付添の人の三名が同室でした。

食事も済んで一段落、ほっとして雑談等をしていまして、そこへひょっこり両上野さん、原野さんに用事があるとのこと、何かと思っていますと突然毛布布団を手に手になだれこみ御存知布団蒸しの場面とあいなつたわけがあります。

うわさに聞く布団蒸しあまりに早い来襲に我々なすずべもなく男のブライドを傷つけられたのです。

しかし我力以上に気の毒だったのは宇都宮の人、身の危険を感じてかその日以来この部屋には寝る時以外寄りつかなくなつたほどです。

これをきつかけに連日ひまさえあれば布団蒸しの波状攻撃、何しろ多勢に無勢どうすることもできません。『宮などありません。トランプの最中ミーティングの時いついかなる場合でも油断はゆるされないのです。そしてその嵐の去つた跡には必ず二、三個のカイロが発見されたのです。阿武隅寮での生活は布団蒸しナポレオン恋占い、この三つのくり返しだったと言つても過言ではないでしょう。』

ナポレオン（トランプのゲームの一種酒ではない）の場合放けた者は皆からしつぺをされるルール、私と原野さんの手はみるみるミミズばれ。たかが女の子のしつぺぐらいと考えるはいけません。しつぺにしろ布団蒸しにしろ、そういう時になると信じがたい力と残忍性を發揮するのが女というものです。

なんだ馬鹿馬鹿しいことばかりやっているとと思われる方もいらつしやるでしょうが馬鹿げたことほど楽しいものでございます。こんなことばかり書いていると福島へ何しに行ったのかと疑われそうなので試合の様子も報告しなくてはなりません。

四日極寒の福島競馬場我が青学佐倉さんの選手宣誓で団体戦が開始されました。わずかの差で破れ五日の個人戦に期待をかけました。そして五日。各選手の健闘むなし

くまたもや、わずかの差で破れたのです。本命の青山が残念でした。そこで一同来年こそはと誓いあったのです。

best quality knit wear

Ginza

銀座メリヤス株式会社

東京都中央区銀座6-9-6 ☎03(571)0618



和歌山黒潮国体遠征記

経営三 板倉啓 文

十月十九日午後十一時、石鯨と齒ブラシと長靴を携えた僕は、馬車公苑に到着した。

「何だお前来るのか、お前の寝るところなんかネーヨ」驚愕に口唇青さめ、僕は答えた。「しししし、しかし、僕は行かねはならないのです。」

横には、高橋さんと斉藤さんがいらしたが、御二人とも口を揃えてこう言われた。「ハッハッハッ、おい板倉、寝るところがないんだってさ。」

居合わせた一同
「何とかなるよー。」

以下はオプチミストの集団である東京選手団に押し込まれた、衰れベシミストの遠征記である。

そもそもこの悲劇の一幕は、女の子とおだてに滅法弱い僕の性質に起因しているのです。

青。を安心して任せられるのは、お前だけなのだ。などという白々しいおだてに乗った僕も僕、そこまできれりや合点承知。あつしがしつかり面倒見ましよう。

こんな訳でもって、いまや僕は、新鮮なボロの香り満ち溢るる馬運車の人となりました。

二、三時間も走り続けたでありましようか、早や命にかかわる重大事が待ち受けていたのです。僕は夢うつつで、青（以下ゴンベ）の前で座っていたのでした。何となく後ろの拠所がなくなる感じがして、ふと振り返ってみると、寄りかかっていた扉の鍵が壊れ、二十、三十cmもあるうつかと思われる間隙から、照明燈の陰の黒々とした夜景が、物襲い勢いで後ろへ流れているではありませんか。「すわっ」と跳起きた僕を、ゴンベが黙って眺めていた

のでした。

選手団の方々は、畏多くて口もきけない東都キャプテン連の荘々たるメンバーでした。

和歌山に到着した我々一行は、会場である紀三井寺競馬場から、遙か海狭を隔て、海に浮ぶ小さな出島、妹背山御殿に到着しました。

僕はお三どん忙布団敷き、お茶汲みと、あたかも駒ねずみのごとく、くるくると働いたのでありました。一諸にいらした原野さんも後輩の素晴らしい働きぶりに、さぞかし満足なさったことでしょう。

我々は三日間当所に滞在しましたが、夜は小ぢんまりとした銭湯へ通うのが僕と原野さんの日課でした。

ついでながら付けかえますと、どういうわけか、この銭湯は番台も、随分と小ぢんまりしていました。ついでながら付けかえますと、「余計な勘くりは無用ですぞ」

さてそれから、選手団は民宿へ、僕は馬房の脇へ泊り、他の馬付きと同居することになりました。その後、大阪・阪神競馬場へ向けて出発するまで、体温計を片手に、一日四回調子は如何と、ゴンベのお尻をなぜなぜする日が続いたのでした。

十二時間近く輸送された疲労と、見知らぬ土地へ来た緊張のためでしょうか、ゴンベの飼食いは、最初の二、三日間というものあまりかんばしくなく、いつもより期間が長いので心配でした。しかし、十分な休養と適度な運動量に支えられ、調子は非常に良かったように思われました。

ゴンベは、高校生自馬と、貸与馬の試合に出場しました。高校生自馬は、自馬とは難も、駒場高校の田村君が騎乗したので、ほとんど貸与馬の試合と変わらず、成績はあまり振いませんでした。

なお、馬別の成績は省略させて頂きませんが、東京都の成績は、総合で五位でした。

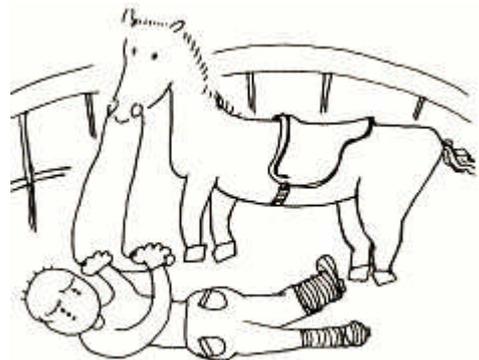
主な競技では、サンジュールジュ等馬場の試合はあまり見ることができませんでしたが、大障害や六段、中障害などを見ました。大障害では、障害物には僕が初めて見るようなものもあり、さすがと思いましたが、ホースシヨールとしては、いままで馬事公苑で見た大障害のはうが

面白かったと思います。

僕が見た競技中、一番興味深かったものは六段飛越でした。

はとんどの馬が三間歩で飛越するところを、二間歩で飛越したり（この人馬は、地元和歌山の、植田さん、紀之国号のコンビで、大いにスタンドを沸せ、七位に入りました。）まったく手綱だらだら馬任せの、それでも三位に入賞した、北海道の勇勝号などが出場し、本当に、色々と考えさせられました。

特に勇勝号は、僕らの教わっている、常に馬の口との連絡を保つ近代馬術と違い、逆にほとんど自由飛越に近く、篤かされたのは僕だけではなかったと思います。





スナック
草 原

TEL. (400)8611



才才夕靴店

TEL.03-873-7735

卒業にあたって

文学部 渡 辺 しをり

私は一年の冬以来、何回か試合に出場して来ましたが、自分の技量がまるで無いのに試合成績は比較的恵まれていた方だと思えます。青 に乗ってさえ八十cm位の障害を何回も止られていたまるで基礎も何も出来てない二年の春に他の人達の失敗の御蔭で関東選手を勝つてしまいました。それ以来「試合は技量なんて関係ないんじゃないだろうか？」という疑問と同時に試合で上位に入る事に因って下級生や他校の人達に「あの人は上手なんだ」という印象を与える事を恐れました。

つまり実際は鎧上げをやっても、障害に向つても恐怖感で一杯の私の本当の技量が暴露されるのが恐かつたのです。私は以前「君の乗り方は一目見ただけで『こりやあ不器用で馬ばかりでなく何をやらせても駄目な子だ』と解るけどそれが何故試合になると結構まともな点が付いちやうんだい？これじゃあ一生懸命馬に乗っている馬乗りは自分のやつている事が馬鹿らしくなつちやうよ」なんてひどい事を言われた事もあります。が実際にそんな理由で試合に出場し、それが偶然上位に入り、それが原因で又試合に出場し……その期待に応えなければ……という気持ちから如何にゴマ化するか、どうすれば試合で点を稼ぐ事が出来るかという方面の事ばかり考えるようになってしまったのです。そしてもう一つの原因は試合の時になるとオロオロしていながらも、いいえしているからこそ「経路を踏んでくれるのはお馬さんなんだから私が考えてもしょうがない。ヨロシクタノミマース」なんて気持ちになつてしまう事でしょう（これは一人っ子特有の依頼心ですね）つまり皆が無理をした為に失敗する所を乗り手がフラフラしていながらもお馬さん任せで流して来てしまつて審査員がゴマ化されてしまつてさうです。

しかし何と言われようと私が肝心の馬術というものをまるで知らない事には違いありません。

こんな馬乗りの資格も無い私が青貴を持たされたので「すからこれは天下の一大事でした。一年間『こわしちゃあいけない』という気持ちと 青貴 という馬を理解しようとする気持ちで、必死でした。その上、私には技術的にばかりでなく、性格的にも馬を調教する事は不可能だったので。印南先生に「君の乗り方は甘い母親が子供を不良にするようなものだ」と叱られた事があります。これも自分の乗り方に自信が持てなかつたせいでしょう。又青貴という馬があまりに気高すぎる為に乗って泥塗れにするよりも立て髪を編んだり、セロテープで眉毛を作つてやつたりしている時の方が楽しかつたのです。（彼にとつては甚だ迷惑な事だつたかもしれません。・）

とにかく、あまりにも沢山の事を教えてくれた青貴に対して何もお返しが出来なかつた事を申し訳なく思つています。

そして私は卒業を一つの句切りとして基本からやり直すつもりです。私が馬術を始めた動機、つまり「馬を少しでも良くする事が出来る様になりたい」という気持はとんでもない思い上がりであるばかりでなく、目的とは正反対の方向に進んで来てしまつたという事を青貴が教えてくれたからです。

そして卒業してからも下級生の愚痴を開きに綱島に行きたいと思つています。（たとえ斉藤君に「しをりさん」が来ると綱島が井戸端会議の場になるから因りますヨ」と言われようと……）

卒業にあたって

文学部 溝 井 周 子

四年間クラブにいて得たものといえば、それはたくさんありますが、その中でも女の私にとつてお酒に強くなつたという事がまずあげられましょう。高校時代まではビールに口もつけられなかつた程だつた私が、最近では風呂あがりの一杯に思わず「うまい」と言つてしまつたのですから。といつても私はビールをコップ半分位でもう真赤になつてしまつて程なのです。

と忙かく我々の代の女子は、めつぼう酒が強かつたのです。お酒を飲まない平井さんなんて、クリップを入らない様なおとなしい顔をして一升をあけてしまつて程です。二年で退部した吉沢恵子さん・現在は三谷夫人はルシアンなるものがお得意でした。やはり二年で退部した牧さんも、クラブでは猫をかぶり通しましたが、やはり結構いける方でした。こんな連中の中で私は実に苦労しました。一年の頃、よく部員会の後で女の子だけで飲みに行つたりしたものです。私が顔が赤くなるから飲まない……等を言おうものなら皆にしかられたものでした。お酒にまつわる四年の女子のエピソードは数知れずあるかと思ひます。飲めは陽気に唄つたり踊つたりするのが好きでした。酒癖の方はまあ皆様ご存知の通りです。こんな女子にくらべて四年の男子二人……原野君と高橋君は、お酒は好きでしたが、人数で話でもしながらしつとりとした気分が飲むのが好きな様でした。「今度皆で飲みに行こう」とこれが私達の口癖の様なものです。

私が馬に乗つたのは二年間でしたが、退部しなくて本当に良かったと思つたのです。こんなに素敵な飲み友達がいるのですもの。こんな事を言うと、私達がお酒ばかり飲んでいた様に思われてしまひますが、実際はそれ程の事もなかつたのです。たまたま私が昨夜の追い出し会でチャンポンで飲んでしまつて、二日酔いで苦しんでいゝものでこんな話になつてしまつたのです。皆様、くれぐれもチャンポンだけはなさいません様、一筋に生きて下さいませ。

最後になつてまでこんな話をして、またまた私の評判

試合記録

が落ちてしまつ事でしょう。馬術部内ではともかく、決して、部外者にお話になりません様に。私も二十二才そろそろ売れ口が決まっても良い頃だと思つておりますので。
 もっとも恋愛でもしたいと言おうものなら、うば桜の狂い咲き等と言われるこのごろです。
 なんとなく支離滅裂でしたが、最後に現役の方にこれだけお願ひします。クラブは必ず四年最後までつづけて下さい。追出し会に出席してつくづくこう思つた次第です。



対学習院女子定期戦（昭和四十六年二月二十八日）

国際総合馬術

障害

佐倉(2) 高津(2) 上野か(2) 平井(3) 佐倉(2) 高橋(2)

218 245 1/2 -176 -27 3/4

我が校 x 〇 学習院 我が校 x 〇 学習院

対日大戦（昭和四十六年四月十一日）

（綱島に於いて）

齊藤(2) 小満(2) 永井(2) 高見(2)

-64 1/4 -196 1/4

我が校 〇 x 日大

（日大馬場に於いて）

高橋(2) 齊藤(2) 永井(2) 高見(2)

-165 -98

我が校 x 〇 日大

第四十一回関東学生馬術争覇戦

（昭和四十六年四月二十三、二十四、二十五日）

第一回戦（对専修大学）

原野(4) 高橋(4) 齊藤(8) 高見(8)

-60

我が校 〇 x 専修

第二回戦（对学習院）

原野(4) 高橋(4) 齊藤(3) 小林(3)

-294 -230

我が校 x 〇 学習院

関東学生馬術選手権（昭和四十六年四月二十六日）

男子第一次予戦通過者・女子第一次予戦通過者

原野(4) 齊藤(3) 平井(4)

第八回東京都学生自馬競技大会

（昭和四十六年五月八、九日）

復合馬術競技

原野(4) 青 留

齊藤(4) 青 冠

齊藤(3) 青

馬場 障害

56 54 0 十三泣

65 0 九位

新馬障碍

高橋(4) 青 蓮

原野(4) 青 凜

中 障碍

原野(4) 青 朋

原野(4) 青 屠

高橋(4) 青 冠

齊藤(3) ランサー

第七回東日本馬術大会

（昭和四十六年五月二十二、二十三日）

婦人障害飛絨

佐倉(3) 青 蓮

中 障碍

上野(洋)(3) ランサー

高橋(4) 青 冠

原野(4) 青 留

高橋(4) ランサー

東京都馬術大会（昭和四十六年六月五日、六日）

一般障害

佐藤一貫(0B) 青

関東学生新人馬術大会（昭和四十六年六月十二日）

永井(3) 青 留 0 (バラージュ) 0 五位

小林(3) 青 蓮

高見(3) 青 冠

関東学生女子自馬競技会（昭和四十六年六月十三日）

B 馬場

平井(4) 青 駿

渡辺(4) 青 真

佐倉(3) 青 朋

障 害

渡辺(4) 青 留

上野か(3) 青 蓮

佐倉(3) 青 朋

関東大学馬術選手

（昭和四十六年六月二十三、二十四日）

二位

一位

中 障害 一回目 二回目

原野 (4) 青留 -4
高橋 (4) 青冠 -12
オープン障害 棄権

関東学生馬術選手権

(昭和四十六年六月二十五、二十七日)

男子馬場 (準決勝)

齊藤 (3) 修宝 55 菊勇 44

女子馬場 (準決勝)

平井 (4) 桜王 71 翠専 64

渡辺 (4) 華桜 85 錦松 99

佐倉 (3) 華桜 64 錦松 81

女子障害 (決勝)

平井 (4) 東薫 失権 白翔 -4
渡辺 (4) 青留 明扇 0 二位
佐倉 (3) 青朋 明扇 失権

関東学生総合馬術競技大会

(昭和四十六年九月四、五、六日)

調教 耐久 余力

全日本学生障害馬術大会 (昭和四十六年十一月三、四日)

一回目 二回目

原野 (4) 青腐 0
齊藤 (3) 青朋 失権 -12

全日本女子学生選手権

(昭和四十六年十一月十九、二十、二十一日)

予選 (B馬場)

渡辺 (4) 千鵬 55

準決勝

渡辺 (4) ナミトモ 71

(障害)

甲妃 -12

決勝 (総合馬場)

渡辺 (4) 東風 68 リュウペリオン 52

関東北女子学生馬術大会 (昭和四十六年十二月四、五日)

障害団体戦

渡辺 (4) 佐倉 (3) 上野洋 (3) 佐倉 (3) 上野か (3)

個人戦

虎甲 -7 モモヤマ -4 二位

全国都道府県対抗馬術大会

(昭和四十六年十二月十一、十二日)

B馬場 (婦人班)

佐倉 (3) 青貴 46

金 (2) 青駿 51

二川 (1) 青蓮 49

齊藤 (3) 青蓮 55

未金 (2) 青駿 43

柴田 (1) 青貴 48

齊藤 (3) 青朋 48

中 障害 (A) 失権

長井 (3) 青 失権

中 障害 (B) 失権

屋城 (3) 青闘 失権

柴田真 (1) 青留 0 (オープン)

小 障碍 失権

高橋 (4) 青笛 失権

原野 (4) 青闘 失権

小林 (3) 青駿 失権

横江 (2) 青留 0

板倉 (2) 青凛 失権

麻雀



TEL : (585)2388

港区赤坂 3-10-3

兼ビル2階

対立教女子定期戦（昭和四十七年二月二十日）

B馬場

内山(1) 根本(1) 二川(1) 金(2)

我校 I×立教

新国際馬場

上野洋(3) 上野か 斉藤(3)

我校 I×立教

障害

佐倉(3) 斉藤(3) 金(2) 池田(1)

我校×I 立教

ピュイッサンス

永井(4) 青 腐 0 (バラージュ) 棄権

関東学生馬術新人競技大会

(昭和四十七年五月二十七日)

障害

荒井(4) 青 闘 失権

板倉(3) 青 留 0 バラージュ 二位

未金(3) 青 貴 失権

柴田(2) 青 冠 -7

関東学生馬術女子競技大会

(昭和四十七年五月二十八日)

B馬場

佐倉(4) 青 達 65 六位

上野か(4) 青 朋 60 十位

斎藤(4) 青 留 57 六位

二川(2) 青 駿 65 六位

中 障碍

佐倉(4) 青 願 0 (バラージュ) 0 二位

未金(3) 枚倉(3) 金(3) 石井(2) 根本(2)

我校 I×東北学院

対東北学院戦（昭和四十七年五月三十一日）

第九国東都学生自馬競技大会

(昭和四十七年四月八、九日)

複合馬術競技

馬場 障碍

斉藤(4) 青 貴 66 -10 十五位

小林(4) 青 冠 59 59 十八位

永井(4) 青 留 52 0 二十位

新人及女子障害

屋城(4) 青 闘 失権

未金(3) 青 凜 失権

柴田(3) 青 駿 失権

中 障碍 永井(4) 青 留 0 (バラージュ) 一位

小林(4) 青 冠 -28

新馬障碍

斉藤(4) 青 貴 0 (オープン)

第四十二回関東学生馬術争覇戦

(昭和四十七年四月二十二日)

第一回戦(対農大)

小林(4) 斉藤(4) 永井(4) 屋城(4)

我校×I 農大

関東学生馬術選手権(昭和四十七年四月二十四日)

男子第一次予戦通過者

斉藤(4)

東京馬術大会(昭和四十七年五月六、七日)

パルクール・ド・シヤス

永井(4) 青 留 0 一位

小林(4) 青 冠 -16

中 障碍

小林(4) 青 冠 -16

永井(4) 青 留 -4

B馬場

斉藤(4) 青 駿 51

金(3) 青 蓮 53

点取り障害

板倉(3) 青 留 88

未金(3) 青 凜 0

柴田(2) 青 冠 16

第八国東日本馬術大会(昭和四十七年六月十日)

一般障害

屋城(4) 青 闘 失権

中 障碍

小林(4) 青 冠

斉藤(4) 青 留

パルクール・ド・シヤス

斉藤(4) 青 冠

永井(4) 青 留

関東大学馬術選手権

二回走行(一回目)

斎藤(4) 青 冠 棄権

永井(4) 青 留 失権

小林(4) 青 闘 失権

関東学生選手権(昭和四十七年六月二十八日)

選手権馬場

斉藤(4) (瑞) 宝山(二〇四)

障碍

斉藤(4) (緑嵐) 麻桜(減点)

中村製材 K. K.

中 村 教 雄 (昭41卒)

名古屋市北区山田西町2-95
TEL (9 8 1) 1 5 3 9

創業大正元年

営業品目

乗馬用長靴、ドイツ製乗馬用ゴム長
拍車、巻バック保存用木型各種

習志野稻毛屋

渋谷区神宮前6-11-7
TEL (407) 0 3 0 7

OCEAN CHARTERING, LTD.

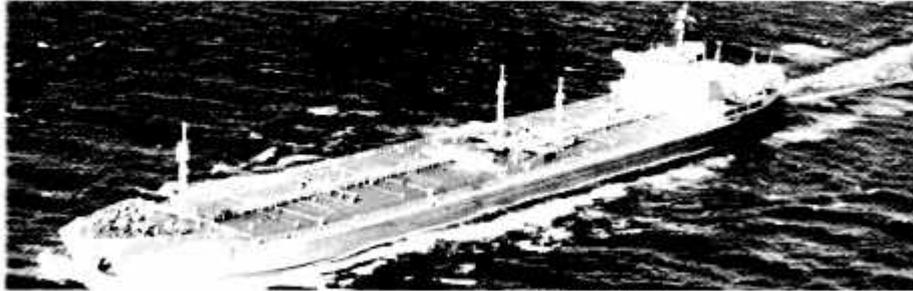
PRESIDENT S. AOKI

SPECIALIZED SHIP BROKERS

OIL TANKERS

GAS CARRIERS

CHEMICAL TANKERS



Address: Hokoku Bldg. 8 th Fl.
3-4, Takara-cho, Chuo-ku, Tokyo, 104.

Phone: 03(563)-0166/9
Telex: International J24691, J26954
Domestic 252-3514

Snack & Bar



umagoya



中央区銀座6-9-12(房野ビル2階)
Fusano Bldg. 2nd. FL.
6-9-12 Ginza, Chuo-ku,
Tokyo, Japan Phone 03(571)0230

我が騎乗(?) 日誌より

吉野啓子

思い出

吉沢敦子

私が青山学院高等部馬術部に入部して、もう三年もたつてしまいました。卒業をまじかにひかえ、私の奇乗目誌(私の場合「騎」よりも「奇」の字がなぜかあてはまるのでありマス...)を、ひもといて見る事にしました。

月×日 今日のはじめて網島の馬場の馬に乗った。山中湖の馬とは勝手が異つてそれにしても、二年生はナント恐ろしい事が出来るのだろう。手にお砂糟をのせてペロペロなめさせているのではな

月×日 夏の練習はアツイ。特に合宿中は・考える事は水、みず、水

月×日 いつのまにか二年生になってしまった。上級生になったのだからハリキッテいかなくては。

月×日 障害の練習中みごとな落馬。とつてもいたかつたんだわー。

月×日 白馬大馬場に出場、完敗。青駿コメンネ。指導して下さった大学生同学年の仲間達、そして応援してくれた下級生達。本当にこめんない。馬事公苑で、そして愛馬「青朋」の側で、きょう初めて泣きました。

月×日 今頃新馬に乗せてもらえてとつてもうれい。特にブルネンは・。でも本当は馬をこわいしな

以上のもは三年間乗った百数十鞍の内ほんの少し。でもとつてもなつかしく思い出される一面一面です。その他にも「去つて行つた馬達」やめていった仲間。苦しかった事等があるはずなのに、今私の頭の中に浮んでくるのは、楽しかった事ばかりなのです。これからよ

私が二年で入つてすぐに、ほうきの先を下にしてあつたので、下にしとくといたんでしまつと思つたので、「ほうきの先を下にするといたむんじやないのて」といつて全部逆さにしようとする、「いいのよ、ヨッチンボ口をはくの都合がいいの」と言われ、「へーそうなのかなー?」と思ひました。

なるほど馬房をはくの、先つばのガリガリになつたほうきはボ口をはくの便利で、よくカリカリとれま

た。私は馬術部では、こんなもんが便利なんだ、これからは何んでも開いてみなくつちやわかんないんだ、と感心したもんでした。今思つとちよつとバカみたいだけど、なにしろわかんなくつてオロオロばかり、なんでもかんでも回りの人に開いてからやるのでした。

あとなんというか、あのちよつとそのあの更衣室のあのその恐ろしいふとんむしです。もういつもはそんなでもない大学生が、雨つづきの次の晴れた日の馬のようなあのそのすこい目で、三・四人で、おそうのでした。そうです、

金さん(高等部三年のキンさん)が一番おもしろく、足をくすぐると「ピョピョ」ないてすこくおもしろかつた。あのふてぶてしい金さんを知っている人は、一度はくすぐつてみたくなるはず。そんな事ばかりしてたから(?)

馬術部の男の人、女の人などなく、雑こ寝ムードの馬仲間でした。そうです私はNo.1が大好きです。

なんといつてもだれでも皆、(好きな馬がいるのです、それが、馬術部のいい所です。冬の寒い日は、冷たいほつべをみらNo.1のお腹につけて、「あつたかいな!」なんて思つてうれしくなるのでした。でももうそのNo.1も、阿部先生にみそめられて、すっかり大人になつちやいま

ああ高校三年生

塚原 浩明

「アアアア」と一叫びなきまして始めさせていただきます。時は一九七一年、東京ではせみのなきこえも開かれずに夏が終わろうとしているときなのです。というより、休みが終わるといつた方がいかな、さあこれから勉強の秋、大学へ入れるか否か、といつては、うちには冬休み、むろんそのころには、大学は90%決定、あとは卒業できればよいのです。だから高校最後の冬の合宿に精を出していたのです。そう、昔には「かあちゃん、まつさおがしきりに流れ、ちよつとまつてください」がわけのわからない日米語を流していたのです。

ところは、網島ホテル街からちよつとはずれ、馬場の寒い更衣室、三年三人、一年三人、コーチ一人の野郎ども、といつような感じで試合にむかつていっしょうけんめいやつていたのです。なんていつたつて、レギュラーになつて、高校試合がやつと二度、さあ三度目の正直なのであります。なにしろ自馬体ジョン、インターハイゲジョンなのです。

僕たち三年は、絶体団体優勝をするという意気ごみなのです。なぜ団体かという、一年の時から今まで僕たちが見たところでは、おしくもとれないというケースを二年もみただけです。

合宿三日目の朝が明けようとしています。われわれは、太陽よりも早く起るのです。なんということはなく、練習が始まり合宿の気分がだいぶ充実してきたのです。その日の午後そう四時です。原爆が投下されたのは、いやウソウソ、「いやそれはどのショック、ここで失礼して一言、アアーアアー」ガーンという音とともに失礼しました。そうあのインフルエンザのパカ、なにもおれたちの試合をつぶさなくてもいいのに。

今はやつと気が落付いて競馬もなくなつたからまあいいやなどとなくさめながら、想いおこしております。しかしそのショックの後の合宿のひどさ、あれは三年の内最低の合宿だつたと思います。

思えば長く短かいクラブ生活でした。もうこれからは二年生、一年生に期待しましょう。あつ、それから、コイチ、センパイのみなさん、ありがとうございました。これからも頑張ります。



或る日 或る時

張間睦途さん (昭三十五年卒)

「馬術部時代で一番印象に残っている事は何ですか？」と質問をすると四年の時に出場なさつた試合で忘れられない思い出があるとおっしゃり話して下さいました。

その試合はパレスで行われたもので憲法大会といい、張間さんは青葉号に乗って出場なさつたそうです。青葉号という馬は、はじめは丸たん棒の様だつたのが阿部先生の調教によつて、パッサージュまでできるようになり、満点馬とはいえなかつたが障害もやつたそうです。

張間さんは、青影号等に乗つた他の方々三名と一緒に障害に出場され、モンピ障害の端を飛んだ為にその障害を一落しただけでゴールなさつたそうです。

この試合は、約三十名出場し、その中で張間さんは七位という成績でしたが、阿部先生にほめていただき、井田さん(現在溝田天人)に「張間さん、一生の思い出になりますネ」と言われたそうです。そして、現役とはあまり接触がないけど学生時代にはぜひ一生懸命スポーツをやつてほしい。入部する事は簡単だが、四年間やり通す事は大変です。

けれども馬術部四年を卒業するという事はとても忍耐が必要である為、社会に出てからとても役に立ちます。とおっしゃっています。

そして最後に、連合赤軍のようにはならないように・・・とつけ加えていらつしました。

伊藤正明さん (昭三十九年卒)

千葉国体の順備に大忙しの伊藤さんに無理にお願いして話を伺いました。卒業後も馬術に打込んでいらつする数少ない先輩の中の一人である伊藤さんは「別に話す事はないなあ、思い出なんて一口には語れないよ」等とおっしゃりながらも現在の馬術部の状態の話になるとやはり色々アドバイスして下さいました。

まず初めにパレスにいらつした頃のお話を少しして下さつてから青留が新馬として入つた時は、今の青留の新馬時代とは思えない位おとなしくつたらしくただ右口が固くてまがらなかつたそうです。そしてその頃は調馬策による調教はまだやっていなく巻き乗り等の回転運動をよくやり、障害はトリプル等の間歩をあわせる障害を多くやつたとの事です。

青の初試合は淵辺で行われた試合で、いきなり中障害に出したところ一落か二落で帰つて来たそうですがその後他の人へ乗り替つてからしばらくはひうかけたりしたとの事です。

「青留を長持させるには、どういった使い方をしたら良いですか？」と質問をすると、

競技馬として長持させたいと思うなら毎日同じ人が乗る事。そうすればその日その日の馬の調子によつて運動量を決められるからとの事です。

伊藤さんの場合、長年乗っている春香にまたがると、十分間常歩をしただけでその日の馬の調子が解るそうです。

そして又青留の話にもどると、「ああいう風に固い馬はほとんど運動をさせた方が馬の為に良い。つまり、いくら休ませる為でも馬房の中に入れておくのでは役に立たない。もし本当に休ませたいと思うのなら一年か二年牧場に放牧しておくのが良い」とおっしゃっていました。

普断あまり使わないでおいて試合になって急に使うというのは、馬に負担がかかりすぎるし、良くないの事です。

伊藤さんの場合試合に近づくにつれてだんだん運動量を減らして行き、試合当日は、落ち着かせる為にだけ運動をするそうです。

そして最後に四月十五日に馬の移動が全部終るという柏乗馬の新しい馬場の宣伝をチョッピリ。乗りに行きたいと思ったらほとんどが自馬との事です。

山路裕子さん (昭四十二年卒)

会社にうかがい仕事の合い間の短い時間にお話をうかがいました。

山路さんがいらつしやつた頃に新馬として入った青留青駉が今では一番の古馬となり、青山学院馬術部にとつて最も貴重な存在として活躍しています。

山路さんが一年の時に入った青駉・青留は当時、新馬調教と同時に練習馬としても使用していたそうです。青駉はとても可愛くて人気者だったそうですが山路さんにとって一番印象に残っている馬は雷神だそうです。

当時は現在と比べて貸与馬の試合が多かったのですが、な馬、どんなひどい馬にも乗れる技量が必要だったとおつしやっていました。

練習時間は現在と同じ六時半からで、女子の定期合宿は四年間毎年違う場所で行ったそうです。山路さんが一年の時には伊豆で、二年の時は秋田だったそうですが、秋田での合宿の時に事故が起きた為、三年の時には綱島で、そして四年の時には柏で行ったそうです。

「練習に出て来ない人達に対してどのような処置をとつていらつしやいましたか？」という質問に対して、

練習に出て来ないと同級生同士で注意し合つたけれども、やはり各学年上級生になるにしたがって人数が減つて行ったそうです。又、卒業なさつてからも三回程アパロンに乗りいらつしやつたそうですが、ただ馬に乗

るだけ。なので馬術部のような良さはなく、馬を一生懸命手入れしたり、試合の時に必死になって応援したり。・・という所に馬術部の良さがあるということがあらためて解つたとおつしやっていました。

そしてクラブというものは一年生、二年生・・と一年まるで違う立場にあり、それは卒業したり他の世界においては味えないものである。

又運動部独特の悪い面(つまり しこき「等」はあくすべきだが、体育会馬術部である以上、やはりけじめは必要であり、特に生き物相手であるので、絶対にだらしなくならないように気をつけなければいけないとおつしやっていました。

「もつ馬にお乗りにならないんですか？会社に馬術部をお作りになつたらどうですか？」という質問に対して、

「全社の女の馬に乗りたい人がいるから、グループで日本乗馬かなんかに入りたいと思つているよ」とおつしやっていました。

曾我正晴さん (昭四十六年卒)

馬術部を巣立ち、社会人としての一年目を迎えようとしていた曾我先輩。残業などで御多忙中のところをやつとのことでインタビューすることができました。

「現在のクラブへの要望について一言お願いします」と質問者。

「そうねエ、やつぱり強くなつて欲しいね」と例のソフトな語り口で切り出して下さいました。以後、彼は次から次へと途切れることなく御意見を語つて下さり、こちらはハイハイと答えながら書き留めるのに必死でした。

「あとは金銭面のことだね。即ち、このためには」との結びつきの重要性が強く押し出されてくるね。それから、阿部先生を大切に、早くいろんなことを教わり、そして青学の伝統を守り続けて欲しいね。最

終的には 現役一人一人の努力ということにすべて含まれることだね」

「次にクラブ時代の特に印象深い思い出についてお願いします」と質問者。

曾我先輩……「青笛をもらつて、阿部先生に教わりながら調教した毎日のことは、きつと一生忘れ難い思い出になるだろうなあ」こういう曾我氏の中に、過ぎ去つた時に対する一種のノスタルジーの如きものを感じたのは、彼のそのソフトな声の為はかりでは決してないので

「あとは、そうねエ・やつぱり、高等部のコーチをしていた頃の話は、今でもなつかしい思い出として時々思い出すよ。それから僕が大学一年の時、関東トーナメントで三位(注、この試合は毎年三月に行なわれるもので貸与馬形式のもの)になつた時のことだね。こんなところかナ。マツどれが一番とはいえないけれどボクにとつて馬術部での思い出は大切だし、忘れられないなあ。」

「有舞うございました！是非又、馬場の方へもお立寄り下さい」

「では近いうちに、みんなにお土産でも持つて行くとするか・・」これは残念ながら記者の独断によつて書き足されたものでございます。オワリ。



OB近況報告

大正十五年 小山敬吾

私は大正十五年青学英文科の卒業ですが、私の在学時(多分大正十三年頃)青学馬術部が出来たと思います。私はその時入部して馬事公苑などで練習をした覚えがあります。その意味で私はOBだと思います。現在早大正門前で早稲田ゼミナールという予備校を経営して多くのフレッシュマンを青学に送り込んでいます。その中には馬術部に入部しているもの、即ち孫がいる筈です。益々発展を祈る次第です。

昭和十三年 細野日出臣

昨年十月から名古屋に転任しました。初乗会出席の予定でしたが雨の為残念でした。

昭和十六年 篠原和夫

相変わらず田舎にくすぶつて教師生活をしています。田舎の空気もだんだん公害化して住みにくくなって来ておりますが、相変わらず元気です。皆さんに是非一度会いたいと思っております。

昭和三十一年 米谷浩志

母・ハツ(七三才)妻・美奈子(三七才)長男・公一(七才)、次男・昌高(三才)全員元気です。私がすぐ二日酔いになり弱っております。

昭和三十五年 張間睦途

どうも最近は何が重くなり、御無沙汰して申し訳ありません。そこで提案ですが、春秋二回ぐらいOB対現役対抗戦等企画して見たら如何でしょうか。

昭和三十六年 川口絢子(旧・小川)

大阪も三月末で四年になります。上の二人が小学校で、日中は未っ子のみ。平穩無事な毎日です。馬は毎夏山中湖に行った時、子供と共に乗るだけです。

昭和三十七年 高倉彰

最近手綱をクラブに持ちかえてゴルフに凝っている。先日寒風をつけて伊豆国際カントリーへ行っただが、在中合宿した乗馬クラブが横にあり、当時を思い出した感じがした。初乗りに会って六年ぶりで行くつもりだったが、雨で残念だった。卒業して十年、早いもので長女が小学校へ行く年になりました。

昭和三十八年 鈴木宏志

初乗りに会にも行けず残念ですが、いななき十号の出来あがり楽しみです。

昭和三十八年 花村紀彦

昨年も又一年御無沙汰いたしました。今年こそゆつくりと先輩諸氏の御指導を仰ぎたいと思います。勤務先が丸の内から鶴見に移り、時々車で通いますがいつもは満員電車の通勤です。昨年二月に父を亡くしましたが、昨今身心共常態に復したところです。この七月には二世出生予定。やっと責任をはたせゆつくり厩舎で休養と思っております。本年は創部五十周年にあたりますのでそれを記念し、いろいろな行事が企てられると思いますが、後世に伝える立派な部史を編さんしては如何かと思いが……。

昭和三十九年 鈴木敬治

自分はこのところ馬に乗る機会がめっきり少なくなっしまいましたので、ワイフにも乗馬の楽しさを教え、一諸に遠乗りでもしようかと今ワイフのみあるクラブに入会させ練習させております。

昭和四十年 田坂信

月に四、六鞍位馬に乗り、夏は海へ行き、冬はスキーをし、春と秋にはゴルフをし、その合間を見つけて会社に顔を出しております。

昭和四十二年 神谷亮司

いななき編集部御昔昔様です。頑張ってください。

昭和四十二年 宮島康彰

青山学院大学大学院法学研究科私法専攻修士課程在学。二度にわたる全日本女子馬術選手権総合二位おめでとう!

新開、テレビで渡辺さんの活躍を拝見していました。

昭和四十四年 三谷稔

妻・恵子と緑鞍会には是非入会させて下さい。

(高等部卒・馬術部・旧姓吉沢)

昭和四十五年 芦川城次

広告代理店という目まぐるしい社会に飛び込んで苦労しています。それでも燃えています。張り切っています。馬術部の諸君も、頑張ってください。

期待しています。

昭和四十五年 角南良彦

龍星号(登録番号五二四)の体調も戻りつつあり、現役の諸君と試合場にて会える日を楽しみにしています。

昭和四十六年 芳野恭子

現在県の管財課に勤めていますが、九月に県庁乗馬クラブが発足し、又宮崎競馬場で乗っています。新馬同様の馬ばかりですが、障害の試合なども行なわれ、楽しんでいきます。

昭和四十六年 六平潔

研修期間もそろそろ終わりに近づき、また会社のペースにも慣れ毎日忙がしく生活しております。



美しいかたちには、美しい心がある



新しい心の世界が発見できる Feeling Sports

馬の蹄^{ひづめ}!

それは あやしくも甘く 心地よく
まこと

大地と鉄の足が奏でる音楽である

いとしき人のささやきも

蹄の音ほどに

わたしの心をかきたてることはできない

W.H. オーグルビー

日本中央競馬会

もっとも現代的なサウンドをお楽しみください

技術の日立



いまやICカーステレオが時代の主流。サウンドと聞く人のハートとの限りない調和をめざす日立カーステレオは、まさにICイメージの結晶。ハイメカニズムハイコンパクト設計はもちろん、音のひずみ・ワレをまったくよせつけず、魅力ある低音、伸びのある高音を心ゆくまでお楽しみいただけます。

CS-1700IC

本体 ¥37,000
スピーカ(SB-141) ¥6,000

CS-1100IC

本体 ¥28,000
スピーカ(SB-241) ¥4,000

CS-1050IC

本体 ¥24,000
スピーカ(SB-331) ¥3,300

CS-1010IC

本体 ¥20,700
スピーカ(SB-241) ¥4,000

CS-1000IC

本体 ¥23,500
スピーカ(SB-331) ¥3,300

CS-1600

本体 ¥29,500
スピーカ(SB-241) ¥4,000

CS-1500

本体 ¥23,200
スピーカ(SB-331) ¥3,300



CS-1010IC

本体 ¥20,700
スピーカ(SB-241) ¥4,000

HITACHI CAR STEREO



日立製作所
日立自動車部品販売株式会社

〒108 東京都港区港南 4-6-50
電話・東京 (474) 8 1 6 1 (大代)

現役馬匹の紹介

『青留号』

サラリー 鹿毛

片目ーゴンー試合ー障碍ー満点

そうです馬場に向って左の馬房の一番はじっこにいるウマ(じつと目をつぶってあの馬房を思い出して下さい)が、気が高くて、一端なめられたらもうおしまい、馬場中我が者顔に走り回ったり、そしてアー駈足の重たさ！しかしそこは青山の看板馬、人も知るゴンであります。誰がのつても障碍をまたぎ、かつ満点馬であり、一昨年の高校のリーグ戦では最優秀馬匹賞を獲得しました。その上ファンクラブの会員も多く、中にはなかなか強烈な方もいらっしやるようにとにかくいつまでも元気でVIVA GON VIVA 青留 (デアリマス)



『青駿号』

ほくの名は青駿。あつちがう、私だ。ばくは女だったんだ。訂正して私の名は青駿。ところが、みんな私をおいもとよぶんです。くやししいけどしかたないんです。だって、運動後このずんぐりむっくりの体からたち上る湯気を見れば・・・でもこれでもいって言うてくれる人はいるんですよ。その人は私の横顔が素敵だと言ってくれます。誰れだかわかりますか？そう、その人こそ私の御主人様です。その方はこの長髪にもかかわらずいつも私の手入れを熱心してくださるし、まっさきに私に食事を運んでくださるし、その上毎日のように人參までくださるといふ、それはそれはやさしい方なんです。でもこの間なんかはひどかった。その人はある悪い先輩に感化されお手をさせようとして人參でつつたんです。まったくひどいですね、犬じやあるまいし。でも最愛のあの方のお望みとあればこの屈辱に耐えながらも、近いうちに私はお手とやらを、やることになるでしょう。そして、その時から、私は犬になります。



『青貴号』

サラ、黒鹿毛、十一才、名は青貴。

青山の馬場に来てから、はや四年自を迎えました。反動がとて高く、物を見ては暴れるので、始めのうちは部員泣かせの馬でした。何人の人がこの馬から落ちたことでしょうか。たぶん今いる馬の中で、落馬させた数は一番多い馬かも知れません。とても短気な馬できげんをそこねるとかんだり蹴ったりします。でも昔に比べるとだいぶおとなしくなりました。

馬場程度の試合にはよく出ますが、試合でもよく物を見るので、成績はあまり芳しくありません。とてもいい素質をもっている馬なので、これからの活躍が期待されています。



『青笛号』

ばくは青苗でゴザイマス。

エー、でもみんなは「イリザ」イリザと呼んでいきます。最初につけてもらった名前がイリザ・キングというからデス。(ばくは競馬場で走っていました)

ばくはアラブです。体は小さいけれど障碍をとびます。本当はあんまりとびたくないけれど人間がとべ、とびつて言うてうるさいダモン！

でも最近では障碍が好きになってきて、高い(？)のもとびます。みんなぼくのこと子供って言うけれど、子供なんかじゃないゾヨ。エー今年もハリキりたいと思います。馬房にくる時はにんじんもってきて下さいネ。



『青冠号』

彼の通称はパート。何故彼がパートであるのか？それはあのパート・バカラックより名付けられたのです。この名が示すように彼の馬名はクラブ内外に鳴響いているのです。又「馬房新築の立役者は実は彼である。」という意見さえあります。それほど「あばれん坊」で「きらわれ者」の彼に想いをよせている女がいるとか、いないとか。それはその美しい栗毛の容姿によるのでしょうか。その昔、ヨーロッパでは「四白の馬は殺された」とか開きますが、我ラックストーンは四白でありながらもその命を永らえて、調教、調教の毎日が続けられ、幸か、不幸か、増々その悪名を高めている毎日です。しかし、そのパートも調教の成果があらわれてきたようです。その名の通り頭に冠をいただく日も近いことと思われれます。



『青朋号』

利発そうな目、金色に輝く姿態、素晴らしい脚線美、そしてその強じんな肉体と跳躍力、あアなんて彼は魅力的なのかナァーと言ってくれる人がいたらいいんだけど。なんせサラブとは思えないその四肢のギコチなさ、流れるような駆歩のはずが、どういいうけか油をさして走るような駆歩のほゞ、あげくに「さく癖」やつて、暇さえあればグイッポ、グエツいやになっちゃう、アクシ。そのくせ食欲は人一倍激しくて隣りが残した飼だつて何だつてきれいに食べちゃう。ポロといえれば常に水飼の中にブカブカ浮いてるし・・・でもあたしは知っている。彼がクラブの中で一番いい馬だつて。たとえ試合では飛はなくても金色じゃなくつても（これは食事の内容及手入れの欠陥によるものと思われる。）あの瞳！あのふぞろいなたて髪、気は優しくて力もち。ホラ、又になんじん欲しいってよんでるヨ。

青朋号、九才、網島にその姿を現わした時からすでに有望視され、期待を一身に受けていたが、馬場においては飛ぶ障碍も、試合では飛ばず、今までにこれといった



『青蓮号』

我輩は馬である。名を青蓮と言う。通称はギンであるが、これは我輩を認めてギンだと言うのではなく、親の名をそのままとつたものである。仲間もあれば主人もある。そしてあまり住み心地よくはないが家もある。

この家も近く新築されるそう、やっと吹きさらしの北風から逃れられると心待ちにしている。全くの話、この家が台風で倒れなかつたのは奇跡に近く、関東一円を襲つたあの風邪にかからなかつたのは奇跡そのものである。ところで我輩は目下、阿部先生の特訓を受けている。歩様が大きく、反動が小さいのが我輩の長所だと思つている。御主人たちは、我輩の事を顔だけ長くて目も口も小さく間が抜けているなどと言うが、御存知の通り、人間というのはかつてな生き物であるから我輩は舌など出して聞き流す事になっている。将来は、サンジヨル・インターメディアイトなどを夢みている今日このころである。

好成绩ナシ。チエツ！でも今にみてナ。日本馬術史上にその名を残す名馬になるから。



『青凜号』

僕の名前は青凜。アングロアラブです。そして、鹿毛で、丁度スネーフエルをひとまわり小さくしたような感じなので、一度御会いした方は、すぐ憶えて下さいます。

今、もと馬糧庫が僕の小ぢんまりとした住まいなので、是非一度いらして下さい。

冬でも、とても風通しが良好で、体をきたえるにはもってこいです。又、水飼が凍ってしまうのでスケートもできます。

隣は青鬪君がいます。ここは皆と離れていて寂しいので、初めのうち仲の悪かった彼ともうちとけて、この頃ではしんみりと話をするこもありです。

僕の特技といえは、前はお座りでした。この頃はあまりやりませんが、そう言えばこの間、ラクビーグラウンドの草っ原を歩いていたら、うっかりすべってしり餅をついてしまいました。そしたら引き馬をしていた板倉さんがあせって「アツ コラツパカツ ハイッ ハイッ」と怒鳴って、たてがみをつかんで引張り起してくれました。

でもあとで、「おまえが、びっくりした眼で座っちま

った時は、ぬいぐるみの人形みたいで可愛かったよ。」なんて言っていました。

寂しがりやの僕なのに、誰もわかってくれません。話し相手が欲しくって、傍を通る人の洋服を引張ってひきとめようとしますが、いざ服をつまむと「もちろん歯で」(「ヒヤーツー」とか、「アーレー」とか声を出してすっ飛んで逃げていきます)。

どうしても引きとめようと思ひ、ついつい顎に力を入れてしまうと、なぜか「イテーツ」という声を出す人もいます。

そんな訳で、手入れをしてくれる人も大低決っています。皆野郎ばかりで、いや仲士的で、荒井さん、板倉さん、栗原さんです。皆さん一生懸命やってくれますが、隣で手入れしてもらっている青駛さんを見ると、やはりがっかりするのです。

彼女なんかは美女に囲まれ、時には四、五人で爪の先までピカピカ(これは言葉の綾で、本当は彼女毛深いので、体中モシヤモシヤなのです。ハツハツハツ)磨きだしてもらっています。

僕のことを歩く機械と思つて乗ってもらつては困ります。そんな人が乗るとすぐ分ります。僕にも何かを感じる心がありますから。

友として乗り、僕を助けて下されは、僕は喜んで歩きます。喜んで障りも飛びましよう。

生まれて初めて人間の文字というものを書いたので大変疲れました。ではこの辺で。



『青鬪号』

我が馬術部の門番をしているのが青鬪です。というのは、馬場の入口のすぐ脇の馬房から長い首を出し、鋭い目付で馬場へ出入りする人々を一人一人チェックしています。

そんな彼は馬術部たった一頭のアングロ・アラブ種で、東京競馬場で数年過ごし、競馬では不合格となり、淵野辺乗馬へ、そして現在に至るのです。このように流れ流れて綱島に着き、暖かい家庭生活を知らないせいがかよつとひねくれ者で、手入れの時には、名前のごとく人間のとの闘いである。近付くと耳を絞つて噛もうとし、まして腰などに触れようものならバツタのごとく前肢で立ち後肢両方で人間目掛けて蹴つてくるのです。だから手入れは常に数人で行ない、目かくし、耳おさえ、青鬪用特別鼻捻子(人間の手で直接握る)などを用いてやつとこのこと手入れを終わります。

しかし、これだけ暴れるとほとほといやになり、手ぬぎの手入れとなつてあまり華麗な馬ではない。だけど、見かけは足が細くともスマートです。なんだか黒人の体つきのようで歌手のハリー・ベラフォンテのような人を

相想させます。

また反動は高いのですが、障害はよく飛びます。われわれ未熟者が乗っても、ある程度の高さは向けるだけで飛んでくれるので、下級生の障害にはもってこいの馬です。そして、馬場にある障害は練習中にほとんど飛んでしまします。しかし、馬事公苑に行くと、試合前からソワソワし、いざ試合に望んで、日新らしい障害出くわすとそこで失権してしまします。昨年十二月のアパロン大会においても竹柵を飛ぶことがどうしても出来ずに残念ながら失権してしましました。

それに、人が乗ろうとすると、しばしば首を下げるので、夏の合宿で飛び乗り、飛び降りをしていている時に、飛び乗った反対側に落ちた人さえありました。

また、飼いの食いは抜群でいつでも必ずきれいに食べてしまします。そして、練習が終つて水をあげると、冬でさえもバケツ二杯ぐらい飲んでしまうことさえあります。また、これはど寝ワラを汚なくする馬も他に類を見ません。なんといつても寝ワラを完全にミックスしてくれるのです。こんなやつかい者の青鬮も、まだ人間でいう小学校二年生です。これから小学校後半・中学校と勉強し、未知の力を蓄積した楽しみが多い馬です。大器になることを祈りつつ筆をおきます。



スズハヤブサ号

スズハヤブサは去年（昭四六）の五月頃中山競馬場から来た新馬である。左膝故障のため競馬に走れなくなつたのである。現在でもあまりムリをすると破行するが、徐々に回復しているこの馬は競馬の新馬戦に一度だけ出場したのみで、あまりこの馬名を開かれた方はいないだろう。現在明け五才で我馬術部で最年少の馬、馬術の方の新馬障害でゴールした時に正式の名前をもらう予定である。毛色は黒鹿毛、体高の馬格は大型であるが、チョット鈍い所もあるが、前進欲は比較的旺盛、そしてヤンチャで人なつこい。反動は普通か普通よりやや低いので将来人気が出るのは請け合い。そしてこの馬の最大の特徴は乗り手に似てか、何んでも食べてしまうのである。ヨレヨレの寝ワラ、馬銚棒、馬房の壁、自分のポ口に至るまで……



ウィッチウエイ号

余、豪州で生まれる。豪州の天地万物、これ総べて余



を鍛つ。よつて素晴らしい馬格となり百八十万円の値において、高津氏に命頭ける。余、赤道を越え、日本に渡り、その地で阿部氏に会う。この二人、余、素直ならざると、狼狽逆上、たんなる野蠻の行為ぞや、余の背といわず尻といわず打擲を加う。余、純真なる心ゆえ、これに従い大障害馬となる。これ正當かつ、妥當なる言辭である。

余、ドイツへ連れられ高津氏と、兄弟の契を結ぶ。これにより国際大会に入賞する。これわずかに余の満足とする所なり。

日本に帰り、綱島たるへんびな馬場へ来る。その学生たる態度の悪さ、かつ手入れの悪さ、余の食する物、土足たる足で扱つ。

余、憤激のあまり食すすまず。衰弱はなほだしき事、高津氏に訴えるを、これ馬耳東風なり。

編集後記

今年で青山学院馬術部も創部以来五十年の歳月を迎え、増々充実度を加えてまいりました。今年度は、今までOB諸氏及び現役の念願でもありません。一部・二部の合併が実現し、緑鞍会・大学馬術部・高等部馬術部がより強力な絆で結ばれたことは、我々一同喜びに耐えませんが、もう一つの念願でもありません。既述新築の問題も、青木会長始め、OB諸氏と学校関係者の御努力により今春早々完成の見通しがたち我々にとって二重の喜びです。馬術部にとって重大なこの時期に「いななき第十号」の編集委員になったことを大変光栄に思うと共に、事の重大さに責任を感じております。

我々卒業生、男四人、女三人、皆それぞれ個性が強く、一見はらはらのようでも、実は大変まとまっていた学年と自負しています。しかし、「いななき」の編集に関してはまるでの素人はかりなものですから、果して皆様の御期待に答えられるような物ができるか、とても不安に思っています。

この「いななき」を通して、青山学院馬術部の現状が少しでもOB諸氏を始め、馬術関係者の方々に分っていただければ幸いに思います。

最後に、この部誌発刊に当って多大なる御協力を頂きました広告主である方々に厚く御礼申し上げます。

又、色々と発刊に関して助言して下さいました青木会長、植松先輩、那波先輩、稲熊先輩及び原稿を始め、写真、資料等を提供して下さいました諸先輩方々に対して深く感謝いたします。

又、この紙面を借りまして、長い間手を取り足を取り御指導して下さいました阿部先生、佐藤監督、高津氏に心から御礼申し上げますと共に、今後の馬術部の御活躍を御祈りしております。

(原野記)

編集委員

高橋正樹 藤雄二 川野美子 林川子 渡辺しを 溝井周子 永井彦之 荒井良政 栗原啓子 古野啓子

馬場 横浜市港北区綱島上町

青学グラウンド内 馬術部

TEL ○四五―五四―一八二二

(直通)

東京都渋谷区渋谷四、四、二五

TEL ○三一四〇七―二五四六

(体育会本部)

追記

卒業して忙しくなられた原野さん達OBにかわって、編集をひきつぎ、どうにかこうにか完成しました。途中試合、合宿、試験などが重なった為に、発行が予定より大部遅れてしまいました。申しわけありません。

このいななき第十号が、五十年間の青山学院大学馬術部の歴史を築いてきたOBの方々と現役の学生との理解をふかめる意味で、少しでもお役に立てば、と願っています。

(荒井記)

既述新築寄附金名簿

(敬称略)

大井上恒春	昭23 張遠藤	昭43 張義堆	昭13 森政推	昭2 青英次	昭4 青木憲一	昭6 川上政夫	昭8 伊藤政一	昭10 細野日出臣	昭12 青木昇	昭14 羽攻勇	昭16 青木日	昭18 阿部准三	昭20 中越鴻司	昭22 外川新一	昭24 藤野新	昭26 沈野一	昭28 植松英二	昭30 堀内陽一	昭32 森高健	昭34 日高玉恵	昭36 米谷志	昭38 福原美里	昭40 鹿根埋	昭42 藤野吉威	昭44 村野昌	昭46 梅本元	昭48 秋元国松	昭50 大島孝子	昭52 市原昭十郎	昭54 松居清子	昭56 佐藤一貫	昭58 内藤喜嗣	昭60 相馬潔	昭62 渡辺充	昭64 赤嶋田米子	昭66 堅付昭三	昭68 日高妙子
昭45 張義堆	昭47 波本井陽樹	昭49 三谷稔	昭51 大塚まり子	昭53 森康宏	昭55 二木信	昭57 川上政夫	昭59 飯田隆之	昭61 金倉彰	昭63 高倉利	昭65 溝田昌	昭67 藤沢英治	昭69 神重光	昭71 岡良介	昭73 長岡由美子	昭75 細内宏	昭77 山田紀彦	昭79 安井芳道	昭81 柴田昭雅	昭83 佐藤健	昭85 伊藤昭	昭87 木下秀夫	昭89 小野崎	昭91 岸裕子	昭93 鈴木敬治	昭95 石田謙三	昭97 本目晋	昭99 中付武臣	昭101 篠原敬雄	昭103 那波義和	昭105 大塚康彰	昭107 宮島勝彦	昭109 間明子	昭111 金子富平	昭113 笠原宗平	昭115 高津彦太郎		
昭43 張義堆	昭45 波本井陽樹	昭47 三谷稔	昭49 大塚まり子	昭51 森康宏	昭53 二木信	昭55 川上政夫	昭57 飯田隆之	昭59 金倉彰	昭61 高倉利	昭63 溝田昌	昭65 藤沢英治	昭67 神重光	昭69 岡良介	昭71 長岡由美子	昭73 細内宏	昭75 山田紀彦	昭77 安井芳道	昭79 柴田昭雅	昭81 佐藤健	昭83 伊藤昭	昭85 木下秀夫	昭87 小野崎	昭89 岸裕子	昭91 鈴木敬治	昭93 石田謙三	昭95 本目晋	昭97 中付武臣	昭99 篠原敬雄	昭101 那波義和	昭103 大塚康彰	昭105 宮島勝彦	昭107 間明子	昭109 金子富平	昭111 笠原宗平	昭113 高津彦太郎		
昭43 張義堆	昭45 波本井陽樹	昭47 三谷稔	昭49 大塚まり子	昭51 森康宏	昭53 二木信	昭55 川上政夫	昭57 飯田隆之	昭59 金倉彰	昭61 高倉利	昭63 溝田昌	昭65 藤沢英治	昭67 神重光	昭69 岡良介	昭71 長岡由美子	昭73 細内宏	昭75 山田紀彦	昭77 安井芳道	昭79 柴田昭雅	昭81 佐藤健	昭83 伊藤昭	昭85 木下秀夫	昭87 小野崎	昭89 岸裕子	昭91 鈴木敬治	昭93 石田謙三	昭95 本目晋	昭97 中付武臣	昭99 篠原敬雄	昭101 那波義和	昭103 大塚康彰	昭105 宮島勝彦	昭107 間明子	昭109 金子富平	昭111 笠原宗平	昭113 高津彦太郎		

町田乗馬センター



	一 般	学 生
1 特別会員 自馬以外の馬に騎乗する時 50分につき	500円	400円
2 正 会 員 50分につき	600円	500円
3 団体会員 50分につき	600円	500円
4 臨時会員 50分につき	1,000円	1,000円
5 小学生 50分につき		600円

以上は平日馬場内騎乗料金

休日・祝祭日は各200円を加算する…小学生は100円とする。

野外・遠乗・障害騎乗については別に定める。

町 田 乗 馬 セ ン タ ー

東京都町田市図師町1266番地

電話0427(91)3382

所長 浅沼 巳代治